

913.36-Sh51ㄣ



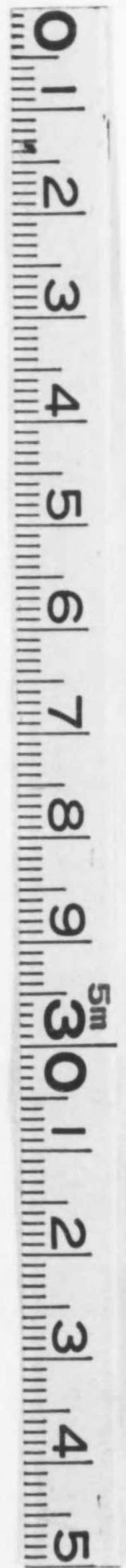
1200500757351

71336  
h51  
2)

事故本

書志込叶多数

2008.8.9



始



27. 3. 20

2

91336

SR51  
(2)

下田歌子著作集



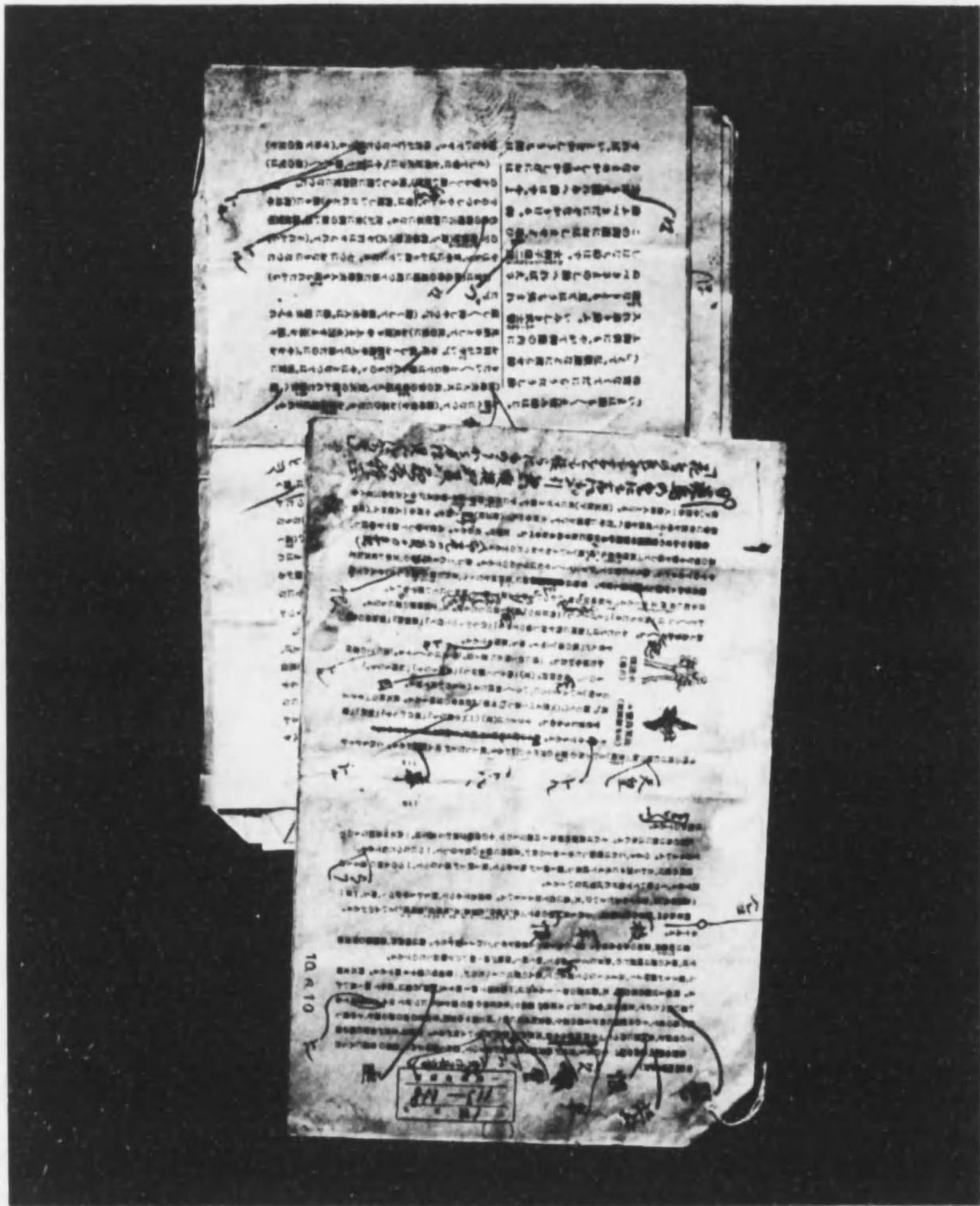
書

第七卷

源氏物語講義

第一卷





629-7

はしがき

本書の首巻を草した際には、あとも引き續いて、拙速なりとも早く纏める積りであつた所が、意外にも右手に腫を生じ、且段々疼痛をも感ずるやうになり、一時筆を抛つに至つたが、幸に又小康の時もあるので、再び思ひ起して、やゝ輕快の時のみ執筆するのやむ無きに至つた次第である。其故その進みはいかにも遅々たるものである。よつて、本文の猶飽かぬ箇所は、他日又、更に訂正することとしよう。

且挿圖、解釋等も云々しようと企圖し考へた事も、先づは大略に止めて、ぼつ／＼と忙間病間に取りかゝると言ふ様な次第で、甚だ遺憾千萬である。

が、ただ自分は本書の作者と同性であり、且その寡居の境遇及び官仕の状態も、何處やら似通つた點もあるやうに思はれたので、作者の心持が少しは汲み取れさうなものだと考へて、筆執る事を思ひ起したものの、さて彌々取り扱つて見ると、作者の天才識見の程度が餘りにも自分と懸隔する事を、今更ながら痛切に認得せられて、此の老年多忙の面かも疾患さへも得た身體に、那の卷迄、且どの程度迄書かれようかも覺束無く、誠に心もとない次第ではあるが、幸に氣力は未だ衰へず、机に對へば清新の興味の湧くを覺ゆるからに、先づ／＼何處迄かを草して斃れて後已む迄試むる事と致さうと決心した譯である。

扱口譯は、なるべく平安朝の優美な面影を存する様に、品位ある詞を以て致したいと考へたが、餘りに品位に捕らへらるれば、又その譯文に譯を加へねばならぬ様な事にならうし、さうかと言つて無暗なぞんざいな詞も使ひたくなく、これにも匪才の敷を發せざるを得ない次第である。

自分が宮廷奉仕は、西の丸御炎上前からであつた爲に、京都宮中の御物をそつくり移されてあつて、なほ平安朝の匂ひの漂ひ残るほどにて、得難き幸を蒙つたとは言へ、何分その當時は職低く齡若く、如何ばかりの事を體得したであらうか。逐年次第に畏き御殊遇を得て、多少は本書の執筆も得るところ無きにもあらねど、中には筆にし難き事どももありて、是亦意の如くにはならぬのであるが、併し兎に角隔世の感ある明治の御代の初年に奉仕した事は、孰れにもせよ有難き事で、古文取材の點にも資する所があつたには相違無いから、先づは時間と健康との許す限り努力する事として、飽かぬ節のみ多き點の訂正補綴は、後進の諸子に依頼する事としよう。

昭和十一年三月

著者

## 凡例

一、本文は、自分が所持の江戸時代刊行の湖月抄を原とし、其他信憑すべき異本の中然るべしと思ふ個所は是を本文に採り入れて（ ）を附し、その省きたる湖月抄の文は、本文の右傍に細字を以て加ふる事とした。

一、送假名は一定したいと考へたが、どうもさうばかりはゆきかぬる所がある。先づ理窟から言はば、動詞などから名詞に變つたむきは、送假名は無くてもよい譯だが、詞によつては、それでは初學の人には讀み悪い事があるから、これは送らねばなるまい。かと思ふと、動詞も常に名詞として多く用ひられて居るものに、態々送假名を付けるのは徒らに冗長になるのみで、寧ろうるさい感じさへも起るやうであるから、省くが當然であらう。一體送假名は、假名に漢字を交せて書く時のみ用ふるものだから、つまり讀み易いと言ふ點を標準として、其の取捨は適宜にし、能ふべきだけ一定の法則に従ふと言ふ位の事に止むるを已む無くした次第である。

一、振假名は、よし常に用ひなれたる漢字でも讀み方の混れ易いもの、及び餘りに用ひなれぬむきにのみふる事とす。故にこれもなるべく一定の法則には従ふやうにはしたが、取除のある事をも餘儀無くせらるるのである。

一、本文及び註釋評說等に引用した諸書は、これを解釋の條に記するに當りては、その冗長に亘らんことを恐れて約語を用ふることとした。近代の書でない向は大抵讀者にも分るであらうとは思ふが、初學者の便を圖つて其の書名を左に列記する。

- 〔湖〕 北村季吟著、源氏物語湖月抄
- 〔河内〕 源氏物語河内本
- 〔徳河内〕 徳川侯爵所藏、源氏物語河内本
- 〔平瀬〕 平瀬氏所藏、源氏物語河内本
- 〔言〕 大槻文彦著、言海
- 〔奥入〕 藤原伊行著、源氏奥入
- 〔河〕 四辻左大臣善成著、河海抄
- 〔花〕 一條禪閣兼良著、花鳥餘情
- 〔秘〕 同 著、源語秘訣
- 〔和〕 同 著、和秘抄
- 〔咲〕 牡丹花宵柏著、咲花抄
- 〔細〕 西三條右大臣公條著、細流抄

- 〔明〕 西三條内大臣實澄著、明星抄
- 〔孟〕 九條禪閣植通著、孟津抄
- 〔岷〕 西三條實澄著、岷江入楚
- 〔師〕 湖月抄の師説、箕形如菴の説
- 〔拾〕 僧契冲著、源註拾遺
- 〔玉〕 本居宣長著、玉小櫛
- 〔玉補〕 鈴木朗著、玉小櫛補遺
- 〔餘〕 石川雅望著、源註餘滴
- 〔評釋〕 萩原廣道著、源氏物語評釋

源氏物語講義

第一卷 目次

一 桐 壺……………一

二 帚 木……………一六

三 空 蟬……………四三

四 附 錄

以上

裝幀……………荒木十畝

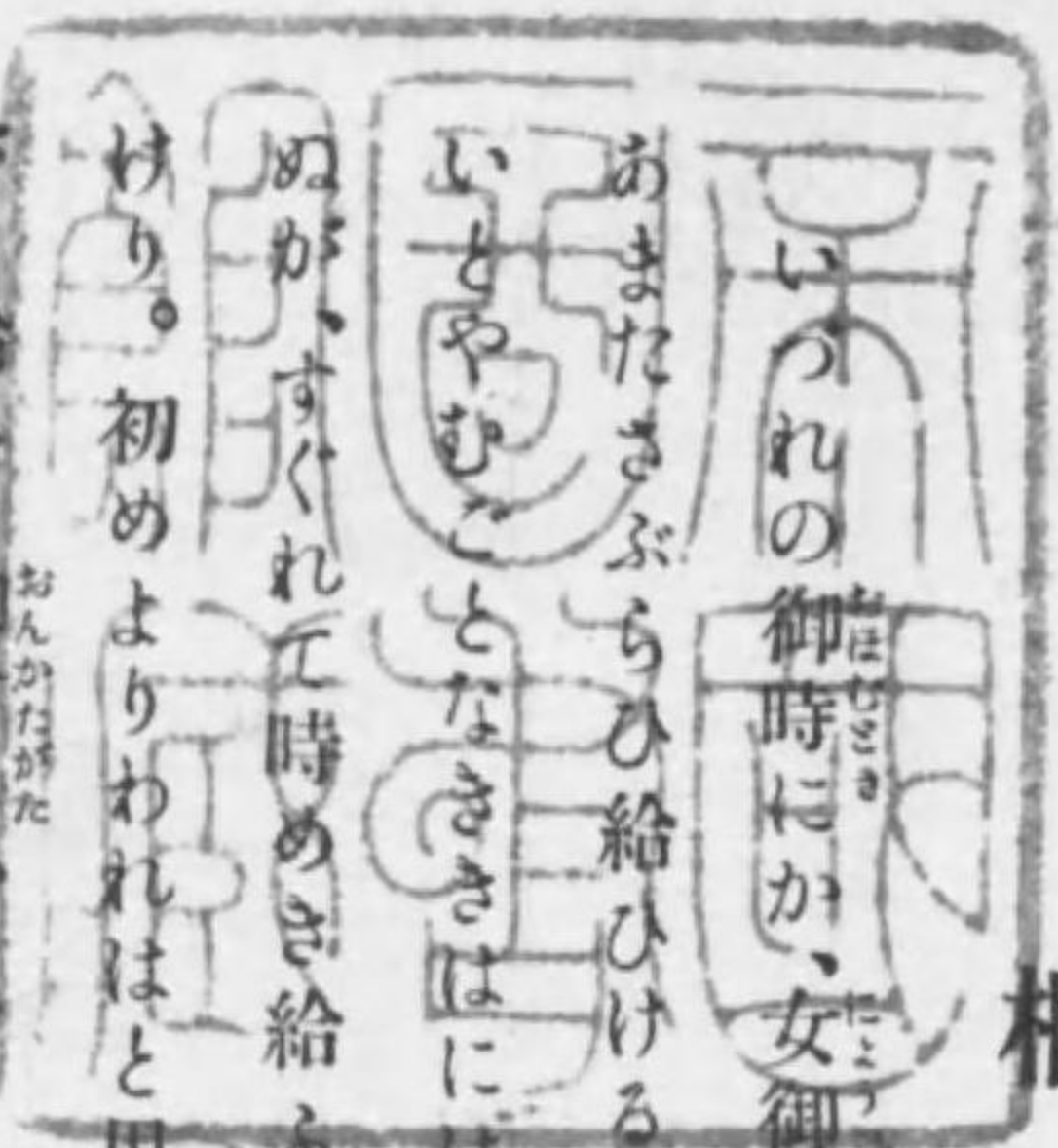


源氏物語講義

第一卷

下田歌子述

桐壺



いづれの御時にか、女御・更衣  
あまたさぶらひ給ひける中に、  
いとやむいとなききはにはあら  
ぬが、すぐれて時めき給ふあり  
けり。初めよりわれはと思ひあ  
かり給へる御方々、めさましき  
ものに貶しめ嫉み給ふ。同じほ  
ど、それより下臈の更衣達は、ま

桐壺

【口譯】 いつの御時代の事であつたか、女御や更衣が大勢に御仕へ申して居られる中に、大した貴い分際ではない(人)が實際立つて、時を得て盛な方があつた(即ち桐壺、更衣)。最初から、我こそは(即ち帝の殊寵を得る者は自分である)と高く止つて自負して居られた方々は、心外千萬な者として、更衣を貶したり嫉んだりされる。(女御などの、自信のある方でさへさうだから、桐壺更衣と)同等、それより身分の低い更衣達は、尙更不安で(焦々として)ゐる。(それゆゑ)桐壺更衣は、朝夕の御奉仕につけても、他の婦人達の心を掻き亂し、(か弱い身一つに)それら

して安からず。朝夕の宮仕につけても、人の心を動かさし、恨を負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよく飽かずあはれなるものにおもほして、人の誹をもえ憚らせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部・上人なども、あいなく目をそばめつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にもかゝる事のおこりにこそ、世も亂れ悪しかりけれと、や

の恨を背負うたのが積り積つた故か、大番病弱になつて行つて、何かと悲觀的になり、(ともすれば門閥の貴に御暇を願つては)里邸へ下り勝であるのを、帝は益々惘然なものに思召して、(一向に)他の誹謗をも御斟酌の餘地も無い程に怒り起して(御寵愛が一層深くなるので)、世間のさうした事の例も引かれさうな、(帝の更衣に對する)御しむけである。  
(後宮の女がたが騒ぐばかりでなく、遂に表がたの)上達部人なども不快げに感じ、目を傍へそらしては(顔を背ける程)、目映い様な(眞面に正視が出来ぬ程、光輝燦然たる、更衣の)御寵愛である。(本巻解釋一〇頁参照)  
唐土(昔の支那唐代)でも、かう云ふ原因からして世上も少し、いけなくなつたなどと(噂をしあふ様になり)、段々、國山人々迄が苦々しく思ひ、心配の種になつて、(唐の玄宗皇帝の)楊貴妃が(動亂事件の)先蹤をも引出して來さうになつて行くので、(當面の桐壺更衣にとつては)工合の悪い事、(即ち立つ瀬が

うやう天の下にもあぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしもひき出でつべうなりゆくに、いとはしたなき事多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにて、交らひ給ふ。

父の大納言はなくなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にも劣らず、何事の儀式をももてなし給ひけれど、とり

無い程)辛い悲しい日に度々遇ふけれども、勿體ない位有難い、帝の思召を纏り所にして、(どうやらかうやら)後宮の(むつかしい)交際もしておいでになる。  
(桐壺更衣の)父の大納言は亡くなつて、(母親のみであるが、併し)母夫人が、古風な由緒ある(名門の)人で、(何事も能く心得て居て注意せられるので)さし當つて兩親が揃つて居て、世間の信望もある、立派な他の女官のかたがたにも引けを取らせず、どんな儀式事の折でも、(立ち列んで、引目もなく)取り調理めて居られたけれども、(何と申しても)これと云ふ確りした後楯が無いため、何かといふ時には、やはり更衣は、たより所が無く心細さうであつた。  
(帝と更衣との御間は、此の世のみならず)前世からの御宿縁が深かつたと見えて、世に又とないほど綺麗な、玉のやうな皇男子さへ御誕生になつた。  
(帝は、御誕生の皇子を)いつ見られるか(早く見たいと)待ち遠

立て、はかばかしき御後見しな  
ければ、事とある時は、なほ寄り  
どころなく心細げなり。

さきの世にも御契や深かりけ  
む、世になく清らなる玉の男御  
子さへ生れ給ひぬ。いつしかと  
心もとながらせ給ひて、急ぎ參  
らせて御覽するに、珍らかなる  
兒の御かたちなり。

一の御子は右大臣の女御の御  
腹にて、よせ重く疑なき儲の君  
と、世にもてかしづき聞ゆれど、  
この御にほひには並び給ふべ

くもあらざりければ、おほかた  
のやむことなき御思ひにて、こ  
の君をば私物に思ほしかしづき  
給ふことかぎりなし。

（母君）はじめよりおしなべて  
の上宮仕し給ふべきさきにはあ  
らざりき。おぼえいとやむこと  
なく、上衆めかしけれど、わりな  
くまつはさせ給ふあまりに、さ  
るべき御遊のをりく、何事に  
も故ある事のふしぶしには、ま  
づまう上らせ給ふ。ある時は大  
殿籠過して、やがてさふらはせ

しく思召されて、大急ぎで（更衣の里邸から）御召び寄せになつ  
て御覽になると、世にも稀な、美しい皇子様の御容貌であつた。

第一皇子は、右大臣の息女なる女御の御腹に御生れになつた  
ので、外戚たる右大臣が（勢力家で）、世上の心寄せ（即ち信望）重  
く、無論疑ひも無く儲君として（皇太子に御立ちになる方と  
て）、世の中の人ももて囃し、大切に御奉護申し上げて居るけれ  
ども、この新宮の御句（鮮明美麗さ）（本巻解釋一四頁参照）には、と  
ても比較にならないのであるから、（帝は第一皇子には）單に皇  
儲としての表向の御情愛であつて、此の宮様をば、眞に我  
（即ち掌中の玉）と思召し、大切に御養育になることが極まりな  
い。

新宮の母君更衣は、最初から、尋常普通の表方の女官として、  
帝に、清涼殿上に朝夕伺候なさる程の地位ではなかつたのであ  
る。世間からも尊敬され、自らも品位を保つて居られ、（その容  
態はいかにも重々しく）上臈らしかつたが、帝が無暗に御傍に引

き付けて御置きになり過ぎる爲に、然るべき（面白い）音楽の御  
遊や、其の他何事に限らず、趣ある御催の時々には、眞先に更  
衣を御召び寄せになる。時としては、帝は翌朝遅く迄御寝過  
しになつて、更衣をば（其の日も其の儘）御側に御置きになるな  
ど（これは長恨歌の「春宵苦短日高起、從此君王不早朝」と云  
ふ意を含めた）、強ひて（いろ／＼の御口實を御設けになつては）  
御側を放さず、御召し置きになるので、自然、更衣は（平女官の聲  
な）身分の重くない者の様にも見えたのに、（流石に今度）此の皇  
子が御生れになつた後は、帝も、特別に重々しい御取扱りに  
なされたので、（更衣に威信が附いた。そこで）東宮にも、懇くし  
たら此の皇子が御座りになるかも知れぬと、第一皇子の御母女  
御（弘徽殿）は、（氣が氣でなく）疑念を抱かれる。

弘徽殿の女御は、人（他の女御更衣達）よりも、一等先に御入  
内になつて、帝の、敬意を御拂ひになる御心持も、並々ではな  
い。（御もち申した）皇子女達も、（既に兩三方）みらせられるか

給ひなど、あながちに御前去らずもてなさせ給ひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この御子生れ給ひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にもようせずは、この御子の居給ふべきなめりと、一の御子の女御は思し疑へり。

人よりさきに参り給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、御子達などもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほ煩はしく心苦しう思ひ聞え

ら、此の御方の御苦情(即ち嫉妬怨言)ばかりは、やはりうるさくまた氣の毒にも思し召された(即ち、帝も女御に對しては、多少氣がかりに御思ひ申上げられた)。

桐壺更衣は、恐れ多い帝の御庇護にお頼り申しては居るものの、自分の四圍には(始終鋭い目が光つて)、貶したり、缺點を探したりしておいでになる人達が多く、而も我が身は病弱で、何となくしつかりしない様子なので、(帝の御殊寵は有難いが)御思ひの増せば増すほど、愈々切ない氣苦勞をして居られる。更衣の御局(御部屋)は、桐壺(即ち淑景舎で、清涼殿の東北隅に當り、距離が最も隔たつてゐる)である。(清涼殿から淑景舎に達するには、承香殿・麗景殿・宣耀殿等の前を通らねばならぬ)。帝が澤山の御方々の御部屋の前を、度々通御になるのだから、(あら、又帝は桐壺へ御いでになると、御召になる事も稀々な)女御や更衣達が、(嫉妬の胸を焦がして)氣を揉まれるのも、無理ならぬ事と思はれた。(本卷評説二六・七・八頁参照)

させ給ひける。

畏き御蔭をば頼み聞えながら、(かけ橋) 貶しめ疵をもとめ給ふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なか／＼なる物思ひをぞし給ふ。御局は桐壺なり。許多の御方々を過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき御前渡に、人の御心をつくし給ふも、げにことわりと見えたり。まう上り給ふにも、あまりうち頻るをりをりは、打橋・渡殿、こゝかしこの道に、あやしきわざをしつ

更衣が参上される時も、餘り頻繁であるをり／＼には、打橋(かけ橋)や渡殿(廊下)のあちらこちらに、けしからぬ事をし(穢い物をまき散らし)て置いては、(更衣を)送迎する女達の衣装の裾を臺なしにするが如き、(我慢して其の儘往復出来ない様な)事などもしてある。又或時は、其處より外に通る道の無い馬道(殿舎の中廊下)に更衣が來ると、其の馬道の前の戸を、此方の人と彼方の人と申合せて、(びたりと閉めて、往くことも還ることも出来ない様にする。かうして更衣の)立つ瀬がない様にお困らせになり、何かにつけて數へ切れぬ程、苦しい事ばかり多くなるので、更衣は大層甚く(途方にくれて)困り切つて居るのを、帝は、一層氣の毒に思召されて、後涼殿(清涼殿の直後)方、殿よりは西に方る)の中に古く居られた、他の更衣の部屋を他方へ移して、桐壺更衣の、控部屋として下さる。(遣はれた更衣)その人の怨恨は、況して持つて行き所の無い程甚しいものである。

つ、御送迎の人のきぬの裾堪へ  
 がたう、まさなき事どもあり。  
 また或時は、えさらぬ馬道の戸  
 をさしこめ、こなたかなた心を  
 合はせて、はしたなめ煩はせ給  
 ふ時も多かり。事に觸れて數知  
 らず、苦しき事のみ増されば、い  
 といたう思ひわびたるを、いと  
 どあはれと御覽じて、後涼殿に  
 もとより侍ひ給ふ更衣の曹司  
 を、他に移させ給ひて、上局に賜  
 はす。その恨ましてやらむ方な  
 し。

【解釋】 いづれのおほむ時。御時にか、下に「ありけむ」とあるべ  
 略す。

いつの御時代であつたかと、態と茫乎書いたのは、即ち、作り物語  
 意を仄めかしたのであらう。(本巻評説二二頁参照)

おほむ時は、おほみ時の香便。「おほみ」と重ねるのは最敬語で、「天照  
 すおほみ神」「おほみたから」の如きにのみ用ひたのであるが、敬語は  
 體段々低下して來るもので、遂には、我々の使用するものを「おみ帯」  
 「おみお汁」などとさへ、僭上して云ふ様になつたのである。

女御。后宮に亞ぐ最高女官、之に亞ぐ更衣と、いづれも帝の御寵に預  
 る婦人である。三位相當。(呀)「女御は無位以上二位三位也。日本には  
 雄略天皇の七年、稚媛(吉備上道女)女御と爲る、是始めなり」(後略)

更衣。四位相當。(師)「此の局にて天子の御衣を召し更ふる故、更衣  
 といふ也。(中略)仁明天皇承和三年、正五位上紀朝臣乙魚に從四位下を  
 授けて更衣と爲す、是始めなり」など、あるが、これは名稱のみで、帝の  
 更衣の役は勤めない。

いと。「最」「甚く」「極めて」の義。下に打消の助動詞の來た場合  
 には、「あんまり」「そんなに」「たいした」などと解する。

やむごとなし。「尊きこと」。「やむ事が出來ない」「捨ておき難い」の意で、「何につけてもさしおかれず」と云ふ  
 のであるから、徳望からでも才覺からでも、優越の人にも用ふべき道理であるけれども、貴い地位と云ふ方にのみ用  
 ふる事となつて居るのである。「やむごとなし」と跳ねて讀む。

目ざまし。「目覺」。即ち、目に觸るゝ事の氣に障つて、いま／＼しいと思ふ意である。俗に云ふ、癢に障るとか、  
 目にあまるやうの意になつて居る。當時は善い方の、目の醒めるといふ方には用ひず、先づ悪い方に大抵用ひて居  
 る。「物事の意外にて目も覺むるばかりなり」「驚きあきれたるさまなり」の意。「玉」「さは有るまじき事と思ひ  
 て、いさどはれる意の詞なり」。

おとしめ。「貶」。「落しむ」「劣れるものと見る」「見さぐ」「さげすむ」など、即ち、蔑視するの意。

下屬。上屬にむかへたる言葉で、藹とは、僧侶が安居の功を積みたる年を數ふるにいふ語。轉じて、一般に年功  
 を積むこと。既に此の頃は、宮仕の女官たちの品位に就いても云ふ様になつたのである。上屬は、大臣攝家等の女  
 より出でたるを云ひ、さうでないのも年功を積みて、二位三位等に進んだ婦人を稱す、下屬は、加茂・日吉等の社家、  
 若くは諸大夫等の家より出た女子を云ふのであるが、こゝでは、大納言の女として上つた桐壺更衣の家柄よりも、更  
 に低い位置の更衣と云ふ意味に使つてある。

あつし。病みて熱の高くなることから來たものらしく、病の篤くなる事、危篤の意であるけれども、現今は危篤  
 とは、瀕死の期をさして云ふが、當時の篤しは、重患といふ位の場合が多い。

里。更衣の生家を云ふ。すべて、宮仕する人の自邸を「里」といふ。現今にても、奉仕中の人が自宅を里といつ  
 てゐる。又婚嫁した女が、その生家をもかくいふ。

あかずあはれなるものにおもほす。「あかず」は「物足らぬ」「あきたらぬ」こと。

「あはれ」の語は、元來歎辭で、「あゝはれ」とか「あゝやれ」とか言つたのだが、憐愍の意にも、面白い事にも、亦悲歎の意にも使ふのである。こゝは「心にしみてかわゆさうな者」の意になる。

おもほし。思ふの敬語。

え。善の義か。「能く」「よう」「敢て」。「え」の下には打消しの語を用ふ。

上達部。「かんだちめ」と讀むが、部とも讀む。公卿・三位以上の官人(但參議は四位にてもかく云ふ)。部は伴のこゝろである。但、大臣は除く。

上人。うへのをのこ。「雲の上人」「殿上人」の事で、即ち、清凉殿中の殿上の間に何候する侍臣の稱である。うちわたして大宮人を稱するが、上達部・上人と並べる際は、四位五位の人をさす。但、藏人は六位にてもかく云ふ。四位五位と雖、昇殿を許されざる人は、地下といふのである。

あいなく。「面白くない」「分別もなく」「何といふことなし」等の意。こゝは「不快げ」と解す。

目をそばめつ。側の活用。目を反す意。顔を反けるのである。又「側目」「反目」など。「つゞ」は過去の意をいふ、助動詞の「つ」を重用す。但こゝは、その事柄を繼續する意。

まばゆき。眞面に正視の出來ぬ程の光輝ある狀。これも長恨歌の「可憐光彩生門戸」から聯想したのであらう。

おぼえ。即ち、おぼゆること。心に留つて忘れぬ事であるから、技術につきて自信のあること。また、人に思はるゝこと。寵愛せらるゝこと。「信用」「名望」「世の聞え」「評判」等の所にも用ふ。當時澤山用ひられた言辭である。

唐土にもかゝる事のおこりにこそ。唐の玄宗皇帝と楊貴妃との事を、例に引いて書き始めたのである。桐壺卷の上半は、白樂天の有名な詩、「長恨歌」が澤山引用してあるから、参考として本卷末尾附録に此の詩一篇を加へて置く。

あぢきなし。味氣なしにて、「わけもなし」「つらし」「面白くなし」「情なし」などの意にも用ふ。俗に、あつけない。こゝは、苦々しく面白くない意。「抄」「無爲(史記)是は除方無き心なり。無道(日本紀)此段無道心の心か。はしたなし。「具合の悪い」意。即ち「立つ瀬の無い」のである。「中間に在つて何れへもつかぬ」意。「中間にてどつちつかず」「取りつきは無し」「つれなし」「不都合なり」「無下にするさま」等の意。

御心ばへ。こゝは、帝の「御情」若くは「御寵愛」の意である。「心ばへ」は、もと「心延」「心の趣」の意。「有情」「趣致」などと解す。轉じて「思召」と釋す。凡て轉解は、つまり語義を意譯して、なるべく讀者をして分り易くせしむる方法である。以下倣之。

父の大納言。桐壺の更衣の亡父、按察大納言。(本卷評説二二三頁参照)

按察は古の官名。地方官の政績を調べ、民情を視察する職。畿内及び西海道には、此の職なし。後には、奥羽にのみその名が残つて居る。

北の方。北の方は、當時貴人の正妻の通稱である。寢殿は南面して居るおもやで、主人の居所であり、客殿であり、奥は北の方にあたり、夫人の居る所と言ふ様な事から起つたのだといふ。北の方の稱は、五位以上に言ふとある。此の頃は、親王方の妃も亦、北の方と稱してゐるのである。

いにしへの人のよしあるにて。〔首書源氏〕には「いにしへの人の」とある。意味は同じであるが、「の」が二つ重なるよりも、此の方が語呂がよい。併し口譯して見ると、寧ろある方が然るべき様に思はれる。「よし」は物事のよつて起るところある意にて、「由緒あること」「いはれある」、又「趣ある」とも解す。故ありてたゞならぬ人にてといふ心にて、昔、由緒ある家の出である事。

親うち具し。兩親揃つてゐること、うちには接頭語である。凡て接頭語は、語勢を強める。

世のおぼえはなやかなる。世間の思はく(又、信望)の立派なること。

はかくしき。れつき(歴)とした「はきくした」「てきばきした」「しつかりした」等の意。

後見。「うしろだて」。本人に見えざるうしろの世話をみると云ふことから、妻の夫を内助し、鬪白の君を輔佐するなどにもいふ。「経済的保証をする」「介錯」「後見」「監督」等の意に通ずるが、併し往々、單に「世話する」の意に用ふる。

し。強意の助辭。

さきの世にも御契や深かりけむ。前の世は、佛教より出たること、即ち、前世からの御約束が深かつたのであらうの意。「けむ」は、過去推量の助動詞。(本卷評説二二三頁参照)

世に。といふ詞は、平安朝當時には非常に澤山使つたもので、「世の中に」といふ意味にも勿論使ふが、それ程の意味も無く、單に接頭語のやうに使用してゐる所もある。例は「よになつかしきもの」とか、「よにましく」と、軽い意味に用ひた所が多いのである。今日でも、方言として残つて用ひられてゐる地方もある。

なおいしい物は世に無い」なども云つて居る。一體敬語なども、段々軽い敬語になり下つて來るものだ。「恐れ入りました」といふ言葉なども、これを若し裁判所で、判檢事の訊問に對して用ひたらば、犯罪を肯定した意にまでならうが、日常むやみに茶葉を出されたに對しても、「恐れ入ります」といふ風になつて來たのである。當時の「世に」といふ語も、これに均しいのである。重かるべきものが軽くなつて、一寸した所にも使ふのである。清ら。「すつきりとあかぬけがして」、その上何となく「品格のある美しさ」といふ事であるが、往々、單に綺麗といふ所にも用ひて居る。

いつしか。「いつしか」といふ言葉は、もと「いつか」と云ふ語に「し」の助詞の加はつたものであるが、早晚の意味に使つて、未來をかけて、待つ意が含まれるやうになつてゐる。それで、「いつしかこゝへ來たことがある」などといふ様に、過去には用ひぬ。例へば、「いつしか櫻早も咲かなむ」等の場合に用ひられてゐる。

心もとながらせ給ふ。心もとなしは「心のいらだつこと」「待ち遠に思ふ」「じれつたいこと」。また「おぼつかなく」「不安」等の意にも用ふ。こゝは帝が、若宮を一刻も早く見たいと、待ち遠に思召す事。

珍らか。即ち「珍らし」であるが、當時は、今の使ひ方よりも、大分重く見て居る様である。

右大臣の女御。一寸聞くと、右大臣なる人の女御といふ様に聞

違へられさうだが、當時は習慣になつて居て、女御あまたある中

に、右大臣の女の某女御の意味。又東宮の御母女御といふべきを、

東宮の女御、一の御子の御母女御を、一の御子の女御などとも稱し

て居る。桐壺更衣の最も苦手である弘徽殿の事も、これ迄はばう

按察大納言——桐壺更衣

として居るが、から判然と書き出して、段々その色を濃くして行くのである。

寄せ。「世間の思ひなし」。「心寄せ」である。すべて、社會の人の望みを屬すること、「興望」「信任」の意にも採る。即ち「一世の信望重々しき」を云ふ。

まうけの君。「儲君」。皇太子の事で、皇位を嗣がせ給ふべく、かねて儲け置かるゝより、かく云ふのである。

もてかしづく。もては「持ちて」の略ながら、他の動詞に冠して、「もてかしづく」「もてあつかふ」「もていつく」などといふ時は、意味が薄くなる。「かしづく」「大切にすること」。

聞ゆ。いふの敬語。今日の「申上げる」といふ詞に似て居る。即ち、言上ばかりではない。「御連れ申上げる」「御誘ひ申上げる」等。「おつれする」「お誘ひする」の敬語と同じで、「御かしづくし申上げる」の意。

にほひ。(拾)には「遊仙窟並に萬葉集に、艶の字をにはふとよめるこれ也。朝日の匂ふ、花の色のにほひなど同じ。下に「繪にかけける楊貴妃のかたちはいみじき」といへども筆かぎりありければ、とにはほひなし「取合せて見るべし」とある。併し、これだけでは云ひ盡せぬ。耀く光のつゝまれて深みのある様子の意、容貌のうつくしくめでたきをさしていふ。にはほひは色・形・光などにも用ひ、猶、餘韻・餘情・餘光とでも云はうか、説明し難いが、深い氣品ある美しさなどに云ふ。

御思ひ。思ひは「思ふ事」「考へる事」、轉じて「喪中」「思量」ともなるから、御思ひを帝の御愛情と解して置く。

(母君)はじめより云々。湖月の本文には「母君」の二字は無い、傍書に「イ母君」とあり、(河内)(徳、河内)にも「母君」とある。ある方がわかりがよいので、これに従ふ。

上宮仕。清涼殿上の御奉公といふ事。上は天子をおさし申す。昔は、帝の御側に仕へる女官が別にあつた。近

く維新迄は、武家大名にも「表女中」といふがあつた。即ち、殿の女中、奥方の女中、側室の女中等々である。

上衆。上臈といふに同じで、貴人の意味である。

わりなく。わりは「理」の略で、つまり「道理なく」「わりわけられず」「分別する事が出来ない」。俗に云ふ「むしやうに」「無暗に」と云ふほどの事であるが、昔使つた意味は、一寸、充分には説明し難い。

まつはさず。絲等の物に纏はる如く、「からみつく」「まぶれつく」等の意で、御側に引きつけて放ち給はぬ意。

「わりなく纏はさせ給ふ餘りに(中略)あながちに御前去らず云々」は(長恨歌)の「承<sub>レ</sub>歎<sub>レ</sub>侍<sub>レ</sub>宴<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>閑<sub>レ</sub>暇<sub>レ</sub>。春<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>春<sub>ニ</sub>遊<sub>ニ</sub>夜<sub>ニ</sub>、專<sub>ニ</sub>夜<sub>ニ</sub>」のこゝろであらう。

御あそび。當時は、音楽全盛時代であつたから、何かの興と云へば、第一に音楽を奏するので、「あそび」といへば、音楽の事にいふやうになつたのであらう。英語の play に均し。但遊戯にも亦かくいふ。妓は、音楽の方である。

まうのぼる。參<sub>上</sub>の音便にて、まうと云ふ。

大殿籠。寢殿に入る意味で、御寢になること、「みとのごもり」とも云ふ。(本卷評説二二三頁参照)

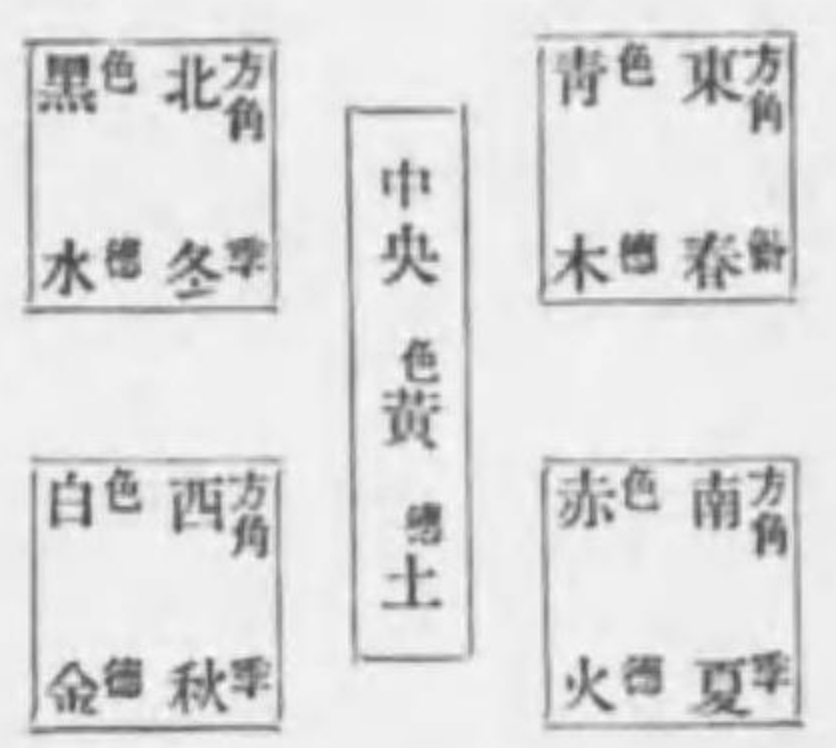
もてなす。「とりなす」「取り扱ふ」「あしらふ」などの意を含みて、こゝには「召し置かる」と解す。

おきて。「定め」の意で、「さうさせようと思ふこと」。後には「しきたり」「法度」「法制」の意にまで展ぶ。

坊。妓は東宮坊。儲君のおはします所。東宮を春宮と書くことは、支那の上古に定めた、後圖の義に起因して居る。

往昔、市街を行政上區劃せる部分の名。平安の京にて方四十丈を町とし、町四を保とし、保四を坊とし、坊四を條





とし、坊の間に大路を通ぜしもの。まち／＼に割つて、碁盤目なりに各一區劃をなし、役所又は役人・使人等の住む所を有するを坊と云ふ。僧寺を寶坊といひ、佛教の方では、坊をもつてゐる人の事を、坊主と言つたものであるが、今日では、その尊稱が、非常に下落してしまつたのである。

**ようせずは。** 俗に云ふ「悪うしたならば」である。もつと軽く云はば、「若しかしたら」「ひよつとしたら」などの意。

**いさめ。** もと「勇め」にて、他を激勵する意なりと言ふ。こゝは「苦情」の意に取る。

〔言〕「禁止む」「他の非を告げて誠め改めしむ」「諫言す」「異見す」。

**なほ煩はしく心苦しう。** 他の人の譏りは、耳にもお留めにならぬ帝も、この方だけには困つたたと、一寸痛く気が／＼に思召すのである。

御蔭。帝のかたじけなき御心ばへの、たぐひなきをいふ。「古今、二十、大歌所御歌、東歌、常陸歌、筑波根の此面彼面にかげはあれど君がみかげに増すかげはなし」とよんだ歌から引用して、みかげといふ事をよく使ふのである。

**疵をもとめ給ふ。** 桐壺更衣の落度を探さうとする人ばかりであり、あやまちを求め出して恥をあたへようとするといふ意。(河)「所<sub>ニ</sub>惡<sub>ク</sub>則<sub>チ</sub>洗<sub>テ</sub>垢<sub>ヲ</sub>求<sub>ム</sub>其<sub>ノ</sub>疵<sub>ヲ</sub>」(家語)「吹<sub>キ</sub>毛<sub>ヲ</sub>求<sub>ム</sub>疵<sub>ヲ</sub>」(漢書)。「後撰、十六、雜二、いたく事好む由を、時の人いふと聞きて、高津内親王、なほき木にまがれる枝もあるものを毛をふきさすをいふがわりなき」。

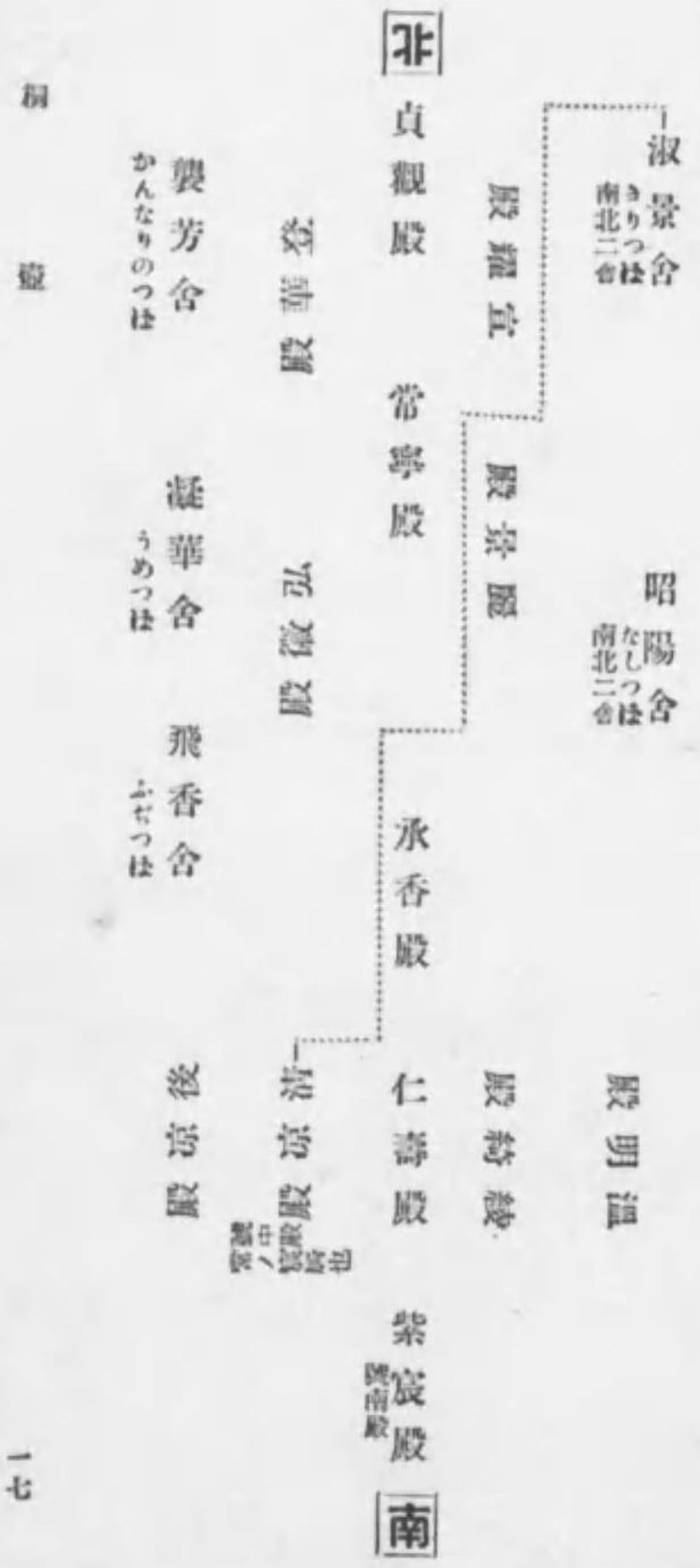
〔釋〕「疵はあやまちなり。漢書の吹<sub>キ</sub>毛<sub>ヲ</sub>求<sub>ム</sub>疵<sub>ヲ</sub>といふ語に依てかゝれたるべく云々」。

**なかく。** なから／＼(半々の意)。「なまなか」「なまじひ」「却つて」の意味にも使ふ。謡曲の「なかくの事」と云ふのは、足利時代の詞で、此の意味とは違ふ。

**御局は桐壺なり。** 桐壺は淑景舎の中庭に、桐樹を植えてあるからかく云ふ。宮中五舎の一。五舎とは、即ち(昭陽(梨壺)) (飛香(藤壺)) (襲芳(雷鳴壺)) (凝華(梅壺)) (淑景(桐壺))である。(本卷評説二六頁参照)

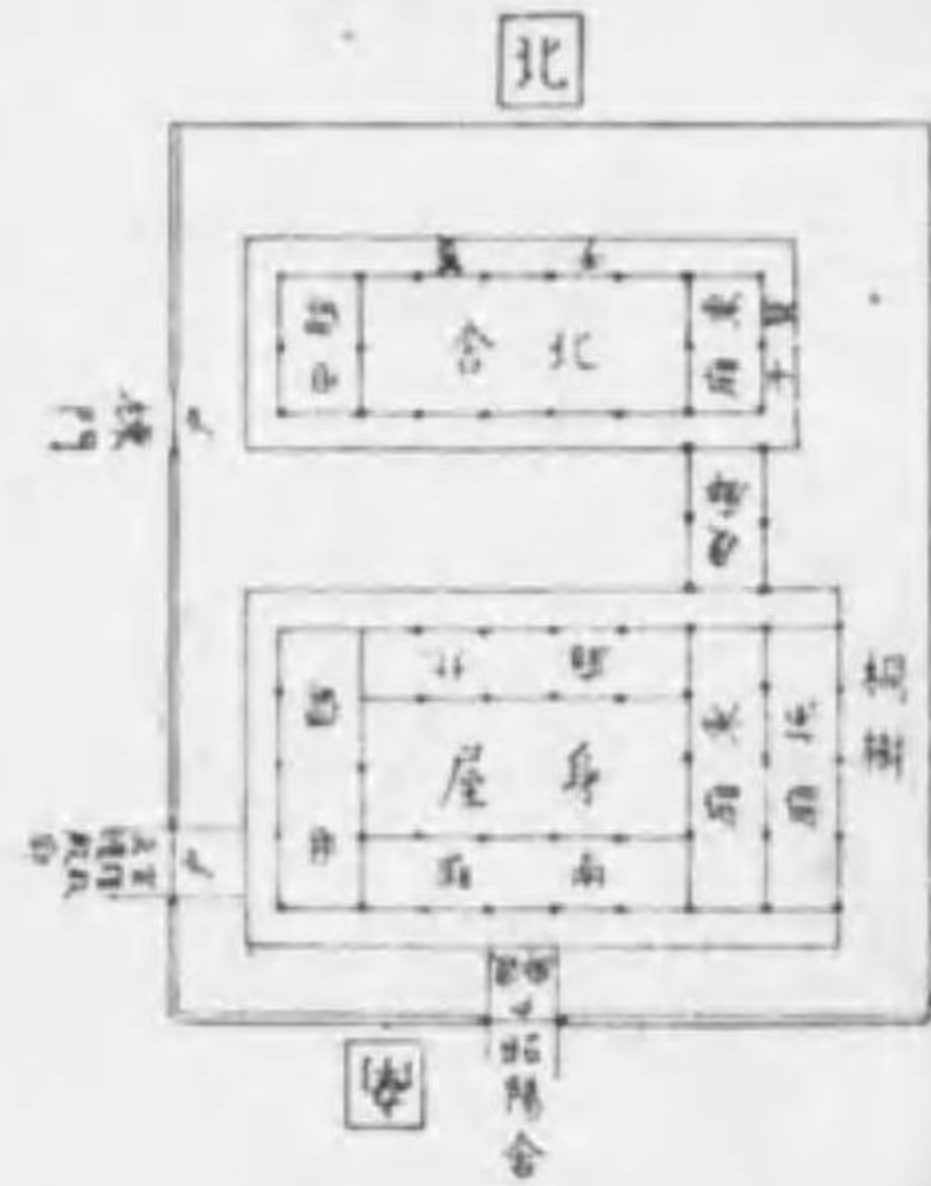
更衣の事も、こゝで始めて、判然と居所を示した。

桐は、玄蔘科に屬する喬木である。今は往々、山野などにも自然生のものを見ることもあるが、やはり、原産地は朝鮮なりといひ、梧桐は支那なりといへば、もとは舶來輸入のものと見える。前述の如く、宮廷の壺に植ゑられたが



(載所釋餘語物氏源)

淑景舍(桐壺)略圖(源氏物語考證圖)



如きは、或程度迄翫賞の意味があつたのであらう。(本卷評説二九頁参照)

御前渡。おむまへわたり。「わたり」は、最初は祭の行列の練り行く事に云つたのが、一般に人の「ゆくこと」「通ること」になつたといふ。今も「御神輿が渡る」と云つて居る。

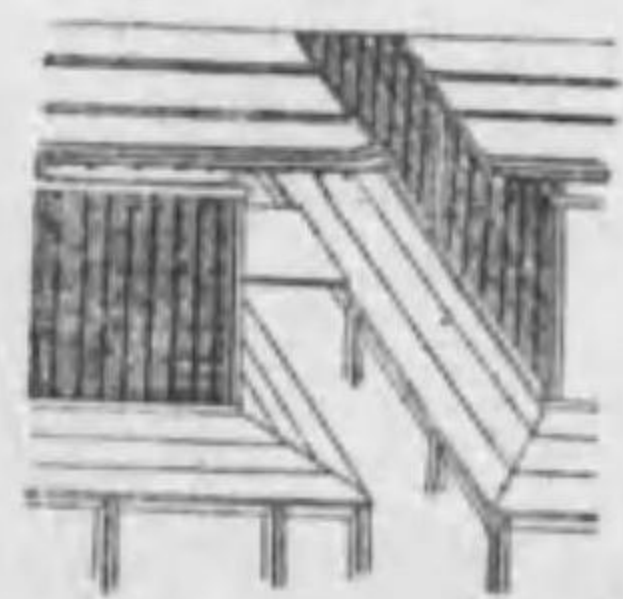
打橋。「移し橋」「打ち渡し橋」。殿宇の間に假に架けて、何時でも土間の通行など必要の時は、便宜に取りはずす様にしてある。(下圖参照)

渡殿。渡り殿の約語。今の廊下。渡殿には二種ある、細殿・渡廊。(下圖参照)

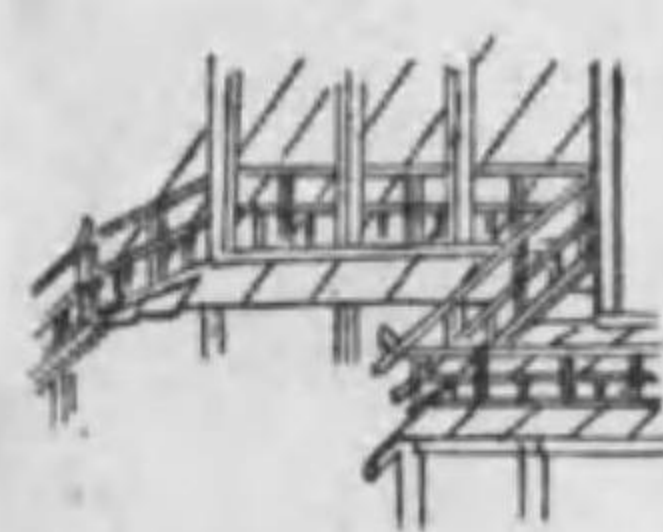
きめの裾。桐壺更衣が侍女の、衣装の裾である。(本卷評説二九頁参照)。

まさなきこと。「よくない事」「不都合な事」。

馬道。めんだう。めんだう。縁の事。(釋)「伴雄云」馬道、めんだう、共に同義にて、和名抄に、辨色立成云、向<sub>レ</sub>堂之道也とあるが如く、殿中の真中の板敷をいふ也。簀子よりつづきて孫廂・廂・寢殿・身屋を貫通して直行すべく、わざと構へたる板敷の道なり。さて、前後の口に妻戸あれど、晝も夜もあけ渡しおきて、宿直の人などの往來の便とせり。但殿舎ごとに必ず馬道あるにはあらず、仁壽・承香・常寧・温明・後涼・弘徽の六殿に限り



(圖釋證考語物氏源)橋打



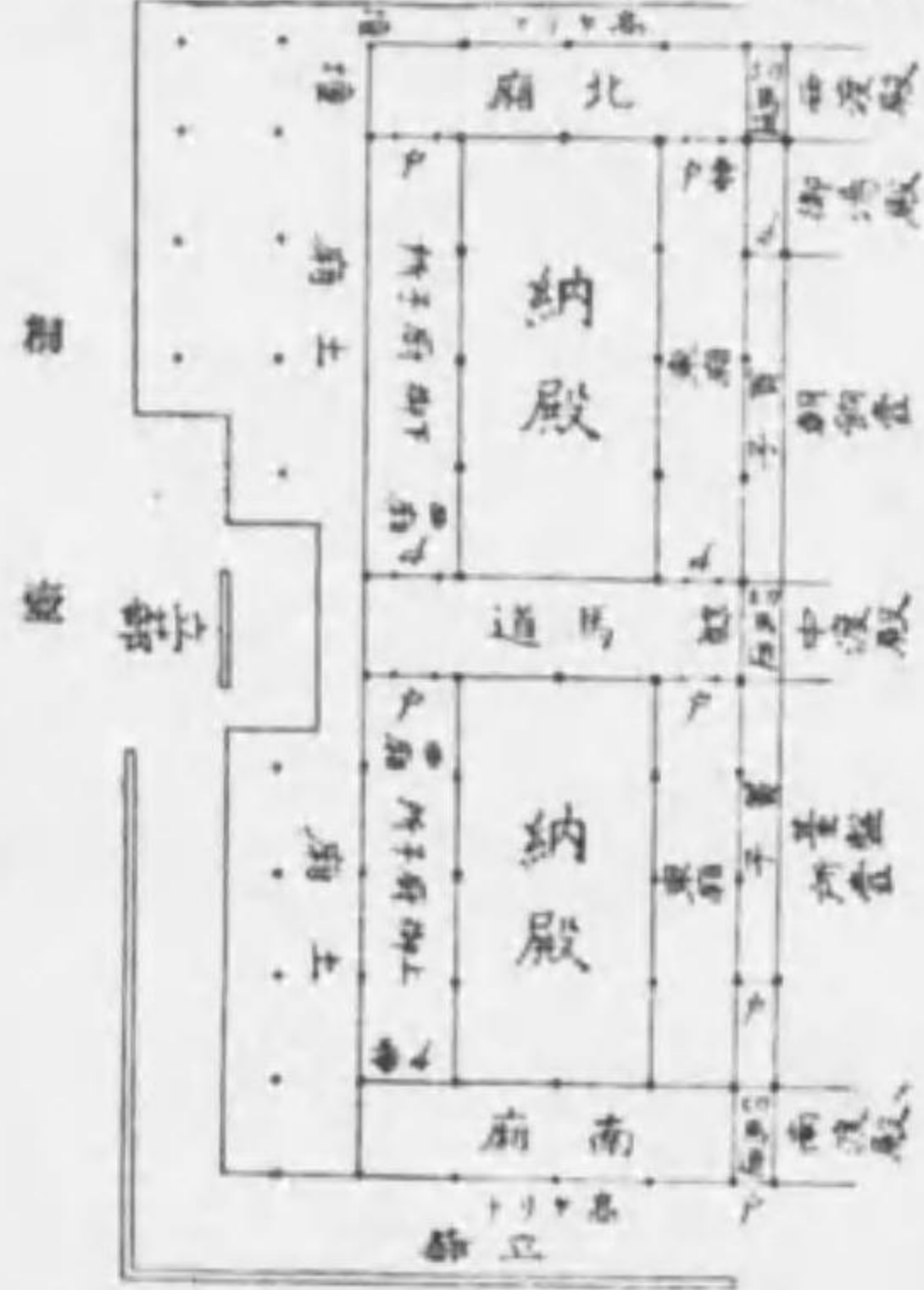
(圖釋證考語物氏源)殿渡

(證考圖裡内大)道馬



て、その他は清涼殿と此の庇の宣耀殿の南に、切馬道とであるのみ也。かれ思ふに、むねとは天皇御通のための設なるべし。武家さまに、大廊下といへる所と同じ趣なり。「めんだう」は「間道」の約れる意の語なるべし。(本卷評説三〇頁参照)。  
えさらぬ。よう避けられないの意。そこより外に通る道の無い事。  
後涼殿。「こうらうでん」。清涼殿の西隣の御殿。

(圖釋證考語物氏源)圖略殿涼後



うへつぼね。平生の居間としての局、即ち一の殿舎のほかに、帝の御座の近くに、別に休息所として賜はるところの局。これは、御寵愛の厚い方に賜はるもの。  
〔箋〕「まうのぼり給ふ時に、かりそめの休息所などの局に給ふ也」。  
又云「中宮のまうのぼらせ給ふ折は、清涼殿の御座のかたはらの一間を、上局に給ふ定まれる事也」。又云「弘徽殿・藤壺の外には、上局を給はる事なし。桐壺更衣に上局を給ふ事、非例

也」〔五〕「弘徽殿・藤壺の外には上局無之。」

【評説】 桐壺卷は、申す迄も無く發端の卷である。既に諸家の説にもある如く、此の卷は、一つぼつりと單獨的に出來て居るやうで、一寸、他の卷とは聯絡が無い様でもある。故に此の卷は、後から作り足したのではあるまいかと云ふ説さへ出た譯であらう。

が、段々熟讀翫味して行くと、他の五十餘帖はやはり、此の卷から生れて出た事が分明する。丁度、温床中に培はれて居る植物の、他日葉を付け枝をさし、花を開き實を結ぶ、その基因は稔と先づ、地中に胚胎して居た様なものである。それが漸次生長して、繁茂して行く。其の根本に注意しなければならぬのと同じ事であらう。故に、能く此の卷を腦裡に藏めて置かないと、他の卷が解り悪くもあり、趣味も十分吸收する事が出來ないであらうと思はれる。

さて、此の物語を繙かれる人は、既に十分承知の事であらうが、當時は、身分ある人の名を呼ぶ事を失禮とした習慣であつたから（勿論今でも長上に對つては名を呼ばぬが）、何れの著書にも、多く名が載つて居ないし、且純國文には、主格の隠れて居る個所が少なくないのである。殊に此の作者の文章は、最もそれが多く、且文章に段落が少なくて、長く續いて居る。それ故、讀みなれる迄は餘程注意しないと、臘夜の花を模索する様な、覺束なきを感じるのであるが、少しく馴れて來ると、段々解り易くなるし、其

所にまた、えも云はぬ深奥な情趣を味ひ得て、やはり、他には一寸見られない、靈妙な名文であることを會得し得るのである。總じて、何書によらず發端の卷は、餘り面白味の無い方が多數である様だが、此の桐壺卷は、非常に趣味深甚で、すつかり魅了せられてしまふ。文章の洗練も亦、終末の方の卷よりも、すつと熟い様に思はれる。それはその管で、大抵長篇を書くには、長い歳月を要する。さてその間には、何といつても、最初よりは、自然段々筆が熟練してゆくものである。故に、更に初卷を繰り擴げて見て、推敲訂正を試むる事は、誰しもすべき筈であるから、惟ふに、この物語の作者も、恐くはさうしたことでもあらう。が併し、作者は、どうも餘り長命では無かつたらしい點から推測すれば、尙更の事、終篇迄は十分改訂し得なかつたので、末卷よりは初めの方が、整つてゐる次第であらう。

○いづれのおほむ時。伊勢集の冒頭に「いづれの御時にかありけむ、大御息所と聞えける御局に、大和に親ありける人侍りけり」とあるが、諸説先づ右に倣つたのであらうと云ふ。或はさうかも知れぬ。

「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり」。（竹取物語）

「昔、男うひ冠して、奈良の京春日の里に知るよしありて、狩にいにけり」。（伊勢物語）

「昔、式部大輔左大辨かけて、清原のおほぎみありけり」。（宇津保物語）

の類で、猶近世に於いても、「昔々、某處に爺と姫とあつたとさ」。（桃太郎の童話にもある如く）かう

云ふ書き方が、先づ従來の小説、物語等の冒頭の書き方の例であつたらしい。

扱、此の「いづれの御時にか云々」の書き出しは、當時の物語、お伽噺おとぎばなしに多くある所の慣例に従つたか  
の様に思はれて、舊套を脱しない様であるけれども、頁を繰つて行く間に、何とも云へぬ新味も、情趣の  
深みも、次第々々に高められて行く心地がする。

山田博士が、この物語の音楽研究に筆を執られた中に、源氏物語は、その當時を書いたものではなく、  
過去を書いたものであらうとの考は、然るべきであらうか。それは、博士の研究の音楽の上から、既に  
當時に名は存して居ても、彈手の無くなつてゐる樂器等からも推理された事であらうが、さう見ると、ま  
さに桐壺卷の冒頭に、「いづれの御時にかありけむ」も、可い加減の事でなくなり、且尊貴の御あたりの  
事を、遠慮無く書きもし、批評をする等にも、甚だ好都合であつたらう(勿論登場人物のモデルは、その  
時代人も適宜に取り入れたではあらうが)。

さて、發端の主なる所の、桐壺帝の寵姫桐壺更衣は、先づ中流の上位、若くは上流の下位に置いて書か  
れてある事も、偶然か寓意か、恐くは寓意であらう。帝の殊寵が盲目的に、彌が上にも更衣に加はつて  
行くのに、當人更衣は身も心も弱く、常に慎つとましく恟々として、心細げに物思ひ勝である。彼更衣は絶  
世の美人で、教養もあり技能もあり、殊に當時の生命とした情趣豊かに、用意深く、物のあはれを知る事  
も、亦特別に深甚でありさうな女性である。それが君寵に誇らず、氣品も落さず、厭もつかず身をもて

なしつゝ、漸く天恵を得たかの様にお持ち申した物語の主人公、玉の如き皇子、後の光源氏の君が僅に  
三歳になられたのを残して、他の嫉妬憎惡の執念を溶び、はかなく露の消ゆる様に亡たづなつた。かくて、忘  
れ形見の皇子光君に、讀者の同情と最良とを集めた手段は、見事に適中したのである。

○下臈。尙一説には、やはり僧侶の方の稱號と同じく、桐壺更衣よりも後進の女官で、また年功を積  
まぬ輩だとも云ふが、やはり解釋にいつてある方が、普通で然るべしと思はれる。(本卷解釋九頁參照)

○父の大納言。桐壺更衣の父按察大納言。此の讀み辭に、昔は口傳と言ふものがあつた。大納言と  
普通に讀まず、「だいなごん」又は「じあーなごん」と讀むといふ。これは、足利時代中頃の歌人に、逍遙  
院實隆(三條西家、宗祇の師)といふ人があつた。此の人が源氏物語を講ずる時、正しい發音をしないで、  
右の様に云つたのを、却つて誤り傳へたのであるから、採るべき事ではないとある。此の説然るべきで  
あらう。今一つは、「大納言」に力を入れて讀め」と云ふのである。これは、讀み方の抑揚法で、それはこ  
このみではない。猶能く研究すべきである。今は讀み方に、兎角注意を拂ふ點が少ない様に思はれる。  
○大殿籠。明治時代は、單に「みこし」と申上げた。現今も恐くはさうであらう。「聖上はみこしなつ  
た」の如し。それは、「御格子を閉し奉る」の意味でもあらうか。而も約言してかく申した。

そして、陛下が御寢所へ入御なると、内豎やうの人が、「みかうし」とふれる事になつて居たのである。  
○ささきの世の契。佛教の方では過去・現在・未來と説き、前世・現世・後世を三世と云ふ。その因果應報

を巧みに説いてある。又前世の契といふ事は、斯ういふ風に云つてある。即ち、親子は一世の縁、夫婦は二世の縁、君臣は三世の縁なりと云ふ。これまた上手に説いたものだ。何と云つても、血を分けた親子の情程深いものはなく、これは切つても切れない縁である、故に一世の縁と軽く云ひ、夫婦は、現世及び前世に於ても夫婦だつたと云ふ(又或は、夫婦は現世と後世と縁があるとも説く。宿世の縁淺からずなといふ事より見ると、先づ前説の方だらう)。夫婦は極めて親密なるものとは云へ、何と云つても、他人同士が相配して一つになつたものであるから、その結合の固きを期して、斯う云ふのもあらう。併し、夫婦の間には愛も生じ、子といふ鏡かたがみも出来ようが、君臣の間に至りては、殆ど全く、義理によつてのみ結ばれるものであるから、三世の縁なりと、非常に深く結びつけて説いたものであらう。こゝでは、夫婦の前世の契の方で、「帝と更衣との、宿世からの結ばれた深い縁であつたとみえて」といふ意である。

皇子女御誕生の時は、必ず生母の里邸へ下つて分娩せられるのが、當時の慣例であつた。即ち、作者紫式部は、その仕へ奉つた彰子中宮が、御里邸御父道長公の許にて、兩回迄二皇子御誕生の事を、日記に書いてゐる。又此の物語中にも、藤壺中宮の御里邸に於いて、冷泉院を御誕生なされ、源氏君の息女明石姫が、皇子御誕生の都度、六條院(御父の私邸)へ御下りの事を記してゐるのである。

皇后(又中宮)のみならず、女御や更衣が澤山おいでになつて見れば、勢ひさう云ふ風にしなければならなかつたであらうが、併しこれも、神に對して穢れを忌む所から、上代には産屋うぶや、即ち産室は、母屋と棟を離して建て、其所で分娩した舊例からも、繼續して來た事であらう。

明治の御代は勿論、大正の御時代迄も、御産所の御殿は、宮城外に御別に在つて、其所に於いて、皇子女は御誕生あらせられたのである。

併し、廣き宮城の事であるから、其の中に於いて、さやうな御慶事は執り行はせらるゝが御至當の事であらう。現代は、すなはち宮城内に於いての御誕生を拜する事になつたのは、誠に畏い、有難い事である。

麗人更衣は、四面楚歌の聲の中に立つて戦ひ通して行くのには、餘りにも心身共に蒲柳の質に過ぎる。限りもなき帝の愛撫の御手を掲り抜けては、慈母の在す寂しい里邸へ下つて、心の限り泣いた事であらう。

無上權を有たせらるゝ至尊として、深甚なる同情が湧き、強烈なる御憤懣の勃發せられるのも、亦己むを得ない歸結であらう。「朕が最愛の寵姫を何とする。朕が思ふ儘に庇護して遣はさう」と、逆鱗になつて、遂に、寵姫反對者の班はんであらう所の、後涼殿の更衣を他所へ追はせられたのも、どうもさうありさうで、誠に不自然らしくない書き方である。

其の中にも、桐壺更衣が最大の強敵は、弘徽殿の女御であるから、帝は常に、御氣障りにも忌々しくも思召して居られたであらうが、「此の御いさめをのみぞ、なほ煩はしく心苦しう思ひ聞えさせ給ひける」

とある。なる程、極端に更衣を御熱愛遊ばされる中にも、一方には、弘徽殿の事は多少御氣が、りになつて成らせられる點なども、實に能く人情を穿つて居る。

併し、桐壺帝が、徳川時代の御家騒動に往々ある、暗愚の君侯とは趣を異にして居られるところも面白い。

又、帝が桐壺更衣を御殊寵の有様は、すつと長恨歌を引用して、唐の玄宗帝が楊貴妃に感溺された状態を、大分寫して居るが、その貴妃は妖嬈型であり、従つて不純であつたのに反して、更衣は純真であり、淑女型である事も、随分面白く變化して、書きなしたものである。

○「御局は桐壺なり」と先づ、更衣の居所を簡單に抑へて置いて、そろ／＼更衣の動作、及びその苦悶の狀を書き下して行く所、極めて自然的で、なだらかな筆づかひである。

又、更衣には讀者が十分同情を持ち、最負する様に、筆を極めて書き立てながら、一方、反対側の心にもなつて、「ひまなき御前渡りに、人の御心をつくし給ふも、げに理りと見えたり」などと書いたのも、行き届いて居る。

此の「あまたの御方々を過ぎさせ給ひつゝ、云々」の條では、「湖」には「更衣の局へ帝の在して、御方方の前を通り給ふなり」とあり。諸氏の説、これに讚不讚區々である。自分も「ひまなき御前渡り」に不審を抱いた。「ひまなき」は、餘りに帝の渡御として頻繁過ぎるし、又帝の側から云つて居るのに「御もなつたであらう」。

又、後段更衣が危篤で退出の所に、「母君泣く／＼奏して罷出させ奉り給ふ」とあるは、女の重病で、母が局へ參つて居る所へ、帝の入御なつたか、或は又、急に病勢増進の報に驚いて母が駆けつけたか、兎に角、母から帝へ歎願した狀である。勿論これは、危篤の場合であることでもあらうが、此の母君の詞も、かねて帝へ御近くして居た様に受け取られる。帝と母との御消息の御贈答でも、餘程御近しい様であるが、當時の習慣上、老いたる婦人が此方から出かけて、清涼殿へ參上する筈はないから、帝が時々淑景舎へ御出でになつて、自然御物語も聞え承つた事であらうと思はれる。

後撰十五、雜歌一、「まだ后になり給はざりける時、傍の女御達そねみ給ふけしきなりける時、御門御ざうしに忍びて立ちより給へりけるに、御對面はなくて奉り給ひける。

嵯 峨 后

言繁ししばしは立てれ宵の間にいくらむ露は出でて拂はむ」

これは、皇后とられた立派な御身分ではあるが、併し、生家は内舍人清友の女に在した。それが、まだ立后前であられる所へ、帝が忍んで成らせられ、そして、嘉智子(后)が「今は都合が悪いから、御入り下さるな」と、御断り申し上げられたのである。これ等を思ひ合すると、やはり、こゝも〔湖〕の説に、寧ろ賛成すべきであらう。

なほ、この巻の末段、藤壺へは、帝はしばし、渡御なり、弘徽殿などへも、折々渡御なつた様であるから、殊寵の桐壺へは、よし女御より一段低い階級の更衣なればとて、堂々たる立派な淑景舎といふ御殿を構へて居るのであるから、帝の随分繁く渡御なつた事も、全然無きさうな事ではないと思はれる。

これも、自分が宮中奉仕の頃の事であるが、恐れながら明治天皇様は、常に整然と御定まりになつて居る御居間、又は御格子の室(御寝所)等に成らせられ、定つた御廊下を通御になる外、幾らも離れて居ない申之口へも、御差覗きも遊ばされなかつた位である。それが、御炎上後の舊赤坂御所で、極めて御狭い處であらせられたにも關らず、左様であらせられた(最も御休日には御前庭へ御成らせられて、盛に御活動遊ばされたが)。それゆゑ、丁度源氏物語を繙いたりして居た時、たしか税所敦子刀自だつたか、「今の御事を考へると、桐壺更衣の局へ帝が度々成らせられたなどと云ふ事はあつたらうか」と申されると、老年の某女官が、「どうも昔はさう云ふ事があつたらしい。御下(即ち命婦)の所へさへ、昔は

聖上が成らせられた事があるらしい」と云はれた。それ故、自分はなる程と思つて、「さう云ふ風であつたから、今の所謂御下どころの伊勢が、宇多天皇の皇子を御誕生申上げた等の事もあつた筈です」などと、敦子刀自と談り合つた事を追懐して、参考の爲に、茲に加へて置く。

○「御前渡り云々」の御は、帝の御動作即ち、前御渡りの意にとれぬこともあるまいから、先づさう解して置く。さういふ書き方の例も、全く無い事もないから、これでもよからう。

宮中五舎の中、淑景舎の壺には桐を植ゑられてあるから、勿論桐壺と稱するのであるが、現今でも梧桐は、庭前窓外などに植ゑて、初夏の新緑をも賞翫する事になつて居るけれども、普通の器具を造る材料としての桐は、寧ろ畑若くは空地の隅などに植ゑる事になつて居るのに、當時、かういふ壺などに植ゑられたのは、或は花の藤花に似た紫色であるから、多少それを愛好されたものでもあらうか。清少納言の枕草子に「桐の花紫にさきたるはなほをかしきを、葉の廣ごりさまうたてあれども、また異木とひとしいふべきにあらず云々」と見えて居り、更に鳳凰の住む木だといひ、琴に作られたりするから、めでたいといふ様に記してある。(本巻解釋一七頁参照)

○きぬの裾。「二種の河内本」共に「裳衣の裾」とあるけれども、衣は概して、一般衣裳・衣服等をくめて云ふ時も随分あるし、且近世「おきぬ」なる語は、裳唐衣をも着用の場合の約稱に使つて居るから、やはり無き方に従つて置く。

○めだう。自分が宮中奉仕中(明治の御宇)、自分等の住む局(紅葉山)の前の縁を、すべて「おめんだう」と稱して居た。命婦某の談に「伯母なる人は、孝明天皇の御時代以上、三朝に仕へたのであるが、其の老伯母の言に、「昔は白馬の節會と云ふがあり。其の白馬に何等か關した事であつたとかいふ事で、今もところ／＼の御縁に、馬道の名が残つて居る」といふ事を耳にした」と云はれた。委しきを知るよしの無かつたのは、遺憾である。

但、愚按には「めだう」に、萬葉假名的に「馬道」の文字を、いつの程よりか當てはめて書いた所から、かうむつかしく解して來たのではあるまいかとも思ふのである。故に、或は「辨色立成云、(和名抄)「向」堂道也云々」「釋」とある方の説が眞に近いかも知れぬ。

この御子三つになり給ふ年、  
御袴着の事、一の宮の奉りしに  
劣らず、内藏寮・納殿の物を盡し  
て、いみじうせさせ給ふ。それ  
につけても、世の誹のみ多かれ  
ど、この御子のおよすけもてお

【口譯】 此の若宮(桐壺更衣の出、第二皇子)が三つにおなり  
なされた年、御袴着の儀式が、第一皇子(弘徽殿女御の出)に擧げ  
させられたのに劣らず、内藏寮や納殿に(藏められた所の立派な  
物の)有るだけ(若宮の爲に)御使用になつて、大層盛大に遊ば  
された。それにつけても、(東宮がねの第一皇子と同じ様に遊ば  
すのは、御宜しくないといふ様に)世上の非難が多くなるばかり

はする御かたち心ばへ、ありが  
たく珍らしきまで見え給ふを、  
え嫉みあへ給はず、ものゝ心知  
り給ふ人は、かゝる人も世に出  
でおはするものなりけりと、あ  
さましきまで目を驚かし給ふ。

その年の夏、御息所、はかなき  
心地に煩ひて、まかでなむとし  
給ふを、暇さらに許させ給はず、  
年頃常のあつしさになり給へ  
れば、御目なれて、「なほ暫しこ  
ころみよ」とのみ宣はするに、日  
日に重り給ひて、たゞ五六日の

であるけれども、此の若宮が、段々御成人になつていらつしやる  
その御容貌といひ、御氣だてといひ、世に類もまたとなく、稀有  
な程優れていらせられるので、(母更衣に對しては、兎角誹謗を  
する人達も、此の若宮は)えう嫉み切れず、道理の分つた方は、「こ  
んな(立派な)方も、人間世界にお出生になるものかなあ」と呆れ  
る程、驚異の目を見張られる。

(若宮の御袴着のあつた)其の年の夏、御息所(更衣)は、一寸不  
氣分で惱んで、加養の爲、里邸へ下らうとせられたが、帝は、何う  
しても暇を御許しにならない。年來、更衣の病氣は始終の事だ  
から、馴れつこに御なりになつて、「もう少し宮中で養生して見  
よ」と仰せられてあらせられるうちに、日に／＼病勢が進んで、  
僅に五六日の間に、甚く衰弱してしまはれたので、更衣の母君は  
(非常に氣を揉んで)涙を流して、女の賜暇退出を數願に及び、  
(やう／＼の事で)御聽許になつた(先づ此所で更衣の退出が確  
定した。以下順次其の狀況を縷々述べる事になる)。更衣は重



女はあつた。源代り。人はなれり。三三

ほどにいと弱うなれば、母君泣くく奏して、まかでさせ奉り給ふ。かゝるをりにも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をばとどめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。かぎりあればさのみもえとどめさせ給はず、御覽じだに送らぬおぼつかなさ、いふかたなく思さる。いとにほひやかに美しげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出で、も聞えやらす、あるかなきかに

患で、宮中を退出するといふ場合にも、(平生の事を考へて)途中何んな飛んでもない恥辱を與へられる様な事もあらうかとの懸念から、皇子は宮中へ御残し申して置いて、目立たぬ様にして、そつと退出された。  
(帝は如何にも更衣に別れ辛く思召すけれども、公儀の)制限があるので、此の上、御引留めになる譯にもゆかない。(せめて)見送りだけでもと思召されても、(帝の御身に)てあれば)それさへ出来ぬのを、言様もない程、物足りなく(悲しく)思召される。  
非常に云はうやうもない美しい更衣が(本巻評説二二頁参照)、(病苦の爲に)甚く面憔悴して(げつそりと肉が落ちて)、物をしみく哀に悲しいと(お可愛い皇子を宮中に残し、お懐しい帝に永別し、多くの人々の嫉視の中を、こつそりと忍んで、これが見納かと思ふ宮門を出て行くのであるから)、思ひ詰めながら(殆ど昏睡状態に瀕して)、言語に出してはえう申上げられないで、生きてるか死んでるか分らない様に(人事不省の有様で)、意氣

消え入りつゝものし給ふを御覽するに、きし方ゆく末思し召されず、よろづの事を泣くく契り宣はすれど、御答もえ聞え給はず、まみなどいとはゆげにて、いとどなよ／＼と、われかの氣色にて臥したれば、いかさまにかと思しめし惑はる。

輦の宣旨など宣はせても、また入らせ給ひては、さらに許させ給はず、かぎりあらむ道にも、おくれ先立たじと契らせ給ひけるを、さりとともうち捨て、

銷沈して居られる様子を御覽になると、帝は全く前後不覺に、御分別もつかぬ様にならせられて、涙ながらにいろ／＼の事(病氣が是非治るやうに、又將來の希望に屬する事など)を御約束になり、御申し聞かせになるけれども、更衣はもう其の御答も出ない。(お懐かしさうに見上げて居る)目つきなども、大層だるさうで、(全く身體の力を失つて)ぐつたりとして、(意識も無い様で)我か彼かの區別もつかぬ有様で、臥せつて居るから、帝は何うしたらよいかと、途方にくれて成らせられる。

(帝は非常に御氣づかひになつて)輦勅許の御沙汰を仰せ出されても、(やはり御懸念になるから、また更衣の部屋へ)入御なつては、(其のいた／＼しい姿を御覽になると)どうしても、退出を御許しになることが出来ない。「死出の旅路にも、後れもすまい、先立ちもすまい、二人一緒にと御約束になつたのに、いくら何でも、朕一人を残してえう行くことは出来まい」と仰せられるのを、女(更衣)も非常に感激し、御氣の毒に存じ上げて、

は、え行きやらじ」と宣はする

を、女もいとみじと見奉りて、

「かぎりとして別る、道の悲しき

にいかまほしきは命なりけり。

いとかく思う給へましかば」と

息も絶えつゝ、聞えまほしげな

る事はありげなれど、いと苦し

げにたゆげなれば、かくなから、

ともかくもならむを御覽じ果て

むと思しめすに、今日始むべき

祈禱ども、さるべき人々承れる、

今宵よりと聞え急がせば、わり

なく思ほしながら、まかでさせ

給ひつ。

御胸のみつとふたがりて、つ

ゆまどろまされず、明しかねさせ

給ふ。御使の行きかふほど無

きに、なほいぶせさをかぎりな

く宣はせつるを、「夜中うち過ぐ

るほどになむ絶え果て給ひぬ

る」とて泣き騒げば、御使もいと

あへなくて歸り参りぬ。聞しめ

す御心まどひ、何事も思しめし

わかれず、こもりおはします。

御子はかくてもいと御覽せま

ほしけれど、かゝるほどにさぶ

「かぎりとして別る、道の悲しきにかまほしきは命なりけり」

歌意「今を限として別して行く、死出の道の悲しいのに、生

きたいと思ふ、命でございませう。(あの世へ行く、生

くとかけて居る、後者の方が意が重い)。「ほんにかうならう

(こんな早く死なう)とかねて氣づいて居りましたならば、(も

つと申し上げ残して置きたい事もございましたのに)」と、呼吸

も切れ／＼になつて、また申し上げたい事がありさうに見える

けれども、(口をきくのも)大層苦しさう、大儀さうであるから、

帝は、更衣をこの儘此所へ置いて、助かるも助からぬも、いづれ

かの結着を見届けようと思しめしてゐらせられるが、更衣方

は、今日から始める豫定の、病氣平癒の御祈禱のため、然るべき

僧達(某々と云ふ靈驗ある名高い祈禱僧)の承つて居るのが、里

邸で今夜から(着手する筈ゆゑ)と申上げて、退出を迫き立てる

ので、帝は辛い事だと思召しながら、(とう／＼)退出をおさせな

された。



(更衣の退出後、帝は)御胸がすつと御宿へになつた切りで

(更衣の事が御心配で)ちつとも御寝になれず、(其の夜を)

御明しかね遊ばされた。(更衣の其の後の病狀經過御尋ねの)御

使が往つて還る間も御待ち切れにならず、(をりかけ)御遣は

しなつても)猶御不安さを際限も無く思召して、(御側の者達に

もその事のみ)仰せられてならせられたのに、「夜半過る頃に、

更衣は息をお引き取りになつた」とて、(里邸では皆が)泣き騒

いで居るので、御使も大層落膽して(宮中へ)還つて参つた。そ

れを御聞きになる帝の御心持は、顛倒して御しまひなされ

て、(唯すつと)御引き籠りになつてならせられる。

帝は(せめて)此の儘で、若宮を宮中に御置きなされて、御覽に

なりたいのだけれども、かう云ふ御服喪の間、宮中に御いでにな

る先例が無い事であるから、(更衣の里邸へ)御退出にならうと

する。(如何に御賢いと申しても、また御三歳の頭是無い皇子は、

母君が逝去された事など御わかりになる筈は無い)。何事があ

らひ給ふ例なき事なれば、まかで給ひなむとす。何事かあらむとも思ほしたらず、さぶらふ人の泣きまどひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見奉り給へるを、よろしき事にだに、かゝる別の悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。

限あれば例の作法にをさめ奉るを、母北の方、同じ煙にもものほりなむと泣きこがれ給ひて、御送の女房の車に、慕ひ乗り給ひ

るのだらうとも御存じ無く、御側の人達が泣き騒いで居り、御父帝も御涙が止め度無く、後からく〜と流れ出てあらせられる御様子を、不思議さうに御見上げ申しておいでになるのを、普通の場合にても（親子が別れると云ふ事は暫しの間でも）悲しくない筈はない事であるのに、ましてこれは（更衣逝去云々の種々相に原因するから、尙更悲痛で）、言ひ様も無い程の（悲しい哀れな）事である。

制度の定りといふものがあるから、（いくら餘波は盡きないと云つても、更衣の亡骸をさし置く譯にはゆかないので）式の如く葬儀を執り行はれるのを、母夫人は女と共に「自分も茶毗に附されて同じ煙になつてしまひたい」と、泣きこがれなされて、野邊送の侍女達の車に取り纏つて（是非連れて行つてくれと、強請んで）、同車しておいでになつて、愛宕といふ所で、大層莊麗な儀式を舉げて居る場所へ到着せられた心持は、どんなにまあ悲しい事であつたらう。（家を出る前は）「現在更衣のお亡

て、愛宕といふ所に、いといかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけむ。「むなしき御骸を見る〜、なほ在するものと思ふがいとかひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今は亡き人と、ひたぶるに思ひなりなむ」と、さかしう宣ひつれど、車より落ちぬべう惑ひ給へば、「さは思ひつかし」と、人々もてわづらひ聞ゆ。内裏より御使あり。三位

のくらゐを贈り給ふよし、勅使

骸を見て居ながら、やはり生きて居られるものとしか思はれぬのが、本當に詮無い事だから、（いつそ）灰にお成りなさる所を見届けて、今は（此の世に）亡き人だと、一向に諦らめてしまはふと、殊勝におつしやつたけれども、（さてその場に臨んで、葬儀の状を見られると、悲歎の情が迫つて来て、諦めるどころか）車よりころがり落ちさうに、お泣き狂ひなさるから、侍女達は、「屹度こんな事だらうと思つたつけが」とお持て餘し申した。

（當時は、亡骸を火葬にしたから「焦れ」といひ、「煙にのぼる」といひ、「灰になる」といふのも、皆火の縁語である。そして「同じ煙にものぼりなむ」は、骸を焼いた煙が空に立ち上つて、あとはかも無く消ゆる状を含ませた、文章のあやである）

（故更衣の葬場へ）官中から御使が参着する。（と、こゝで、更衣死後の榮譽を一つ簡単に披露し、そして亞いで、その御使の状を記述する）

三位の御贈位があり、勅使が見えて、（棺前に）其の宣命を読む

来て、その宣命讀むなむ、悲しきことなりける。女御とだにいはずなりぬるが、あかす口惜しう思さるれば、今一階の位をだにと、贈らせ給ふなりけり。

これにつけても、憎み給ふ人々多かり。もの思ひ知り給ふはさまかたちなどのめでたかりし事、心ばせのなだらかに目やすく、憎み難かりし事など、今ぞ思し出づる。さまあしき御もてなし故こそ、すげなう嫉み給ひしか、人柄のあはれに、情ありし御

のを拜承する人々は、更に悲しみを新たにしたのである。  
帝は(更衣の生前)女御とでも呼ばせたかつたのに、それさへも果たさずしまつた事を、たまらなく残念に思召すので、(せめて)もう一階上の三位になりとも(致してやりたい)とて、御贈りになつたのである。

それにつけても故更衣を、御憎みになる方々が多くある。(が併し)物の分つた人達は、姿態容貌の美しかつた事、氣だての穩當で、難辭なく(即ち見た感じが好い、憎まうとしても)憎む氣になれなかつた事などを、今になつて(しみじみ)と思ひ起される。(元來)帝が見とも無い程、溺愛遊ばされての御しうちの爲にこそ、(皆が、更衣に對し)素氣無く嫉みもされたのであるが、當人更衣の人柄は、可憐で、情愛深くあつた事を、表附の女官達なども、(互ひに語りなし)思ひ出して戀しく懐しみ合うて居た。「なくてぞ人は戀しかりける」とは、かう云ふ場合の事だらうと思はれた。(本巻解釋四五頁参照)

心を、上の女房なども戀ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。

はかなく口頃過ぎて、後のわざなどにも細かにとぶらはせ給ふ。ほど経るまゝに、せん方なう悲しう思さるゝに、御方々の御宿直なども絶えてし給はず、たゞ涙にひちて明かし暮らさせ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「亡き後まで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほ

わけも無く時日が立つて行つた。帝は、故更衣の歿後の御法事などにも、(其の都度)懇ろに行届かせられた御使や供物を、更衣里邸へ御遣はしになる。日數を経るに従つて、帝は、故更衣が戀しく懐かしく悲しく何うしやうも無い様に思しめされるので、(たゞ、更衣の亡き面影のみを逐うて御いでになつて)、他の女御更衣などの御伽なども更に無く、たゞ御一方涙にひたつて、明けても暮れても(沈み果てゝ)成らせられるので、(此の御様子)御見上げ申上げる御側の人達さへも、(御同情申上げて、今年)露つばい秋である。(たのに)「亡くなつた後までも、私達の胸をからりと晴れさせないとは、更衣の(豪い)御寵愛だつたなあ」と、弘徽殿の女御などは、やはり容赦なくつけくと云つていらつしやる。(本巻解釋四六頁参照)

一の宮(宮中に御いでになる弘徽殿出の第一皇子)を、帝は御覽になるにつけても、(更衣里邸に在す更衣の忘れ形見なる)若宮の御戀しさばかり思しめし出しになるので、(御側に昵近

許しなう宣ひける。

の、特に御心知りの御親しい女官達や、御乳母を御遣はしにな

一の宮を見奉らせ給ふにも、つては、若宮の御様子を御聞き取りになる。

若宮の御戀しさのみ思ほし出でつゝ、親しき女房・御乳母などを遣しつゝ、有様を聞しめす。

【解釋】

御袴着。

男兒の袴の著初めの儀式。若宮は、三歳にて御着袴の儀式を行はせられる。凡て着袴でも元服でも、乃至裳着でも、高貴の方若くは勢力あるかたゞ程早いのであるが、大抵先づ、三歳の年に行ふを古例とした。(本卷評説四六頁参照)

内藏寮。

これは、宮中の御財寶を藏めてある所で、當時は金銀・珠玉・寶器・錦綾・御服・別納の用物等の事をつかさどるよし、職員令にあり。中務省に屬する。寮は近衛の南、堀川の西に在る。

納殿。

即ち御納戸で、諸國よりの進物などを納める所を言つたものである。猶こゝは、種々雑多の累代御傳承の御物等をも納めて置くので、宣耀殿に在る。

およづけ。

〔言〕「成人すること」「夙慧」「生立にまさりて智慧づく」「ませる」。

あさましきまで。

こゝは、好い意味の驚歎である。〔言〕「驚歎するほど」「あされるほど」の意。「あさまし」形、

二、一、驚く程に甚し」「思ひの外に肝潰る」「驚歎」「興醒む」「呆る」等、多くあしき方に用ふ。

御息所。

此所に始めて、桐壺更衣の事を御息所と書いた。みやすみ所の音便。みやすん所、又約めてみやす所

ともいふ。これは、女御更衣などの皇子方を生み奉つて後、殿上伺候のをり、御子を御つれになつて、その御取扱等の爲に、御座所近き處に、假に休息所をたまはる。これより御子を御持ちになつた方を、御息所と稱するのである。即ち御休息所をお戴きになられた意味で、かく云ふ。(本卷評説四七頁参照)

はかなき心地。

假初の様に煩ひついたので、ふと風邪か何か、一寸した不快と云ふ程の意。

限あれば。

宮中の制定があるので、際限無く留めて置くことは出来ぬ意。

さのみ。

然耳。「そのやうに」「むやみに」「さして」「もうそれほど迄」の意。のみは緊張の語。

御覽じだに送らぬ。

「だに」の力入を見るべきである。公儀、即ち帝の御地位に對する束縛がある。「限あれば」も同様。當時貴紳方も、夫人の外出には車に扶け乗せる、即ち見送る例であるが、宮廷の定儀として、帝が、更衣の御見送りは出来ないから、たまらなく物足りなく思召される譯である。

言ふかたなく思ざる。

〔言〕「言ふかた無く」、形、一、(一)「云ひて詮なし」「ふがひなし」。

美しくしげなる人。

かう云ふ所のげは、平安朝當時の常套語で、別に意味は無い。詞を優にする爲などにつけたのかも知れぬ。故に、事も無げに云ふ、嬉しげに見ゆ、などの意とは違ふ。「うつくしげ」は「かはゆらし」であるが、美の意を含む。

來し方行末思し召されず。

普通「來し」と讀む例だが、作者は、すべて「來し」と讀んで居る。來し方行く末の字義は、過去將來の事で、「あと先の分別も、御つきにならぬ」事。此所では「前後不覺」の意に取る。

契。「約束」。

將來の光榮たるべき事の豫定を、お約束になる等の意。

まみ。物をみる目つき。

見上げたる目色。

なよく。「ぐつたり」「ぐにや〜」「萎え靡く状」。

われかの氣色。我か彼か分別がつかぬ様子。人事不省の状を云ふ。

いか様にかと。(玉)「俗言に、これは何とせうぞといふ意也。『まどはる』といへるにて知るべし。」下略。

輦てんの宣言。字の如く、人の手で輦く意味で、牛車より小型である。牛車又は普通の車は、牛をつける爲に、前方の輦が長いのであるが、これは左程長くなく、前後同じ長さであつて、人が輦をもつて昇ぐ事も出来るやうに作つてあるのである。輦は、一體手で昇ぐ輦に車を取りつけた物で、内裏の中重(ナカノヘ)門内を乗用する。手輦・腰輦等もある。(本卷評説五〇、五一頁参照)

また入らせ給ひて。(徳河内)(明槐)には「入り居させ給ひて」とある。意味はさうであらうが、このまゝの方がよろしからう。

限あらむ道。死出の旅路の事。「生日はともにせずとも、死日はともにせむ」の古語の意である。

息も絶えつゝ。「息も絶えつゝ」になりながらの意。(河内)(徳河内)には「消えつゝ」とある。一寸切實の様ではあるが、「絶えつゝ」の方がよいと思はれる。

今日始むべき祈禱。いのりとは、心願をこめて神佛に福利を祈り求むること。又その儀式をもいふので、更衣の實家で、今日から行はれる病氣平癒の祈禱の意である。

わりなし。「道理無し」「理無し」「分別なし」等の意から、「仕方なし」とやうにも解する。こゝには「辛きこと」「不本意ながら」として置く。

御むねのみつとふたがりて。すつと塞がる。俗に、胸が板のやうになるなどいふ意(本卷評説五二頁参照)。

まどろむ。とろりとするといふことであるが、單に、眠るといふところにも使ふのである。(言)目め蕩たうむ義か。

「暫し眠る」交睫。

ゆきかふ。往つてまた還る。「行き交ふ」「彼行き此來る」。こゝは「ゆきかへる」、往復する意。

あへなし。(言)「たのみなし」「力なし」「張合なし」。こゝのは後者の意味。立會ふことが出来ない意で、「落膽して」と解す。

心まどひ。「心の迷ふこと」。或は、氣の顛倒することの意。

かゝる程にさぶらひ給ふ例なき事なれば。「こんな喪中に宮中にいらつしやる事は、先規がないので」の意。(本卷評説五二頁参照)

よろしき事。「よろし」は現今「宜」「よみすべし」「適當なり」「ふさはし」の意に用ふれども、當時は、可なりの意。「先づよい」「並大抵位によい」場合に使ふ。

言ふかひなし。いひかひ無し。「云ひても詮なし」「ふがひなし」「卑怯なり」などの意なれど、云ひても云ひ盡せぬ程悲しい事、落膽した事等の時に用ふ。

同じ煙。當時、上流社會には殆んど茶吐ちやづに附するといふ、火葬の習慣が行はれてゐたから、母北の方が、更衣と共に焼かれて死んでもしまひたいと云はれるのを、かく同じ煙と、その縁語を用ひた。そして、最下層者は火葬にも出來ないで、亡骸は、そつと路傍原野に棄てなどしたのである。

こがる。「同じ煙にも」とある。煙の縁語。

女房。禁中・院中等にて、一房を賜はりて住む官女の稱。女房はもと、男房に對する語。房はつばねにて、今いふ

部屋の事。それが、奉公する女の部屋の事より轉りて、貴族の家につかふる女のすべての稱となつた。上流貴族の子弟教育に當る、家庭教師の格のものもある。

これにつけても憎み給ふ人々多かり。(徳河内)には「安からず憎み給ふ」云々とある。可いと思ふが、「安からず」は無くてよからう。

愛宕。「をたぎ」。愛宕とも書く。山城國鳥部野に在る。即ち、平安朝遷都に際して定められた、庶人の火葬場である。今の青山共同墓地の如き處である。女御以上になると、別の御墓が出来るが、更衣迄位では、やはり、大抵鳥部野に埋葬したものである。

空しき御帳云々。これは、また葬に出で立たれる前にいはれた語にて、「かねてかく宜ひつれど」の意。

ひたぶる。「頓」「一向」、たゞそればかりなるにいふ語。「ひたむき」「ひたもの」「切に」「一途」「一概」等。さかし。「かしこげに」の意なれば、轉じて「殊勝」などにも云ふ。

三位の位贈り給ふ。葬儀の際、故更衣に贈位せられたのである。(本卷評説五五頁参照)

宣命。「せんみやう」と讀む。「せん」は宣傳、「みやう」は勅命の義で、和文の詔をいふ。これは、古代に於いては即位・改元・立后・立坊等の大儀に用ひ、平安朝の初めよりは神社・山陵に奉告する時、及び即位・大嘗祭に於ける大儀、任大臣又は贈位の儀式にのみ用ひた。(大臣が勅を奉じて内記に作らしめるもので、宣命書といふ特殊の形式である。少納言之を讀む)。

物思ひ知り給ふは。物のわかつた人。「思ひ知る」は、物事を雜と淺く表面からのみ見ず、奥底まで察する意である。人情の分つた方と釋す。

さまあし。「體裁惡し」「傍から見にくし」「外見わるし」の意。

すげなし。「愛想なし」「素氣なし」。

情。「物の哀れを知る心」「心情を汲みとる心」「思ひやり」「人情」「みやびごころ」。支那の小説には、人情と書きて贈り物の事として居る。彼の國の民情を察せられて面白い。

うへの女房。帝の御前ちかくつかうまつる女房をいふ。(玉)「すべてうへとは、帝の御あたり近き事にいへり。うへつばね、うへみやづかへなどのごとし」。

「なくてぞ」とはかゝる折にやと見えたり。「ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は戀しかりける」とある。(歌意)「その人が世にある間は、互に一寸したゆきがかかり、戯れなどにも、氣に障つて怒つたり憎んだりした事もあるが、いざなくなると、無性に戀しく懐かしくなるものである」といふ歌を引いて、更衣存命中は、嫉妬のあまりいちめもしたり嫉みもしたが、さてなくなつてみると、やはりあのやさしい美しい更衣が、懐かしく慕はしくしのばれるといふのである。この歌は(奥入)に引いてある古歌で、出所不詳。古今六帖五に「ある時はありのすさびに語らばで戀しきものと別れてぞ知る」とあると、同じやうな意味の歌である。

はかなし。「とりとめたること無し」「苟且」。又、人の死を「はかなくなる」と云ふ。「何と無し」の意。當時、無暗に深山用ひられて居る語である。

のちのわざ。「のち」は更衣死後の意で、「後のわざ」は死者の爲、七七(四十九日)の供養法事をさす。(徳河内)には、「後の御わざ」とある。通例、御のあるのが然るべきであらうが、帝が「とぶらはせ給ふ」といふ方から見れば、御は無くてよからう。

ひぢて。「ひづ」は動、上二段。「浸」は「沾」。「浸たる」の意。濡れることの甚しきをいふ。こゝは、涙に浸つてびしよびしよにぬれて、乾くひまなきを云ふ。

露けき秋。「露つばい秋」である。後選、六、秋歌中「人はいさことぞともなきながめにぞわれは露けき秋もしらるゝ」(歌意。人は取り立てて云ふ事でも無い眺めにつけても、自分はしめつばい秋の気がしみんと感じられる。)といふ歌を引いたのである。即ち、近侍の者までも、帝の御心をおしはかり奉つて、露けくしめつばい、そゞろに寂しい秋であると思はせたといふので、如何にも比喩が巧みである。

親しき女房。常に帝の御そばに御昵近し、仕へ奉つてゐる女房の義。これは、表女官である。

御乳母。先づ、帝の御乳母と假定して置く。(本巻評説五八頁参照)

【評説】 ○御袴着の事。一條天皇の御袴着も、天元五年、三歳の御年であつた〔榮華物語花山卷〕

後世は五歳、七歳、それより猶遅く行はれた例もある。女兒も大抵、三歳位で袴着の式があり、高貴の方は、大抵十二三四歳頃裳着の祝をせられるが、遅くも二十歳位迄にして、結婚前に髪上げと同時に、男兒の元服と同様、大切な儀式となつて居る。皇子女には、帝御親ら御腰結をさせられた例もある。

若宮三歳にして、御着袴の事を叙し、東宮と均しき盛儀を行はせられるのを、世人も誹議し奉ること一寸挿入して、弘徽殿(東宮の御母)が嫉妬憎悪の情を煽つて置き、一方、若宮が既に、梅檀うめだんの嫩なほより薫しき状を仄めかして、讀者の注意を引くのである。

以後幾程も無くて、御母更衣の大患から、終に逝去せらるゝに至り、帝の御落膽哀悼の御有様は、實に讀者の眼を濕さすには措かない妙筆である(此の段は猶後にいふ)。

○御息所。は女御・更衣などの外に、別にあるのではない。この稱は、女御・更衣などにわたつて居る。若紫卷、源氏君の詞に、此の御母更衣の事を「故御息所」といはれて居り、若菜卷に、明石女御をも、御子を生み奉られた後、のところに「御息所」と申して居る。六條御息所といふも、姫宮(秋好中宮)の御母なるにつきての稱である。又、竹河卷に、鬚黒の大臣の姫君、冷泉院に参り給ひて御懷妊のほどにも、御息所とある。現今は、親王・主の配を妃と稱し、親王殿下・主殿下・妃殿下と申上げるが、明治時代には専ら御息所と申上げた。が、これは字義から申しても、少し當らぬ様に思はれる。

○いとにはひやかに美しげなる人。一寸前にも云つたが、この「にはひ」といふ語は、今の一語には云ひ盡されない。艶美といふ譯語もあるが、光で云はば餘光、香で云はば餘香、聲で云はば餘韻といつた様な、言外に溢れる如き美しさである。美人懊惱の状を、「海棠の雨に惱める風情」なども云つて居るが、それでもやはり云ひ盡されないのと同様であらう。こゝの更衣の病態は、慎しやかで、可憐で、面やつれた麗人の、至尊に對し奉つて、殆ど昏睡状態にありながらも、何と無く對等的でなく、敬意の含まれて居るさまも仄見えて、その様子が如何にも、能く描き得てある。

○一寸解釋の所にも述べた様に、また醫術が幼稚で、藥品が不十分な時節に病を得る者は、精神の慰安



より外に、これを救ふべき道は無からう。従つて、その立役者たる僧侶修験者に、大に勢力があるのも、當然の事である。それ等が迷信を利用して、非違を行ふ者さへ段々出来て来るのも、亦己むを得ぬ結果であらう。併し、これ等は理智の未發達な、千年の昔を云ふ迄も無く、近世徳川時代にさへも、随分甚しいものがあつた。否、それどころでは無い。現代文明の御代でさへ、左様の事は決して根絶しないのみならず、理學の淵源と稱されて居る西洋にさへ、またくそれ等の弊はある様だから、無暗に往昔をのみ冷評する譯にも行くまい。

但、往昔及び現今にても、迷信に屬する神佛の加護信頼の一點張は、困つたものである。これは實に、文化國民の恥辱であるから、速に理智の正教によつて、打破し盡さねばならぬ事は勿論であるが、現代は、又餘りに形而下、即ち有形的物質萬能主義に捕はれてしまつて、一向に形而上、即ち冥々なる無形的存在に對しての信念が、無き過ぎはしまいか。未だ不完全なる人間の目に見え、耳に聞える事にさへ注意すれば善いと思ふからこそ、稍もすれば、所謂高等教育を受けたと云はれる人さへ、他の眼を晦らまし、耳を塞いで置いて、それで安心して、非違をも行ふことになるのであらう。人間の智の及ばぬ所に、畏るべく、憚るべく、崇むべく、敬ふべきものありと思つたらば、苟も痴者狂人で無い限り、これ程知識も進歩して居る世界の人類が、鬼畜に均しい様な行爲が出来る筈のものではあるまい。併し、近來醫學者の方から、却つて「病は肉體の患部を癒すばかりでは癒えない。精神の缺陷をも治さなければならぬ」として、既に、左様な療法に着手して居らるゝ、仁さへ出来たのは、實に嬉しい事である。故に、平安朝時代の病人が、深く信頼する名僧知識の加持祈禱によつて、病が治つたり、病勢が薄らいだりしたのも、一概に、全くあるまじき事とのみは云はれない次第であらう。

又、危篤に迫つた重患者を動かす事、これこそ全く理智の程度の低いが爲で、無暗に方角の吉凶を氣にして、所謂「方違」等のこともあり、患者の移動を今日の如く、さほど迄病氣に影響を及ぼす者とは思はず、吉方へ移す等は、寧ろ移轉の爲に病も治るかと思つたであらうから、致し方も無い事であるし、今一つは、死穢は非常に神明が御忌み嫌ひになると信じて居たから、宮中に於いては、聖上の外はなるべく死者を出さない様にし、發病者は他へ移すことを努めたのである。これ亦一方から云へば、清潔を尊む最も善い習慣の一つではある。昔と雖、病には流行性のもも勿論あるのだから、移せるものなら早く他へ移して、宮中などには置かぬが善いけれども、それも程度問題で、移動した爲に死なせる様な事を敢てしたのは、全く理智の未發達の結果で、誠に患者にとりては氣の毒な次第である。

○更衣の辭世は、非常に率直である。當時の詠み歌は、大分技巧を弄する事になつて、巧妙ではあるが、其の爲、往々至誠至純の情が、寧ろ薄くなつた様に感ぜられる場合もある。然るに此の歌は、如何にも死に瀕した非常に深い情愛が、本地のまゝに露れて居てよい。惟ふに更衣は、帝の限ない御愛撫の御手をも脱け出しては、里邸に還つて煩悶して居た様であるから、時としては、いつそ死にたいと思つた事

もあつたらうに、帝が餘りの御愁傷、御苦惱の御様子を見上げて、恐らくは「もう自分はどうなつても善い、今一度快くなつて帝を御悦ばせ申し上げたい」と思はれた事であらうと察せられて、誠に、悲哀の情が深いのである。

○若宮、生母の里邸へ御退去の件は、解釋の所に申して置いた通りである。その御退出の情況は、誠に見る様でいたくしい。頑世ない若宮が、父帝を始め、周圍の人達の泣き騒ぐのを御覽になつて、如何にも不思議な事と思召すあたり、本當に眼前に見る様である。そして、各種の註釋に在る如く、幼い兒を母親の手から放すのは、假初の別れにても可哀相であるのに、幽現世を異にする死の永別離は、尙更の事と云ふ意味でもあらうが、今一つ、あはれに痛ましくもいとほしくも、伶俐で可憐な麗人が、周圍の壓迫に、殆ど横死でもしたかの様な結果の早世は、全く盛の花を嵐が吹き散らした様で、如何に周圍の人々はあつけなく、胸痛く思つた事であらう。以下、長恨歌を巧みに利用して、帝の御悲歎、人々の愛惜を寫した筆は、誠に申し分のない出来榮である。

○さと。里邸と書くことにした。殿といふのも重過ぎるし、館も何だかつきくしくないし、家では輕過ぎる様な感じがするから、現今の云ひ方に従つて、邸と記したが、字源から云ふと、支那では邸は官宅の意味であるから、一寸どうかと思ふが、漢字は字源通りのみにもあてぬ故、やはりかうして置く。

○輦。輦は小形の車である。支那の上古の「蒲車」といふ類であらう。輿は全く手にて昇ぐの

輦（故實叢書）



である。枕草子に、齋院が加茂神社の境内に、手輿に召されたよし見えて居る。即ち、それである。腰輿に御の字を添へて呼ぶ時、「おえうよ」といふべきであるが、語路の響のよい爲に、「およよ」と詰めていふ事がある。輦は三位以上の人でなければ許されぬもので、即ち、女御以上には之を用ひるも、更衣の最上位は四位であるから、帝は今、桐壺更衣が危篤である爲に、特旨を以つて、乗輦を勅許あらせられたのである。これは、牛車に駕して宮門を出入し、更に輦にのりて閤門にいたりて、牛車にのりうつるなどの事もある。即ち、病床から直に輦に移す爲である。東宮親王・大臣・僧正等、特に勅許を得て乗る。「輦車の宣旨」とは、これを指す。「宇津保物語（國讀下巻）」にも、太政大臣藤原忠雅が、脚氣の病に假托して、后宮の態々の御召にも参らぬのを、「宮なほ聴かじと思ふなめり。負けじ。脚病むといふは、輦車の宣

旨を申し下さむなど宜ふ」とある。明治の宮中にて、老女官が「およよ」と云はれた。それは、孝明天皇の御時代、蛤門戦争のあつた際、主上も御立ち退きの御用意になつて、「およよ」迄備へられたと云はれた。それが、即ち「御腰輿」であつた。参考として加ふ。

○今日始むべき祈禱ども。當時の加持祈禱なるものは、病人には第一の治療法であつた。前述の如く醫藥の進歩せぬ時代には、已むことを得ぬ習慣とも云ふべきであらう。但迷信的のものは困るけれども、亦一方當時の人は、かう云ふ事で漸く精神の安靜を得て助かつた等の事もあつたであらう。丁度、現今の専門家の某醫學博士を聘して、今夜その診察治療を受ける筈だ、などと云ふに同じである。

○御むねのみつとふたがりて。御むねのふたがりたるが、ちつとしてゆるばぬ也。註には、頓てといふに同じといひ、又集、都などいろ／＼いつてあるが、宣長の説よし。「つとは、俗言に、ちつと見てゐるなどいふ、ちつとの意にて、ちつとは、即ち此のつとの訛れる言也」と「言」にはあるが、「この説いかゞ也」と「釋」には難じてある。

○かゝる程に侍ひ給ふ例なき事なれば。「細」七歳以前の者服忌の事、醍醐の御代に法を立てらるゝ事、兩度改まれり。これは始め七歳以下の人も、服の忌あるべしとありし時の分に書けるなり」とある。或は丁度、當時さうした制度を採り用ひられたのであらう。よしさうでなくとも、小説的の書きかたとして置いてよからう。徳川幕府時代より引き續いて、猶現今も、七歳未満の人は服忌無しとある。

。現今迄繼續して居る服忌令は、左の如くである。

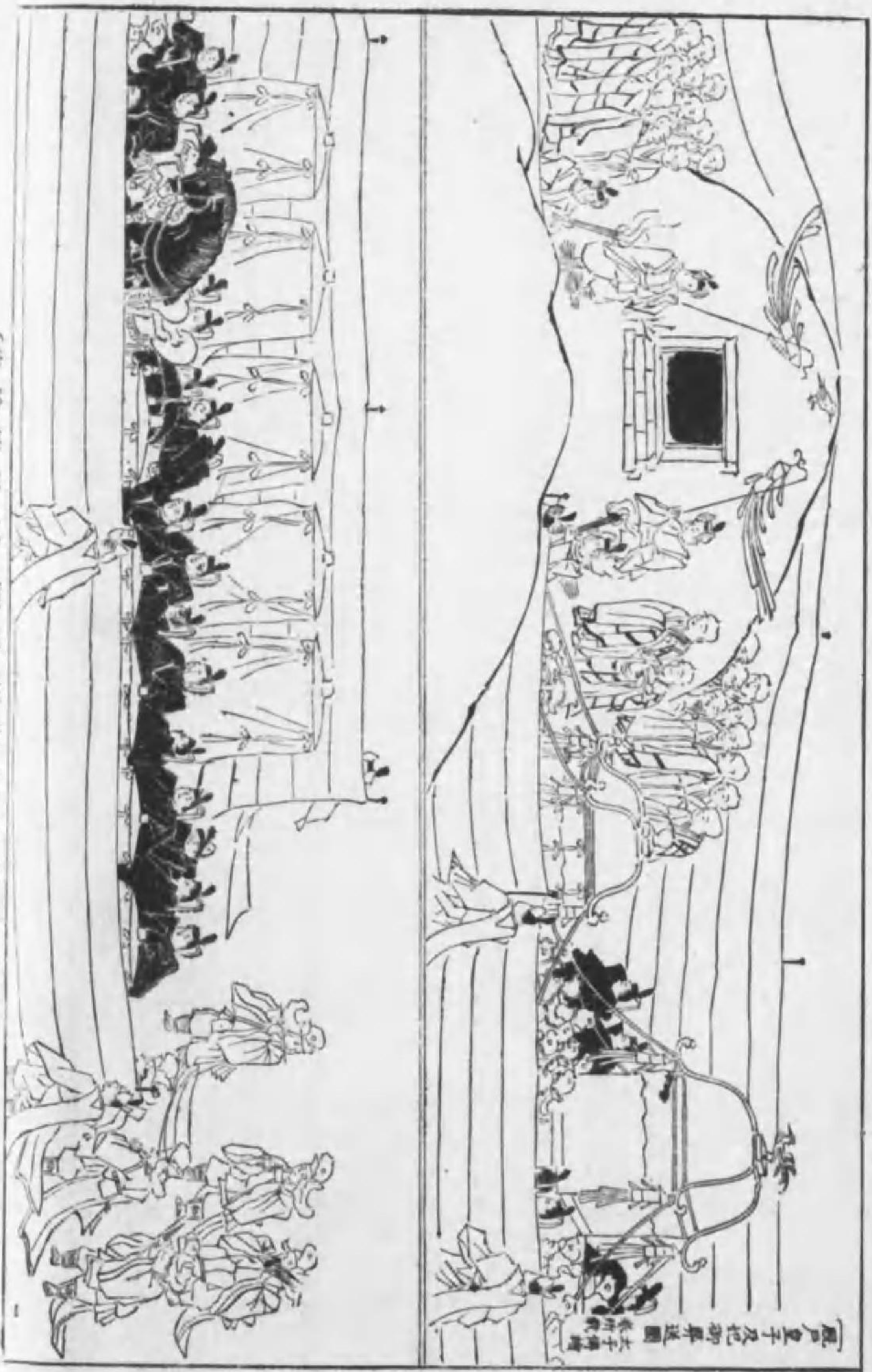
一、父母、忌五十日、服十三月（閏月をかぞへず）。一、夫、忌三十日、服十三月。一、妻、忌二十日、服九十日。一、嫡子、忌二十日、服、九十日。一、祖父母、忌三十日、服百五十日。一、兄弟姉妹、忌二十日、服九十日。一、母方、忌二十日、服九十日。一、伯叔父姑、忌二十日、服九十日。一、甥姪、忌三日、服七日。

故更衣の母夫人が、強ひて、送葬の女房車に同乗して、愛宕に着いての悲歎の状は、殊に、寫し得て妙だ。夫人の物狂はしく泣き騒がれるので、女房達の「きは思ひつかし」と困り抜いた情況も、誠に目に見る様である。

○更衣死後に三位を贈られた事に就きて。承和六年六月、女御從四位下藤原朝臣澤子の卒せられた時、從三位を贈られたとあり。同じく、澤子重忠にて宮中退出の時、小車にて禁中より出されたとある先例によつたものだといふ説は、或はさうでもあらうかと思はれる。

勅使が來着の條に、「勅使來てその宣命讀むむ悲しきことなりける」とある。誠に、さうであつたらう。近親や親友などの近い人でなくても、棺前に讀む誄詞は、涙を誘はれるものであるから、なる程と首肯される次第である。

「女御とだに云はせすなりぬるが、飽かず口をしう思さるれば、今一階の位をだにと贈らせ給ふなりけり」とは、帝の御涙にむせ返らせ給ふ様な、御悲歎のやらん方なき拂け口を、僅に此の贈位にて、少し



(徳河内) 圖 繪 御 堂 及 子 皇 戸 座

ばかりでも、御心やりにせさせ給うたであらう御有様から、女御とだに云々は、單に、帝が御胸中に畫がせ給うたに過ぎぬ事だから、餘り判然想像して説き立てない方が可いかも知れぬが、併し、帝の御心には、更衣御誕生の皇子が、若し幸ひに帝位に即かせらるれば、后若くは太后になられる事は、當時の慣例として、全く出来ない限ではないのであるから、工合よく行つたならば、そこ迄もと思召したのであらうのに、女御とさへも稱せしめる事が出来ない間に、逝去された事をかく申したのであらう。

○三位の位を贈り給ふ。〔徳河内〕には、「三つの位を」とある。三位の位と、「位」が直に重複しないでよいやうではあるけれども、訓讀すれば三位となるのであるから、「三位といふ位を贈り給ふ」の意で、「何日といふ日」とあるに同じだから、「三位の位」でも、一向差支は無い譯である。當時は凡て三位四位と唱へて居て、打ち任せては、普通三つの位とはいはなかつた様だ。但こゝは、勅使來て其の宣命よむなむ云」とあるから、特に右のよみ方を採つたのであらう。〔玉〕に「これは三位のくらゐと書たれば、三位は普にてさんると訓んぞ、物語の詞つきなりける」とある。三位は第三の位階にして、當時は三位以上を上達部(公卿)と稱して、三位となると、非常に朝廷の御會釋も重くなる。三位と四位とは、格段の相違である。女御は三位相當、更衣は四位相當であるが、例外には、女御に四位なるもあり、また四位から三位に昇るもあり、更衣にても、特旨で三位に進む者もある。勿論、女御は後に次ぐ御取扱ひである。こゝでは勅使を以て、更衣に三位を贈られたのである。

○贈位があつたと云つて、「それにつけても憎み給ふ人多かり」と、一寸仄かに書いて置いて、更に後段に「亡き後まで人の胸あくまじかりける人の御おぼえかなとぞ、弘徽殿などには、なほ許しなう宜ひける」と、遂に判然たる色を顯したのを見ると、憎み給ふ人々は、その主なるものは弘徽殿で、その他は、故更衣と寵を争うた、他の女御更衣の連中だつた事が推定され、そして表女官や、道理の分つた人達は、更衣逝去後、今更に「あゝ惜しい事をした、美しい善い人であつたのに」と云ふ邊り、本當に現在にも往々ありさうな事と、人情の適切さを思はせられるのである。

帝のはかなき御心遣りとしては、故人の法事供養であらせられた。日を経る儘に、いとゞ思慕愛悼の御情が、「去る者は日々に疎し」の反對に深まつて行き、他の女御更衣の御宿直も絶えたる情況、それに對する周囲の嫉妬や怨恨が、またゞ渦を巻いて居るが、清涼殿上に、帝御昵近の男女の臣下達は、帝の御悲歎に深く御同情申上げると共に、「亡くてぞ人は戀しかりける」と、可憐らしい麗人の早逝を悼む心も手つたつて、「なるほど見奉る人さへ露けき秋なり」であつたらうと想像せられる。

○露けき秋なり。「源」に「これは引歌にはあらず、類似のみ也。たゞ傍にて見奉る人までも、帝の御心をおしはかり奉りて涙がち也、といふ意を、露けきといへる也。さて秋なりといふに、時のおしうつりたることをおもはせたる筆の働き、更に目出度し」とある。なる程、引歌は無くても可い。「見奉る人さへ露けき秋なり」といふ書き方に、情趣が深いのであるから、いづれでも然るべきであらうが、引歌

も、よく適合して居ると思ふ。

帝は、寵姫桐壺更衣が俄に病重りて、殆ど危篤に頻した際、何としても御愛撫の御手より放ち遣りかねさせ給ひ、「かくながらともかくもならむを、御覽じはてむ」とまで思召されたけれども、公儀の制限は、さすがに叔慮にも任せさせられず、わりなく分たせ給うた御袂は、束の間も乾く隙はない。「御狀のゆきかふほどもなきに」、なほをりかけくゞての御見まひのかひも無く、更衣は、終にその夜をも過ぎず不歸の客となり了つたのである。

それより後の、帝の御歎きの數々、詩に歌に、或は月に風に、露に草木に、取り集め譬へよそへて述べ盡して置いて、そして、帝の御側近につかうまつる、奥表の許多の臣下も、同じながめにかきくらさるゝ情況を、たゞ一句「見奉る人さへ露けき秋なり」と、簡短に結んだのは、誠に餘情深甚で、かへすゞも見事な手際と言はざるを得ないのである。

さうして置いて、更に「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」と、弘徽殿の女御が、執拗なる嫉妬の火炎なほ消さず、前者をうち消した憤懣の言葉が、更に又一段抑揚の妙を添へて、對抗役の出で榮を御苦勞さまと云はざるを得ない次第では無いか。

○一の御子に對しての帝の御心。これは「大方のやむことなき御思ひ」のみであるから、宮中に在す此の第一皇子を御覽になるにつけて、「私ものに」親しく懐かしく思召す、いたいけな若宮の御戀しさ

は、せんすべなき迄思召し出づる餘りに、度々御昵近の女房達を、若宮の御見舞に遣はされては、その様子を御傳へ聞きになる事のみ、聊か御心を慰めさせられるのも、誠に、さる事と恐察し奉られる次第である。

○御乳母。これには大分説がある。先づ、若宮は生母の里邸へ御下り中だから、宮中に若宮の御乳母が居る筈が無い。帝の御乳母であらう。當時の状況を見れば、帝の御乳母は、最も御親しき女房として、常に近侍もし、又よし御暇になつて下つて居ても、をり／＼参内する筈である。帝が、今かう云ふ御悲歎の御引籠中であるから、必ず大抵侍して居て、御慰めも御世話もしたであらうといふのである。この説は先づ尤もと思はれる。が併し、帝の御乳母としては、随分老人である筈だから、一寸どんなものかとも思はれる。

〔花〕に「御乳母、親王は三人、たゞの皇子は二人あるべきか」とある。光源氏は親王ならぬも、帝御殊寵の上から推せば、或は三人もあつたかも知れぬ（夕顔卷大貳の乳母の所などを参考すれば）。假に三人あるとして、二人は里邸の若宮に御つき申上げ、一人は宮中に残つてゐて、若宮と宮中との聯絡をとり、且、若宮の御用を承つて、彼是したり、帝のかう云ふ、御うち／＼の御使に立つたりする爲に居残り、且、一方では交代して多少休息もするだらうから、これは、若宮の御乳母だと假定しても理窟には合ふ様だけれども、さてどうも、本文の「親しき女房、御乳母などを遣はし云々」とあるのを解釋するには、帝

の乳母と見る方が穩當であらうが、一體當時の風習としては、普通には、六十歳以上の女房が、御使などに立つことは滅多に無い。そして、帝の寶算は、御若くとも四十歳以内ではあらせられぬ様だから、御乳母は、先づ六十歳以上の人でなければならぬ。さすればどうもをかしいけれども、先づこゝは、帝が寵姫に御永別の爲、非常に御悲歎にくれて成らせられる場合であるから、御慰めも申し上ぐべく、参内伺候して居り、そして故更衣母夫人とも知合しあひあである所から、老人同志の間柄故、折々は御内々の御使にも立つたものと見なして置いてもよからう。

野分のわきだちて俄に膚寒はだき夕暮の

【口譯】

風が野分めいて、急に膚に（冷やりと浸みる様に）薄

ほど、常よりも思し出づる事多くて、おしひ勅負みやうふの命婦といふを遣はす。夕月夜ゆづくよのをかききほどに出だし立てさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうの折は、御遊などせさせ給ひしに、心

ら寒さを感じる夕方、（帝は）いつもよりも（一入、故更衣を）思召し出す事が多いので、（若宮の御戀しきも詮方なく思召して）勅負の命婦といふ女官を（故更衣里邸へ）御遣はしになる。（その御使を）夕月が出て風情ある時分に（宮中より）お出しになつて、（帝は）その儘ざん茫乎まんかりとして、（御使の往つたそなたのそらを見るともなしに見詰めて）ならせられる。（そして、御考になる）かういふ（夕方の風情面白く、情趣の深い）折などには、（故更衣と

ことなる物の音をかき鳴らし、  
はかなく聞え出づる言の葉も、  
人よりはことなりしけはひ容貌  
の、面影につと添ひて思さるゝ  
も、闇のうつゝにはなほ劣りけ  
り。

命婦かしこにまかで着きて、  
門引き入るゝ<sup>より</sup>けはひあはれ  
なり。寡婦住なれど、人ひとりの  
御かしづきに、とかくつくろひ  
立てゝ、めやすきほどにて過し  
給へるを、闇にくれて伏ししづ  
み給へるほどに、草も高くなり、

しばし(管絃の御遊など催されたのであつたが、(更衣は)特趣  
な琴の(音色を出し)弾きやうをして(御聴に入れ)、一寸口に出  
して申上げる言葉も、他とは格段の相違があつた(非常に興趣が  
ある)。その(懐かしい様子や容貌が、帝の)御眼底にびつたりと  
添つて居て、離れないやうに思召されるけれども、(それはまづ  
たく、帝の御心に描かせられる幻影であつて)闇中の現實は、<sup>う</sup>夢  
にいくらもまさらざりけり」の歌の通りで、頼り無いものであつ  
た。

命婦は彼處(更衣邸)に到着して、(車を)門に引き込むからし  
て、(もうあたりの)様子が(寂々として)哀れを催した。(更衣の母夫  
人は)寡居生活であつたけれども、(官仕をさせた女更衣)一人を  
大切に世話する爲に、とやかくと住居も手入をしたりして、見苦  
しくない程度にして、暮らしておいでになつたのであるが、(大  
切な一人女を失つた親心、子故の)闇にかきくれて、悲歎に沈ん  
でおいでになる間に、庭草も(茫々と生ひ茂つて)高く伸び、野分

野分にいとど荒れたるこゝちし  
て、月影ばかりぞ八重葎にもさ  
はらずさし入りたる。

南面におろして、母君(も)とみ  
にえ物も宣はず。<sup>母北方</sup>「今までとま  
り侍るがいと憂きを、かゝる御  
使の蓬生の露分け入り給ふにつ  
けても、いと恥かしうなむ」と  
て、げにえ堪うまじく泣い給ふ。  
命婦「參りてはいとど心苦しう、心  
肝も盡くるやうになむ」と、典侍  
の奏し給ひしを、もの思ひ給へ  
知らぬこゝちにも、げにこそい

の風に一層甚く荒れた様な氣もちがして、(たゞありしながらに  
言問ひ顔の)月影ばかりが、八重葎にもかまはずさし込んで居  
る。

南面(即ち寢殿、今の表座敷)へ(御使の命婦を車から)お下し  
して、母夫人も(御使に對面されたが、命婦を見ると、更に胸が一  
杯になつて)急に物をおつしやる事が出来な。 (たゞ、先だつ  
ものは涙ばかりである。そして漸くの事で) <sup>母夫人</sup>「今迄私が生き存  
命へて居ります(若い女の更衣が死んで、老いたる私が残つて居  
る)のが、大層辛いのに、かやうな勿體ない御使が、この(荒屋の)  
蓬生の露を分けてお出で戴いたのにつけても、(御目にかゝる  
も面目無く)お恥かしう存じます」(と云ふなり)本當に堪へ切  
れさうもない程、お泣きになる。(命婦もやはり、急に言葉が出  
ない)。

命婦「先達て、典侍が御使に立たれて」御邸へ伺ひましては(即ち御  
様子を拜しては、御氣の毒で)氣力も盡きてなくなりさうでござ

と忍び難う侍りけれ」とて、やゝ  
 ためらひて、仰せごと傳へ聞ゆ。  
 命婦  
 「暫しは夢かとのみたどられ  
 しを、やう／＼思ひ鎮るにしも、  
 さむべきかたなく堪へ難きは  
 かにすべきわざにかとも、問ひ  
 あはすべき人だになきを、忍び  
 ては参り給ひなむや。若宮の  
 いとおぼつかなく、露けき中  
 過し給ふも、心苦しく思さるゝ  
 を、とく参り給へ」など、はかば  
 かしうも宣はせやらす、むせか  
 へらせ給ひつゝ、かつは人も心

います」と御奏上致されましたのを(御傍で承つて居りました  
 が)、何の辨へも無い(私の様な者の)心持にも、(かうして御口に  
 かゝれば尙更)なる程、御同情に堪へられませぬ。」(と云つて)  
 一寸の間氣を落ちつけて、(改めて)勅語をお傳へ申した。これ  
 からが勅語である。「(更衣が逝去後)貴分は、夢ではないかとば  
 かり思ひ惑うて居たが、(日数がたつて)段々心が落ちつくつと、  
 (却つて判然と、更衣の逝去は夢ではなくて、現在の事實であつ  
 たと思ふにつけ)夢でないから覺める筈もなく、(悲歎愁傷に)堪  
 へ切れないのを、何うしたら可い事であらうと、相談相手にする  
 人さへも無いのであるから、そつと(かう云ふ場合であるゆゑ、  
 公然でなく)参内して下さらないか。若宮の事が、非常に氣が、  
 りである。露つばい中に(皆が泣いてばかり居る、寂しい葎の宿  
 に)明かし暮らしておいでになるのも、心配で(可哀相な事)あ  
 るから早く(一緒に)参内なさい。など、はき／＼とも仰しや  
 り切らず、(御涙に)御咽返り／＼遊ばしながら、又一つは(御側

弱く見奉るらむと、思しつゝ、ま  
 ぬにしもあらぬ御氣色の心苦し  
 さに、承りもはてぬやうにてな  
 むまかで侍りぬる」とて御文奉  
 る。母北方「目も見え侍らぬに、かくか  
 しこき仰せごとを光にてなむ」  
 とて見給ふ。

帝御文  
 「ほど経ば少しうち紛るゝ事も  
 やと、待ち過す月日にそへて、い  
 と忍び難きはわりなきわざに  
 なむ。いはけなき人もいかにと  
 思ひやりつゝ、もろともにはぐ  
 くまぬおぼつかなさを、今はな

の)人々も、餘り御心弱いと御見上げ申しはせまいかと、御氣が  
 ね遊ばして成らせられはせぬか、と存じ上げられるやうな御様  
 子の御氣の毒さに、仰せ言を皆迄承り終らぬほどで、(急いで、  
 御前を)退出致しました」と申して、(母夫人に)勅書をさし上げ  
 た。(母夫人は、泣き續けて)「涙に曇つて)目も見えませんけれ  
 ども、勿體ない仰せごとを光にいたしました」と言つて)拜見さ  
 れる。

勅書  
 「時日を経過したならば、(故更衣との永別の悲歎も)少しは紛  
 れる(薄らぐ)事もあらうかと、それを待つて過して居る月日が  
 重なるにつれて、(却つて、亡き人の戀しさの)堪へ難いのは、致  
 し方のない事である。幼い若宮も、何うして居るであらうと、心  
 にかけて居りながら、(汝にのみ打ち任せて)更衣と一緒に育て  
 ないのが、氣がかりな悲しいことであるから、今となつては、過  
 ぎた(更衣の)形身代りと思つて、(共々に)若宮を育てる爲に)お  
 いでなさい(即ち参内せられよ)」と御書き遊ばされてある。



ほ、昔のかたみになすらへても  
のし給へしなど細やかに書かせ  
給へり。

帝 「宮城野の露吹き結ぶ風の音に

小萩がもとを思ひこそやれし

とあれど、え見給ひ果てず。

母北方 「命長さのいとつらう思ふ給へ

知らるゝに、松の思はむ事だに  
恥かしう思ふ給へ侍れば、百敷  
に行きかひ侍らむことは、まし  
ていと憚り多くなむ。かしこき  
仰せごとをたび／＼承りなが  
ら、自らはをなむ思ひ給へ立つ

「宮城野の露吹き結ぶ風の音に

小萩がもとを思ひこそやれし

御製の意、宮城野(陸奥、萩の名所)の露が(冷やかな風がた  
つて)置く頃の、(秋冷寂寥の)風の音を聞くにつけ、小萩の邊り  
は(どうであらうかと)思ひやるよ。」「宮城(即ち内裏)でさへも、  
風冷かに露置く秋の頃、その風の音を聞けば、寂しい感じが増る  
ものを、故更衣邸に居る幼い若宮は、どうしてゐるであらう」(宮  
城野を宮中に、小萩を子にかけて御詠み遊ばされた)。

(母夫人は、もう胸が塞つて)えう終りまで拜見してしまふ事  
が出来ない。「(行末長くと祈つて居た、若い女は先立つて、役に  
も立たぬ老の私が、生き残つて居る)命の長いのを、しみたく辛  
い事だと思つて居りますので、誰にも、此の老婆がまた生きて居  
るといふ事は知らせたくない。のみならず、高砂の松の思はく  
さへも恥かしく存じて居りますから、(引歌、本巻解釋七七頁参照、  
晴がましい)宮中へ御出入致します事は、まして尙更憚り多

まじき。若宮はいかに思ほし知  
るにか、参り給はむ事をのみな  
む、思し急ぐめれば、理りに悲し  
う見奉り侍るなど、内々に思ひ  
給ふるさまを奏し給へ。ゆゝし  
き身に侍れば、かくておはしま  
すも、忌々し、忝くなど宜ふ。  
宮は大殿籠りにけり。見奉り  
て委しく御有様も奏し侍らまほ  
しきを、待ちおはしますすらむを、  
夜更け侍りぬべし」とて急ぐ。  
母北方 「くれ惑ふ心の闇も堪へがたき  
片端をだに、はるくばかりに聞

い、(以ての外の)事でございます。(これはどうしても、御遠慮  
すべき事である)。有難い(勿體ない)仰せを度々承りながら、  
(自分は)どうもえう思ひ立ちますまい(即ち思ひ立つ氣になれ  
ない)。若宮は(頑世ない御心ながら)と、いふ風に御承知  
なつていらつしやる事やら、宮中へ歸りたい／＼と、御急ぎにな  
る様でございますから、それも御無理のない事と、悲しく存じ上  
げて居りますと、(私の胸の中を、然るべく)禮々しくなく、あな  
たから御内々で、御奏聞遊ばして下さいませ。憚り多い身でこ  
ざいますから、(幸先を祈り奉る若宮が)かうして(こんな)老婆の  
所にいらつしやるのも、縁起悪く、恐れ多い事などとおつし  
やる。

命婦 「若宮様は、もう御寝なつたのでございますな。(一寸)は、  
獨言の様に申したかのやうに聞える)。御見上げ申して、委しく  
御様子も奏上致したうございますが、聖上が御待ちかねでなら  
せられませうし、(それに餘り)夜も更けませうから」とて、(歸り

こまほしう侍るを、私にも心のどかにまかで給へ。年ごろ嬉しく面ただしきついでにのみ、立ち寄り給ひしものを、かへすがへす消息にて見奉る、かへすがへすつれなき命にも侍るかな。生れし時より思ふ心ありし人にて、故大納言今はとなるまで、「ただこの人の宮仕の本意、必ず遂げさせ奉れ。われなくなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな」とかへすがへす諫め置かれ侍りしかば、はかばかしう後見思ふ

を急ぐ。母北方「子を思ふ」心の間にかき昏れ惑ふ、(悲しみの)懐へ切れぬ一端なりとも晴らす位(胸を透かせる程)に、お話し申し上げたうございませから、(公的をりでなく、お手すきの)お自由の折にでも、緩りと御出で下さいませ。年來は、(いつも)嬉しい面目をす様な時にばかり、お立ち寄り下さいましたものを、(今度は)この様な悲しい御使の(音信)で、お見上げ申すとは。打返し打ち返し(思へば)此の(長い)命の無情を考へさせられます。(あの女は)生れた時から、(私共夫婦には)思ふ仔細(即ち、宮仕の念願)があつた子で、故大納言(母夫人の夫)が臨終の直前迄、「此の女の宮仕の事を、必ず遂げさせてくれよ。自分が亡くなつたからとて、残念にも氣落して挫けてしまふな」と、くれぐれも意見して置かれましたものですから、確乎とした後楯の無い宮中(勤仕)交際は、なまなかの事(却つて)しない方が可い様な事)がありはしまいかとは存じながら、たゞ彼の(大納言の)遺言

人なき交らひは、なか／＼なるべき事と思ひ給へながら、ただかの遺言を違へじとばかりに、いだし立て侍りしを、身に餘るまでの御志の、萬に忝きに、人げなき恥を隠しつゝ、交らひ給ふめりつるを、人の嫉み深く積り、安からの事多くなり添ひ侍るに、横ざまなる様にて終にかくなり侍りぬれば、却りてはつらくなむ、畏き御志を思ひ給へられ侍る。これもわりなき心の欄になむ」と、言ひもやらず、むせ

に背くまいと思ふばかりに、(御宮仕に)差し上げたのでございしましたが、(存じがけない)身に餘る程の御寵愛の、何かにつけて(勿體無い程の)有難さに、人らしくもなく(輕蔑される)恥を受けつゝも、(帝の御蔭に寄つて)忍び／＼して、御交際も致して参つた様でございましたが、心配の事ばかり多く、お仲間の方方の嫉みが深く(更衣の)身に積つて、横死の様な有様で(皆にいちめ殺されたかの様に)、とう／＼こんな事になつてしまひましたので、却つて(帝の)恐れ多い御寵愛をお恨みにも存じます。これも、致し方のない(子を思ふ)心の欄と云ひ果てもせず、涙に咽せ返つて、居られる間に、(全く)夜も更けた。(命婦は直この前に、夜も更けぬべし)とて急いで居たが、遂に夜が更けてしまつたのである。聖上もさやうに(おつしやつて)ならせられます。御心ながら強ちに(無暗に)人の目を驚かす程に、(思召

かへり給ふ程に、夜も更けぬ。  
 命婦「うへもしかなむ。」我が御心  
 ながら、あながちに人目驚くば  
 かり思されしも、かく長かるま  
 じきなりけりと、今はつらかり  
 ける人の契になむ。世に聊かも  
 人の心を曲げたる事はあらじと  
 思ふを、ただこの人故にて、許多  
 さるまじき人の恨を負ひしはて  
 はては、かううち捨てられて、心  
 をさめむ方なきに、いとど人悪  
 う頑なになり侍るも、前の世ゆ  
 かしうなむ」と、うち返しつゝ、御

されたのも、こんなに長くない縁の故であつたのだなと思つて、  
 今では、(却つて)辛かつた更衣との約束ごと(因縁)であつたよ。  
 (嘗ては)聊かでも人の心を曲げ付けた事、(即ち、無理に壓倒し  
 た事)は無かつた積りであるのに、ただ此の人の故ばかりで、恨  
 を負はずともよい筈の、多くの人の恨を背負うた結局は、このや  
 うに(故更衣に)打ち捨てられて(ひとりこの世に生き残つて)、  
 心の亂れを取りをさめる方法も無い(悲しむ心のやり場が無い)  
 ので、一層不體裁に(見ともなく)、偏屈になつてしまつたのも  
 (宿縁であらうから)前世がなつかしいな。」と、繰返し(仰せ  
 られて)御涙勝ちにゐらせられます。」と語つて(なほ何時まで  
 も何時までも)談が盡きない。命婦は泣きつづけながら、「夜が  
 大層更けました(かうして居ては、明けてしまふであらうから)、  
 今宵のうちに御返事を奏上いたしませう」と云つて、急いで参内  
 する。

月は(今西山に)入らうとする頃の、空が清く澄み透つて、風が

しほたれがちにのみおはしま  
 す」と語りて盡させず、泣くく  
 「夜いたう更けぬれば、今宵過さ  
 ず御返り奏せむ」と急ぎ参る。  
 月は入りかたの空清う澄み渡  
 れるに、風いと涼しく吹きて、草  
 むらの蟲の聲々催しがほなる  
 も、いと立ち離れにくき草のも  
 となり。  
 命婦「鈴蟲の聲のかぎりをつくしても  
 長き夜あかすふる涙かな」  
 えも乗りやらず。  
 母北方「いとどしく蟲の音繁き浅茅生に

大層(冷やりとするほど)涼しく吹き、草むらに(すたく)蟲の聲  
 々が、(人の)涙をそゝるかの様であるのも、まことに(ふり切つ  
 て)離れては歸りにくい、蓬生の宿であつた。  
 命婦「鈴蟲の聲のかぎりをつくしても長き夜あかすふる涙かな」  
 歌意「(あの叢に鳴いてゐる)鈴蟲の様に、(自分の)聲のありだけ  
 を出し盡して(泣いても)、この長い夜通しなほ泣き足らず、  
 涙が(雨の様に)ふりこぼれますことよ(鈴の縁にて振ると、降  
 るとかけた。)  
 まだ、えう車に乗らずに居る。(後髪を引かれて、見返りつゝ、  
 ある命婦の歌に答へて、母夫人は名残惜しげに見送る)  
 母北方の返歌  
 「いとどしく蟲の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人」  
 歌意「(さうでなくても)非常に(呻々たる哀音咽ぶ)蟲の音の多  
 い荒庭(即ち露つばい浅茅生)に、涙の露をさへ置き添へられま  
 すよ、官中の御方が」  
 とかこち言(お怨言、即ち不満の詞)も申上げたい様に(存じ上げ

露おきそふる雲の上人。  
かことも聞えつべくなむ」と言  
はせ給ふ。

をかしき御贈物などあるべき  
折にもあらねば、ただかの御形  
見にとて、かゝるやうもやと残  
し(置き)給へりける御装束一領  
御髪上の調度めく物そへ給ふ。

若き人々、悲しき事は更にも  
いはず、内裏わたりを朝夕にな  
らひて、いとさうざうしく、うへ  
の御有様など思ひ出で聞ゆれ  
ば、とく参り給はむ事をそゝの

ます)わしと、人を以て(今車中の人となりつゝある)命婦に、お返  
歌を傳へられた。(御禮を申上げるのが當然であるけれども、貴  
婦がおいで下されて、かへつてますく泣かされましたといふ  
意)。

趣味ある(即ち、意匠を凝らした、その折に適合する様な)贈物  
などすべき場合でもないので、彼の(更衣の)形見にといふ意味  
で、かういふ様な時に際會する事もあらうかと、(母夫人が用意  
して)残して置かれた、(故更衣の)装束一揃に、御髪上の小道具  
やうの物をそへて、(命婦に)贈られる。

(若宮にお付き添ひ申して、里邸に来て居る)若き女官達は、  
(更衣に永別した)悲しい事は申す迄もない。(勿論の事である  
が、のみならず)宮中あたり(華々しい晴やかな生活)に朝夕慣れ  
て居る身が、(こんな所に引込んでばかり居るのは)非常に寂し  
く(とても堪へられない)ので、聖上の御様子や何かをお思ひ出  
し申上ぐるにつけ、(彌々宮中の戀しさが怵へ切れぬので、女官

かし聞ゆれど、かくいまくし  
き身の添ひ奉らむも、いと人聞  
き憂かるべし。また見奉らで、暫  
しもあらむは、いと後めたう思  
ひ聞え給ひて、すがくともえ  
参らせ奉り給はぬなりけり。

達)は母夫人に、「あの様な有難い御沙汰も、度々おありになるの  
ですから」と申して、早く御参内になる事をお勧め申すけれど  
も、(母夫人は)自分の様な不吉な老人が、(若宮に)御附添ひ申上  
げるのも、誠に外聞が悪からうし、(さうかと申して)又、(若宮の  
御顔を)御見上げ申さないで、少しの間でも居るのは、非常に氣  
がかりに存じ上げられるので、えうさつさと御参内を御させ申  
上げられないのである。

【解釋】野分。「のわき」とも、「のわけ」ともよむ。晩秋初冬へかけての、暴風を言  
ふ。「野分の風」といふのを略して、大抵野分と言つて居る。秋の千種の野を吹く意で  
ある。野分だつは、野分めくと同じで、暴風めいた荒々しい風が、をりく吹き始めた  
頃の景色である。



負 親

俄に膚寒き夕暮。急に、膚に冷々と浸み入る感じのする、夕方の意。(本巻評説八二頁参照)

親負の命婦。ゆげひは、ゆぎおひの約轉。親は、矢を入れる矢籠を言ふ。親負の府は、一名衛門府といひ、之は宮  
城の諸門を守る職で、左右にある。弓箭を帶する武官であるから、此の名がある。命婦は、もと五位に叙せられた女  
房の稱で、内命婦と外命婦との別があり、前者は、其の身五位以上の位あるもの、後者は、五位以上の人の妻室をい  
ふ。延喜以後、中蔵の女房を稱する様になつた。呼名は紛らはしさをさける爲、大抵親兄弟又は夫の官職を冠らせ

て呼んだ。技もその一例である。或はこれは、外命婦で、左衛門尉兼檢非違使判官の妻かともいふ。

夕月夜。新月より弦月の間の月、即ち、夕月頃の月をさす。平安朝になつては、夕月の宵の意味にも取るが、單に、夕月とのみの意にとる事も往々ある。この場合、「夜」は一種の接尾辭。

まかし。〔國辭〕(一)「可笑」(二)「面白し」(三)「風情あり」(四)「情趣あり」(五)「すぐれたり」(六)「むごとなり」(七)「優美なり」などの意味。

ながめ。「物思ひに一つところを凝視すること」「茫乎として物思ふかたち」等である。轉じて、眺望するの意。物の音をかき鳴らし。物の音は樂の音の事、「掻き鳴らし」は弾く事だから、弾き物即ち、管絃(いとだけ)の絃の方である。これを當時は皆「こと」と言つて居る。和琴・琴・箏・琵琶等である(後卷詳記)。婦人、殊に上流の婦人は、「こと」を弾くのみで、謠ふ事は大抵せぬのである。

はかなく聞え出づる言の葉も。「談話中になんでもないことを、一寸云ひ出す詞」である。又、「一寸よみ出す歌も」といふ意。〔玉〕に、これは歌のみではないといふ點に解し、〔源〕にも「言の葉」を歌に解するのは當らずとある。

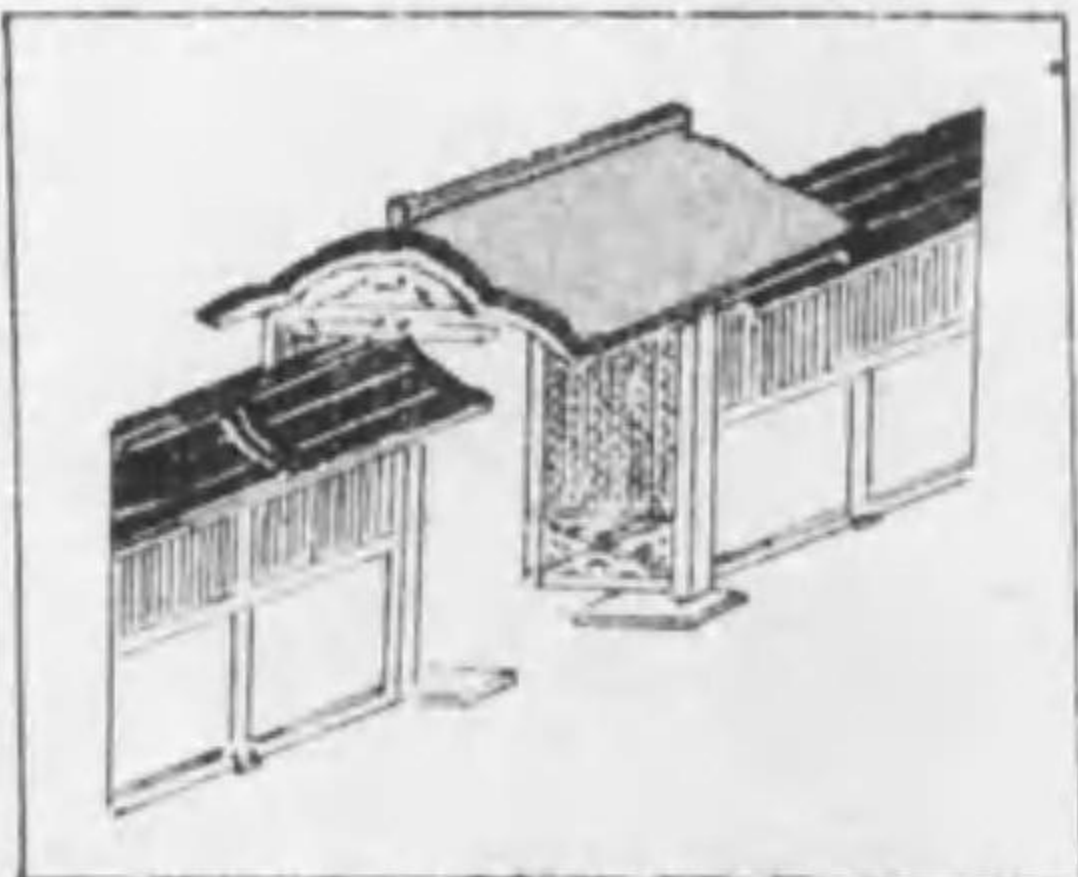
闇のうつゝ。古今十三、戀歌三に「ぬば玉の闇のうつゝは定かなる、夢にいくらもまさらざりけり」とある。歌意は、「暗闇に一寸逢つて別れてしまふのは、はつきり夢に見たより、どれ程も勝つてはゐない、餘りにはかないものである」。これを逆に引いて、帝御自身の御想像で描き出された更衣の幻影は、たとへ判然としてゐても、眞でないからつまらぬが、闇の中で一寸の間逢つて別れる様な、はかない逢瀬でも、本當なのだから勝つてゐるといふのである。又、夢よりもはかないの意にも取る。〔奥入〕にこの歌を引いてから、諸書も大抵これに隨つて居る。

門引き入るゝよりけはひあはれなり。表門、即ち大門があり、更に、家屋と大門との間に中門がある。尊貴の方

四脚門(天狗草紙)



中門(法然繪傳)



は車の儘、寢殿の階迄乗りつける。同輩は、中門で下車する。下輩は、表門にて下車するのである。婦人は、大分是等より寛である。

親負命婦は、御うちくでも勅使であるから、階迄乗りつけてもよい筈であるが、何分牛車は非常に重く、型も大きいから、邸によつては、階迄乗りつける事は困難であらう。現今の様に、車の昇降も玄關でなくて、寢殿や對の屋(座敷や居間の如き所の前)の立派な庭へ乗り入れるのであるから、寢道などを敷

いて下りて、そこを歩いた筈である。枕草子の大進生昌郎一件にても分る。

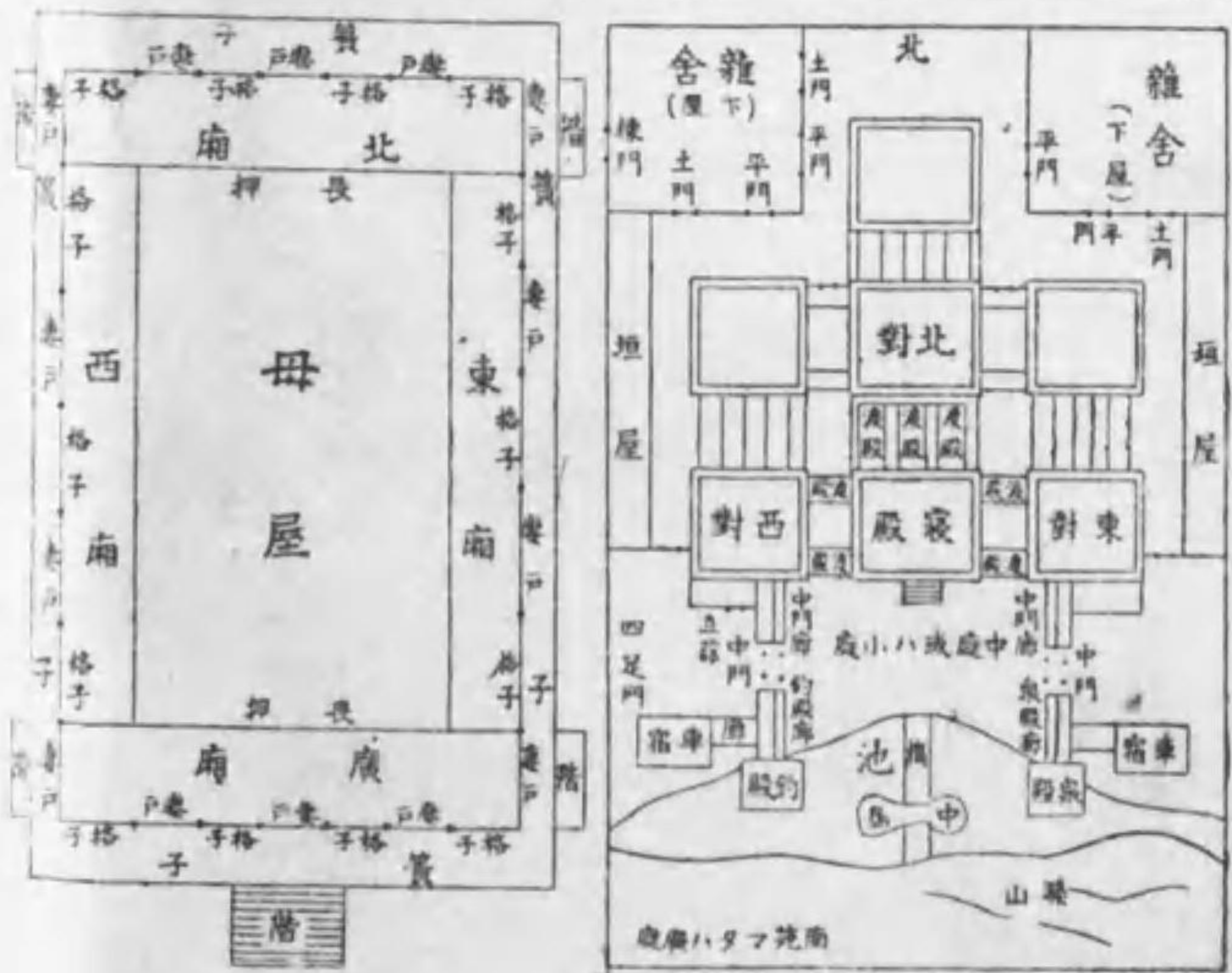
闇に暮れて。「二人女の死で、母夫人の心はまつくらになつて、夢中で泣きくらして」である。引歌は無くてもよからうが、左の歌は、この物語中に度々出て居るから、載せて置かう。

後撰。一五、雜一、兼輔朝臣、「人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」の意をうけて、我が子を先立てた、悲しさの心の暗にくれて、顔もえうあげずに、ふし沈みての意。

闇にくれて、(徳河内)の「くれやみにて」よりも(湖月)の本文通りの方がよいが、意味はさしてかはらぬ。伏し沈み。は「泣きふして居る」「悲みに沈み込んで居る」。又「泣き悲んで寢込んでしまつて居る」でも可い。

草も高くなり。邸の周囲の草も、高く伸び立つた。

寢殿造の圖 (上、見取圖 下、左、寢殿室再略圖 下、右、寢殿造平面圖)



八重葎。葎はもとより殊に多く交つて居たらうが、こゝは雑草の意である。葎は雑草の中でも殊に能く茂る蔓草で、非常に早く延び立つので、蓬・茅と共に、殊に荒れたる所に生ずるものであるから、あながちに葎に限らず、邸内の荒れて草多く茂れるを言つたものであらう。

八重は七重八重と、澤山茂り重なる意で、即ち、彌重葎の意であるが、現今は、植物學では菫草科の中に、八重葎といふ名目がある。これは、莖は細長くして刺毛に富む。葉は通常倒披針形を呈し、八箇づつ輪生する。花は小形で、帯白色を呈す。我が國の山野又荒庭などに自生するものである。

引歌、「新勅撰、春上、三條右大臣家の屏風に、貫之、

とふ人もなき宿なれど来る春は、八重葎にも障らざりけり」。

こゝも、月かげのみは變らすと、今昔の感を深めたのである。

南面。南向である。すべて人の家は、南向をよしとする。故に、南おもての屋舎を正面とするから、必しも眞南向でなくても、寢殿の正面を、南おもてといひならはしてゐる。南面の寢殿(母屋、もや、おもや、即ち現今の表座敷)で、此の方面が主人の住ひであり、奥の方、即ち北が妻の住む所である。けれども實際は、對の屋に大抵住んだものであるから、勿論、寢殿の裏の北には居なかつたであらう。

蓬生。蓬のはえて居る所。蓬は菊科の多年生草本、高さ二三尺に達す。葉は互生、長卵形にて羽狀に分裂し、裏面に灰白色の毛を密生する。花は小さき頭狀花序に排列し、淡褐色の筒狀花冠を有し、山野に自生する。

生は「ある物の生えて居る所」、又は「ある物の存在する所」をさす。「蓬生」「淺茅生」「埴生」の如し。但、蓬や葎は雑草中にて最も成長の早く、繁茂の甚しいものであるからこんな風に言ふので、つまり草深い所、草原等の意であ

る。こゝは、「こんな荒屋へ」と云ふ様な、謙遜の詞である。

えたうまじく。えう耐へ切れさうもなくの意。

げにこそいと忍び難う。「げにえ堪うまじく」の所のげには「本當に」の意。こゝのげには「なる程」の意で、「なるほど典侍がおつしやつた通りで」の意になる。

迎る。「言」(一)「手取る」「尋ね探り取る」「模索」(二)「知らぬ道を色々と迷ひ尋ね行く」(三)「知り分けむと様々に思ふ」等。こゝは、夢か現実かと心に思ひまどひて、探り求むる意。

露けき中。「濕つばい」といふ意味であるが、前に「見奉る人さへ露けき秋なり」と言ひ、又「かゝる蓬生の露分け入り給ふ」とある處に、縁を引いて居る。

わりなし。「道理なし」「わけもなし」などの意とあるから、こゝには「致し方なし」と解す。

いはけなし。「小兒らし」「あどけなし」「頑世なし」「幼」に同じ。

はぐくむ。「言」「羽合む」「やしなひそだつる」「養育」。大切に育てる意である。

ものす。事を爲す凡べての動作。(一)「そのさまにてあり」「あり」「居る」(自動)。(二)「或る動作をなす」「或る物事を行ふ」「なす」(他動)。

宮城野。奥州の萩の名所。今は練兵場になつて居る。

こはぎ。「小萩」「木萩」で、草萩と木萩と二種あるといふ説もあるが、さうではない。萩は根から生ひ立つた莖を刈らずに置くと、年々太くなり、段々成長して行くが、小萩は大抵枯れてしまふ。その太いのを、昔は「木萩」と言つて、二種あつたものと思つたものであらう。併し、皆刈つてしまつた方が、花は良くなるが、もとあらのこ萩は、又

一寸雅致はある様だ。「もとあらのこ萩」とは、小枝は大方枯れ落ちて、太い莖だけが残つて、灌木狀をなすから本荒と書くが、本疎で、本の所の枝がまばらな所から號けたのであらう。因みに記し添へて置く。

命長さのいと辛う思う給へ知らるゝに。莊子天地篇の「壽則多辱」と云ふ語から、こんな詞が出て流布したのである。

松の思はん事だに恥かしう。古今十九、誹語、「何をして身の徒らに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき」

又、古今六帖、「いかにしてありと知られむ高砂の松の思はむ事も恥かし」などから引いたのであらう。

高砂といふのは、今は高砂の松とて、播磨國の名所となつて、世に普く聞えて居るが、その始めは、何處でも砂の高く積つて山をなした處を言つたものである。この歌の意は、「どうかして自分が生きてゐると云ふ事を、世の中に知らせたくない。高砂の松にさへ、またあの人は生きてゐるのかと思はれるのは、即ち非情の松にさへも恥かしい。まして有情の人間に思はれる事はなほつらい」といふ意で、夫に先立たれ、いとしい女に死なれ、なほをめぐりと長らへてゐると思はれるのがつらい、といふ意である。

もやしき。宮中をさす。此の語はもと「百敷の宮」などの枕詞で、即ち「百敷の大宮人は暇あれや」等に用ひたのであるが、後に、宮中と同様に使ふ様になつた。丁度「久方の」が、天・空・雲井等の枕詞であつたのが、天・空・雲井等と同様に使つて、「久方の光のどけき」などといふ様になつた様なものである。

「もやしき」は百石城で、澤山の石を周圍に積み重ねた、堅固なる宮城の意である。いろ／＼説もあるがこゝには省く。

ゆゝし。もと心に敬虔的慎みを持たねばならぬ意から轉じたのである。「國辭」(一)「思々し」「思み憚るべく

あり「恐きにも嫌はしきにもいふ」(二)「らみじ」「一通りならず」「すばらし」「めざまし」「容易ならず」(三)「けなげなり」「をらし」「非凡なり」等の意があるが、こゝは(一)の意で、不吉なる事。  
 いま／＼し。【國辭】(一)「齋み慎むべくあり」「いみ／＼し」(二)「忌み嫌ふべくあり」「えんざわろし」(三)「いやらしく憎し」「はらたたし」。この語はもと、物忌などいふものより出で来たのだといふ。或ひはさうであらう。「若宮が更衣の母にそひおはすも、いま／＼しき」意。即ち、おそれがましき心である。  
 宮は大殿籠りにけり。命婦が、一寸獨語のやうにいつたと解して、却つて、こゝのけはひが浮んで来るやうに思はれる。(本卷評説八九頁参照)

大殿籠り。「御殿籠り」とも云ふ。至尊の御寝の殿に入らせ給ふをいふ。(本卷一五頁参照)  
 はるくばかりに。「晴らす位に」の意。「はるく」は、晴けすをつつめていつたのである。「胸の透く事」「晴々する」意。終止につくのが古法で、連體につくのは後世の事である。

まかて給へ。宮中に居る人であるから、「退出しておいで下さい」といつたのである。  
 面だたし。これも「面起たし」と「面正し」と二説あるが、「おも起たし」と讀んで「おもてだたし」「面て起し」の意に採る。「面伏せ」「面目ない時」。面を伏せるの反對に、自然と面が上つて来る状態である。「面正し」でも、大した違ひはあるまい。

せうそこ。せうそくの音便。「大徳」を「大徳」といふのと同じである。「おとなふ」「音信」「書通」「案内」等。かへすがへすつれなき命。前にも、母君は度々長命の愚痴を云つて居られたから、こゝで「返す／＼」と言ふのである。

今はとなるまで。「今は臨終の時」と言ふのを約して、「今は」と常に云ふ。  
 くづほる。古きかなにて「久都保里」、又「くづほる」と書くのは「朽折」の意。大した違ひはないが、「くづほり」の方に従つて置く。意味は「氣落のする」ことで、くた／＼になる様の意である。

いさめ。こゝの「いさめ」は、語源の「勇め」「激勵」の意味が含まれて居る様である。(一)「氣満ち張りて進む」(二)「いさむること」「意見」「忠告」「諫言」「注意」「禁制」等、先づ「苦情」と解して置く。(本文解釋一六頁参照)うしろみ思ふ人。「後見」即ち、世話してくれる人の意。(本卷解釋一二頁参照)

なか／＼。「なまなか」の意。(一)「半らにて」「半途にて」(二)「なまなかに」(三)轉じて「却つて」「結局」(四)轉じて「相應に」「頗る」(五)又轉じて「容易にはむつかし」「とても」(六)謠曲・狂言の詞にて「いかさま」「さなり」「勿論」等にも用ふ。なほ(本文解釋一七頁参照)

人げなき恥。「一人前の人らしくない恥」の意である。他の女御方は勿論、大臣級の息女であり、更衣と言つても兩親が揃つて能く世話を焼くとか、富裕であるとか云ふ中に、桐壺更衣は母のみで、生家も豊かでないからかく言ふ。即ち門地が他に比しては低く、父も無いので氣壓される意。

めり。物事の狀態の「その様子に見ゆ」、又「その様に覺ゆ」と推量していふ語。又推量の意なきも、語調を和らげていふ時に用ふ。つまり婉曲になるのである。

積さま。「正しくない」「普通でない」の意だから、横死、非命の死の様な氣持がする。即ち人の妬みなどが積つてうせたから、横死の様に思つた。多少他の調伏にでもあつたかのやうな意味を含めて居る。

人の契になむ。此の「人の」は、無くてよい譯である。何も意味は無いが、斯う云ふ風の所に人を入れると、



が強くなる。他にも、往々此の例がある。現今、入れずとも可い所に、やはり人を使つて、語意を強<sup>ク</sup>が、それは大抵、少し他に對つて憤る様な所に使ふ。「何、人、馬鹿にして居る」等の如く用ひるのである。「人の人の親」等。

人の心を曲げたる。「曲げ付る意」「壓抑する」等である。

さるまじき人の恨を負ひ。「恨みを負はずともよい筈の人の、恨みを背負ひ込む」。又「恨まれる筈のない人の恨み」とも解せられない事もなからうが、先づ前者の方が然るべきか。

人悪ろし。「不體裁」「見つともない」「外見悪く」などの意。

かたくな。「頑な」であるが、「偏屈」「意固地」等。かたくなになるは、心持にゆとりがなくなる。鍛練の出来て居ないなども解して、やはり頑より出て、こゝは悲歎に偏り、固まり着いた様の意。

前の世ゆかしう。前世の宿縁。即ち、佛家に、夫婦は二世の縁と言つたからである。「ゆかし」は、「見たい」「聞

たい」「知りたい」と欲する意で、「懐しむ意」。「ゆかし」はもと「行かし」で、心が行く様になる意。善惡兩用だつた。

しほたれ。「鹽垂」でもと潮水を垂らす事にて、潮汲む海人の衣の濡れるの言つた。轉じて、涙に袖が濡れそぼれるを云ふ。又轉じて、「泣き入る」「歎きに沈む」等。

草のもと。前に「草も高くなり」とあり、母夫人が「蓬生の露分け入り給ふにつけても」といひ、又「草むら」「淺茅生」などとあるから、「草のもと」と言つたのは、文章のあやである。

鈴蟲の聲のかぎりを盡しても長き夜あかずふる涙かな。

鈴蟲は、當時鈴蟲と言つたのが今の松蟲で、今いふ松蟲が昔の鈴蟲である。見蟲類中直翅類の一種で、頭小さく、

後部大にして黒褐色を呈す。鳴聲は、右前翅に、發音鏡と名附くる特殊の構造を有するものが、左前翅と相摩擦するによりて發する。

この歌は、修辭上よりいふと、事實と比喻とが相半ばするもので、詩の作法中比・賦・興の三體中の、興に屬する體である。歌意は「今淺ぢふの庭でないてゐる鈴蟲の様に、聲のありたけを盡して、長夜を泣きあかしてもなほあき足らず、あとからくと涙がこぼれる」の意。(鈴蟲を詠み、鈴といつたから、鈴の縁語で、振ると降るとをかけた)。

ても。もは歎辭、「まあ」などの意。

あざぢふ。「あざぢ」は、茅のまばらに生えて居るをいふ。生は蓬生と同じ場所で、茅が疎らに生えて居る處であるが、疎らに生ふる茅をあざぢと云ふのは、少し言ひ方が變であるといふ説もあるが、兎に角、先づ、右の様に意味は取つて居る。

雲の上人。公卿・殿上人の總稱であるから、命婦には少し適當でない様だが、勅使であり、命婦なる者は、當時は中藪をも稱して居た事であるし、且常に聖上みまごの御用も勤めるのであるゆゑ、大凡にかう云つたのであらう。雲上とは、即ち禁裏をさすのであるが、古今の「久方の雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける」などといつて、天上の意味に通はして用ひた。昔は、露も天より降り下つたものと思つて居たから、かういふ風にも詠んだのであらう。かごと。假言かりごとの略。かこつくる言。轉じて「言ひ譯迄に」「少しなる事」「いひまへ」「不平」「小言」等。こゝの意味は、恨みとか愚痴とか云ふ様な事を、いひまへにする様の意。

御おくり物。當時かう云ふ階級では、御使の人には必ず贈物をする例で、それが、なか／＼鄭重の品であつた。河内本には、御が無い。その方がよからうが、命婦に對して極く丁寧を取扱つたとすれば、それでもよからう。

裝束一くだり。一揃又一具、一領等。袴・打衣・單衣・袷衣・裳・唐衣等一切をいふ。「くだり」と云ふのは、當時大抵、衣桁様の物へ打ち掛け垂らして置いたから、かく云ふとの説もある。

御髪上の調度。髪上の具の細々した物。「み」は、敬語をそへたのである。

婦人大禮服の時には、必ず髪上をする。そして、御陪膳に伺候の女官は、髪上するのが例である。(本卷評説九一頁参照)

調度は、今普通にいふ道具の事であるが、道具はもと、佛道の具の意味で、佛具を稱したものであり、武門時代になつては、弓矢刀槍の如き武具を、武士の「表道具」と稱した。(本卷評説九二頁参照)

さうさうし。「言」「淋々」の音使「寂寥」。

すがくとも。「さつぱりと思ひきつて」「さわやかにとどこほりなし」などの意。



(御髪上の調度)

【評説】 ○野分だちて。といふのは、「野分めいて」である。「廣道説」には「吹き立つ」とある。さう解したいやうな所もあるが、こゝは、餘りに、本當の暴風雨でなく、野分めいたといふ程度であつた方が、しんみりとした調子に當て箝つて、よいと思ふ。

○俄にはだ寒き夕暮。といふのを「將寒き」と讀ませる説もある。俄にをうけて「將」といふのも、一寸可いやうだが、やはりこれは「膚」の方が善い。萬葉集にも「膚寒し」といふ詞が往々ある。

○はかなく聞え出づる言の葉も。これは歌のみではない。「玉」の解がよい。(解釋七二頁参照)  
○夕月夜のをかしきほど。靱負命婦が、御使として宮中を出たのが、夕月の光仄めくほど、極めて情趣ある景色の時刻であつた。その月が、段々更衣邸にさし入りなどして、夜半西に傾き沈む頃迄を、愁歎場の背景にあしらつて、折からの状況を、巧妙に縷述してゐる。いつも申す様に、當時の人、殊に作者は、自然界との交渉が非常に深甚であるから、かゝる點に、常に能く注意して居らぬと、物語の意味の深淵を探る事が出来ないのである。此の邊りからの愁歎場面が、昔から非常に名高く、賞讃せられる所である。如何にも事柄の組立の巧妙なのに、文章も亦、能く精練してある様に思はれる。

○心ことなる物の音を掻き鳴らし。とあるが、當時の樂には、勿論大抵、譜が添うてあつたと云ふ(今は傳はらぬものが多いと云ふが)。如何にもさうであつたらうが、併し「珍らかなる音」「なほ聞き知らぬ音」と云ふ様な事が、折々物語中に見えるのは、恐くは、彈者がその折々の季節に調和し、事物を捕捉して、勝手に自家流に弾じたものではあるまいか(尤も、調子にも整然と合せる様にするのは、無論であつたとしても)。愚案を述べる次第は、薩摩琵琶と云ふものは、全く彈者の考へで、時に合つた様に弾くべきものだから(勿論、大抵のきまりはあるが)、彈者の巧拙によつて非常の差があるものだと聞いた事がある。或はそうかも知れぬ。但あの弾き方は、殆ど他の樂の合の手の様なものだから、整然とした弾法は無いのだと云ふ説もあるが、暫く因みに記して、専門家の示教を待つ事にしよう。

○闇の現。「奥入」に、古今集の「ぬば玉」の歌を引いてから、皆この解に随つてゐる。

○闇にくれて。「徳河内」の「くれやみにて」よりも、この方が善いと思ふが、これも「くらやみ」の意だから、やはり「眞暗まつくらになつて」の意である。

○野分にいとど荒れたる心地して。この心地には、少しく注意が致したい。全く野分の爲に荒れはてたのではなくて、(多少野分だつて幾分荒れても居たではあらうが)、「門引き入るゝよりけはひ殊ひじにあはれ」に思つた命婦が感情から、野分にもひどく荒れた様な氣持がすると解してこそ、前段の「門引き入るゝ云々」の句が、一層身にしむ様に思はれる。それから、母夫人が未亡人の手一つで、どうにか官仕の女の、なるべく肩身の狭くない様にと氣を張つて、常に注意を怠らず、内輪は随分苦しくもあつたらうが、兎に角邸園の修繕手入も、見苦しからぬ程度にはして居られたのが、ふいと若い一人女に先立たれた悲哀落膽に、「暗にくれて伏し沈んで居る」間に、繁茂の極めて迅速な蓬葎むらさきなどが、すんすん伸び立つた有様は、實に能く云ひ盡してある。(今云ふ所の「かな葎」なるものゝ成長を驗する爲に、自分は蔓に印をつけて置いたら、僅か一夜の中に、鯨尺一尺以上伸びて居た)。

○母君も。「徳河内」には「も」がある。「も」があれば、母君も御使の命婦も、共に涙が先立つて、急にものが言はれぬ状態あまはが見れて、猶よいと思ふ。

○親命婦が、物思ひ給へ知らぬ心地にも」と、謙遜の詞を使つたのは尤の事で、典侍は、四位相當の上官であるが、命婦は所謂「おしも」なる、典侍より低い位置であるから尤な事で(勿論命婦を當時は中蔵とは稱したといつても)。我々も、往々やむことなき邊りの事に就いて、「嬉しい」とか、「御安心申上げる」などと云ふ時には、必ず「恐れながら」とか、「畏こいけれど」などと云ふ詞を使ふのと同様である。命婦が、こゝで先づ開口一番に、典侍が奏上された所の深き同情の詞を取り出したのは、全く、當場面に於ける談話の成功である。

一體當時の人は、餘程辭令に巧たくみである。常に能く研究し、熟練して居たものと見える。それは、一つは中以上の男女は大抵、物を隔て、顔を見ないで話すのである。現今電話の談話には、往々感情の疎通を缺き、圓滿にゆかぬ事があるなど、云ふのも、面貌姿態の表情が助けないからである。故に、平安朝頃の上流社會では、談話を特に大切にし、従つて、今より餘程巧妙であつた様思はれる。當時の社交生活には、聲音は、重要な役割をもつて居た譯である。

○この勅諭の傳へ方は、非常にむつかしいのである。一體傳言をその通りに間違へない様に、當人の心持の先方に能く通ずる様に言ふのは、随分至難な事で、さうかと云つて、自己の考へが傳言者の言に交り込む様では、尙更いけないし、馴れないと、殊になか／＼むつかしいのである。

こゝも、「暫しは夢かとのみ辿られしを」から、「露けき中に過し給ふも心苦しう」迄は、帝の御言葉通りに云つて居る。そして、その御言葉の終り際の「心苦しう、おぼさるゝを」は、御使が、一寸敬語を添へ

て言つて居り、「とく参り給へ」は又、帝の御言葉通りである。それから後は、命婦が、帝の御様子を申上げるのであるから、勿論一つ／＼敬語を使つて居るのは當然で、又むつかしくもないが、御言葉の間へ、時々敬語を添へる所が、馴れないと一寸面倒なのである。

それから、かしこき勅語をもえう承り果てない様な風に、そこ／＼にして急いで退出致

婦が申したのは、随分注意周到である。帝は、殆ど常を失はせ給ふ程の御敷きであるから、帝としては、更衣の母位へ、餘りに御丁寧過ぎ、深甚過ぎる勅語も出て来たであらう。即ち、御涙のひまよりあとからあとからと、色々勿體ない御言葉が出て来るらしい(御製の御歌や御文を拜して恐察すると)。それを餘りに過當だなどと、命婦風情の人が思つて、先方へ傳へる事を省くのは恐れ多いし、さりとて、過分の御沙汰を傳へるのは、如何なものであらうかと、斟酌分別したのであらう。定めて「早く行け」との御沙汰もあつたらうから、それに託言して、急いで御前をすべり出たのは、甚だ手際である。

○勅語の最初の、「忍びては参り給ひなむや」と軟かく、老夫人を御いたはりの御言葉があつて、その實、母夫人も氣の毒、若宮は殊に御可哀相であり、御戀しく思召される所から、後には御感情が迫つて來て、「とく参り給へ」と仰せられた所なども、實に能く寫してある。

○目も見え侍らぬに。諸家もいはれて居るやうに、一寸こゝは物足らぬ様にある。脱字があるか、さうでなければ、引歌があつたのではないか。引歌などあれば、大抵はつきりしよう。

後撰、十三、戀五、好古朝臣、「こと女のものいふと聞きて、もとの妻の内侍のふすべ侍れば、

目も見えず涙の雨のしぐるれば身のぬれ衣をほすよしもなし」と云ふがあるといふ説は、先づ妥當の様である。

○光にてなむ。の光は、實に力がある。この一字で、母夫人が、帝の叙慮を畏こまり、有難がつて、崩された氣持を引き立て、感激して勅書を拜見した様子が、髣髴として、目に浮んで來る様にある。

○諸共にはぐくまぬおぼつかなきを。「抄」「桐壺更衣と諸共に育まぬと也」。「師」「更衣かくれ給へば、帝ひとり若宮をおぼつかなく思し召すと也」。「玉」「これは、諸共に、育まぬがおぼつかなきを」と有りけんを、「が」文字落し「きを」に誤れるなるべし。本のまゝにては穩かならず。さて「諸共に」は更衣の母と諸共に也。若宮里に在しまして、祖母ひとりして育みて、帝の諸共にはえ育み給はぬよし也。更衣と諸共にといへる註はひがごと也。さては、「おぼつかなき」といふ詞かなはず」。

○昔の形見に云々。「玉」前畧「註に更衣の形見に見給へといへるはかなはず。さては、上の文、下の御歌にいととし」。なほ「宮田氏」「沼波氏」ともに、「玉」の説にほぼ一致す。「島津氏」には「二人と一緒に養育せぬのが、物足りなくてならぬから、更衣こそは無くとも、やはりその人の形見と想うて、伴なつて参内してはなど云々」とある。そうした所で、少し分りにくいのが、やはり先づ、帝が母夫人を、更衣の形見に准じて見ようから、(即ち、更衣の代りに若宮養育の相談相手に爲る)「ものし給へ」即ち

宮中へ参りなさい、「一緒に若宮を育てたいから」と解して置く。

○露吹き結ぶ。露の置く事を、結ぶといふ。風が吹いて、露が結ぶと云ふのが無理だと云ふ所から、種々の説があるが、先づ、秋風が冷やかに吹いて、露が結ぶ様になる季節の情況と見てよからう。秋は露が繁く置くから、秋のみは風の吹く夜も露が結ぶと解して、後世態々秋の歌によんだ例もあるが、これは多少臆説でもあらう。

○高砂の松。此の歌の載つてゐる、古今六帖といふ歌集は、村上天皇の頃に出来たものらしいと云ふ。醍醐・村上兩朝の歌が多く、古い所では、萬葉のも多少ある。勅撰の古今・後撰等の歌集以外のものでは、當時の歌を引くには、必要の集であるから、物語類には、六帖の歌が随分多く引用されて居る様だ。編者は、紀貫之の女の内侍だといふ説もあるが、たしかではない。つまり、編者は能く分らぬ。六帖は、六卷の意である。

○内々に思う給ふる様を奏し給へ。「思う給ふる」は、自らの事を云ふのだから、「給ふる」であらねばならぬ。「給へる」にては、人のうへを云ふ事になるから、寫し誤りであらうと様に「玉」に云はれたのであつたが、全く、其の通りであらう。「湖」には「給へるとあるが、「徳河内」「平河内」「首書」にはみな「思ひ給ふる」とある。蓋し昔は、おくりがなは大抵、讀み間違ひさうなものにだけ附けた様であつて、餘りきまりも無いのだから、殊に、往々かゝる間違ひも生じ易い譯である。

母君は、「闇に昏れて伏し沈んで」居られたし、又、帝の勅書や勅語の有難さ、勿體なきに感激し、強ひて氣を引き立て、且、御使の命婦に慰められた嬉しさに力づいて、禮儀も亂すまいと努め、帝の恐れ多い御沙汰に對し奉つては、精々敬意を拂つて應答して居られた様であつたが、自分から持ち出した愛嬢逝去の繰り返し話に、段々昂奮して、感情が益々高まつて来て、帝の御殊寵に對して、かへりては辛く御恨みにさへ思ふと様に、極端に愚痴つばくなつた。併し又、はつとした様に「これもわりなき心の間になむ」と、泣き入つてしまはれた。命婦は、帝が「待ちおはすらむ」と氣を揉みながら、立つしほもなく、この愁歎場は何時迄続くかと讀者も氣を揉んで居る所で、「夜も更けぬ」と、所謂「氣をつけッ」の一語を出したのは、如何にもきびくしくして善い。斯う云ふ書き方は、蓋し作者の得意な筆法である。

○宮は大殿籠りにけり。「玉」に「命婦の詞」と解し、「秋原廣道」も、先づそれによつて居る。「按」には「只大殿籠りにけりとのみありて、敬語の無きは、猶地の文かと思はる」とある。なる程、命婦の詞としては、敬語が足りないけれども、こんな風の使ひ方も無いでもない。が自分は、命婦が、一寸獨語的に申したとやうに解して置く。但、やはりかういふ風に解して居る人もあるやうだ。

○奏し侍らまほしきを。待ち在すらむを。を、はいづれもにといふべき所である。この後のをはにと同じで、この用法はその例多く、誤りにはあらずと「廣道」はいはれた。又「を」が無くて、「待ちおはすらむに」と「徳河内」にはある。

但、このをの近く重なつてゐるのは、やはり、一寸耳立つ様にはある。一體「を」と「に」とは、殆ど同様の意味に用ふるのであるが、一寸、其の少しの差を云つて見よう。或發句の宗匠の所へ、門人が一句持つて來た。當人は大分得意で、宗匠に褒められる積りであつた。その句は「米洗ふ前に螢の二つ三つ」といふのである。宗匠暫く首を傾けて居たが、「なる程、一寸面白いが、この螢は死んで居るな。予が活かしてやらう」と云つて、「米洗ふ前を螢の二つ三つ」と、かうすると生きる。「米洗ふ前にさざれの二つ三つ」とも云はれぬ事はないが、「米洗ふ前をさざれの」とは言はれまいと云はれたとの話がある。即ち、をは多少動的の意を含み、には不動的の状を示すのである。

○鈴蟲の歌。何ぞと云ふと直に引歌などを取り出して來るのは、當時の慣例である。愁歎場や心配のある時に、餘りに技巧を弄し過ぎて眞鍮味を缺く様であるけれども、此の時代の人は、有名な古歌等は口癖の様になつて居たのだから、強ち思ひ廻らして思索を練る様な譯でもなかつたらうと思はれる。○かの御形見にとてかゝる用もやと残し置き給へりける云々。「徳河内」の置きとある方による。無くてもよからうが、あつた方が然るべしと思はれる。

侍女達も多くある所の人の死後には、其等の人々の身分の高下、奉仕の年月の長短、親疎の區別によつて、それぞれ故人の衣裝調度等を、形見分かたみわけと號して遣はす慣例があるから、母夫人は悲歎の中でも、ちやんとしわけて置かれたものと見える。殊に、宮中の女官などに贈る形見の品は、先づ第一に然るべき

物を取り除けて、用意して置いたのであらう。なる程、「母北の方なむ古の人のよしあるにて、(中略)世のおぼえ花やかなる御方々にも劣らず、何事の儀式をももてなし云々」とあるに適合して、隨分行届いた老夫人であつたらうと首肯されるのである。

○御髮上の調度。御陪膳の女官が髮上するのは、最初は、油氣の無い垂髮であるから、脱毛などが御食物へ入つたりせぬ様に、垂れた髮を上へ巻き束ね取り上げて、櫛やさいじ(今のピン)で止めて置いたのに始まつたのだといふ説もある。御陪膳の折は、必ず髮上するといふ例から推せば、いかにもさう有りさうに思はれるが、何うも、奈良朝頃迄の貴婦人は、吉祥天女の様な風に髮を取り上げて、頭部に裝飾を施して居た様であるから、強ち前者の説の通りだとも定められまいが、平安朝當時は垂髮となり、御陪膳には勿論髮上する例である。近來迄、大禮服どころの節は、必ず髮上する事であつた。現代は皇族以上の妃の宮だけが、日本風御大禮服のみに、御髮上遊ばさるゝ事となつた。

調度は「てうど」。「源」には「でう」と濁つて載せてある。總體源氏物語は、隨分讀み方がむつかしいが、やはり「てうど」と讀む方がよい。前にも一寸申したやうに、讀み方がよいと、やさしい部分は素讀を聴くだけでも、かつくゝわかるものである。で讀み方が悪いと、名文章も引き立たないと云ふが、いかにもさうであらう。

此の場面は、特に有名な美文として歎賞され、且、人情の極致を寫し出されて居ると、多くの禮讚を得

て居る所であるから、今更諄々と云ふ必要は無いかも知れぬが、どうも、無語でも措かれぬから、なほ自分も、少しく述べて見たいと思ふのである。

總じて、君邊奉仕の人達は、動作の優雅、應對の巧緻なる事は、今古東西殆ど同一轍であるけれども、就中、平安朝當時の、上流社會の人の動作の優美であり、辭令の巧であつたらしい事は、特に源氏物語に於いて、最も深く感心させられるのであるが、此の靱負命婦の應答辭は、特に又上手であり、巧妙である。がそれのみではない。この人の言語態度には、全く眞に暖かい同情が溢れて居る。それは、親しく昵近し奉る帝の、「涙にひちて明かし暮らさせ給ふを」見奉る人々の、袖の乾かぬ點からも、なほ更衣の「人柄のあはれになさけ有りし御心を」戀ひ忍びあひて居た所の、うへの女房達の中でも、最も帝の親しく思召す中の一人であらうと思はれる命婦が、忍びやかに御使に立つて、更に母夫人の悲歎の狀を見て、衷心からお氣の毒と感じた情が、あり／＼と寫し出されて居る。君邊奉仕の人の常習になつてゐる心遣ひ、帝が嘸御待ちかねであらうから、早く還つて復命しなければと思ひ／＼しつゝも、心の許される同情者と認めて、母夫人の無理ならぬ愚痴は、云つても／＼云ひ盡せない。「もう段々夜が更けますから」と立ちかけて居る御使を、涙の目に名殘惜しげに見てなほ、後から／＼と話しかけられるので、つい立場を失つて、とう／＼夜半も過ぐる程になつた。思ひ切つて暇を告げて、車に乗らうとしても、定めて母夫人の泣きしやくる忍び音も、簾越に洩れて聞えたであらう。「えも乗りやらす」最後に殘す歌

を切つかけに、やつと車中の人となつた有様も、誠に眞に迫つて善い。此の婦人は、輕佻な、口先ばかり甘い、所謂普通の宮仕人の列でない。流石に、桐壺帝の御手許に、特に親しき女官、心にくき女房中の一入として、御信任あらせられるだけの人と思はれる。命婦その人の態度は、誠に懐かしげである。そして母夫人の、子故の間に昏れ迷ひて、「畏き御志をかへりてはつらく」さへに思ふと言ふ様に、愚痴の繰言を並べて居るけれども、流石に、寡婦生活に忘れ形見の息女を、先づどうやら引けを取らせぬ迄に後見して、行つて退けた氣象も仄見えて、典雅な上の女房との應對は、禮にとどまる底の上品さを失はないから、母夫人の泣言も、第三者はうるさいとも變だとも感ぜず、寧ろ、同情を以て見る様になるのである。況して、命婦の言動は全く、かゝる時代の上流生活に浸つた人でなければ、かうは言はれまいと感心させられる。

殊に叙景に至つては、著者獨特の妙味を呈して居る。「夕月夜のをかきさほど」、即ち仄めきそめた頃から、段々淡い光も澄み増つて、西に傾く情況から、野分に荒れし心地する、衷中の女世帯の物寂しい邸内に、時はこれ、秋の末近き折柄である。叢の露も蟲の音も、一つとして悲哀の種とならぬものは無い。讀んで行く間に、自らその愁歎場に引き入れられる様な心地がする。正に、此の叙景方面だけを見ても、此の卷は著者が、數回文章も練つて、餘程推敲したものであらうと思はれる次第である。

命婦は(参りて)まだ大殿籠らせ給はざりけるを、あはれに見奉る。御前の壺前栽の、いとおもしろきさかりなるを御覽するやうにて、忍びやかに、心にくさかぎりの女房四五人侍らはせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。

この頃、且暮御覽する長恨歌の御繪、亭子院のかゝせ給ひて、伊勢・貫之に詠ませ給へるやまと言葉をも、もろこしのうたをも、ただその筋をぞ枕ごとにせさせ給ふ。いとこまやかに有様

【口譯】 命婦は参内して、(存外に先方で暇取つて、夜半過にもなつたのだから、帝は、定めて御寝になつたであらうと、心迫きつゝ御前へ)参つて(見ると)、また御寝にもならないのを、(御いたはしく恐れ多く)御氣の毒様に御見上げ申した。(帝は)中庭の花壇の、(秋の千種の花が、丁度見頃の)面白い盛りであるのを、御覽遊ばす様な風で、(ただうつとりと、秋草の花を御眺めにはなつて)が、御心は、花の上には無い。やはり亡き人の事、若宮の上などの事のみ、御腦裡に往來してならせられるであらう)。しんみりとして物靜かに、情趣の深い、奥ゆかしい女官だけを、四五人伺候せしめて、物語を御させになつて成らせられるのであつた。(恐くは、故更衣の追想談などであらう。「只其の筋をぞ枕言にせさせ給ふ」のであるから)。

(帝が)此の頃、明けても暮れても御覽になるのは、長恨歌の御繪(屏風)で、(其は)宇多上皇が(當時有名の繪師に)御畫かせになつて、(男女の歌人)伊勢と貫之とに、(畫讀の歌を)御詠ませに

を問はせ給(へば)、あはれなりつる事、忍びやかに奏す。

御返り御覽すれば、

「いとも畏きはおき所も侍らず。かゝるおほせごとにつけても、かきくらすみだり心地になむ。荒き風防ぎし蔭の枯れしより

小萩がうへぞしづ心なき」

などやうに亂りがはしきを、心をさめざりけるほどと、御覽じゆるすべし。

いとかうしも見えじとおぼししづむれど、さらにえ忍びあへ

なつたもの、(即ち右の御屏風に書いた)和歌をも、漢詩をも(其他の歌詞も皆)、ただ愛人に永別した悲歎の事柄のみ、御口辯に遊ばしてならせられる。(命婦が歸つて参つたので、故更衣邸の様子を)大層細々と御下問になる。(命婦は、非常に深く)御氣の毒に感じた事を、密々と御奏聞(即ち復命)申上げる。(命婦が奉つた母夫人の)御返事を御覽になると、(御返書には)「まことに恐れ多い忝なさは、何う致して宜いやら(わかりませぬ)。かういふ(勿體無い)御沙汰を承るにつけても、搔き昏まされ、亂れ(増る)心持でございます」。

勅答の歌  
「荒き風ふせぎしかげの枯れしより小萩が上ぞしづ心なき」  
歌意「荒くあたる風を、庇ひ防いだ木が枯れて以來、(下蔭にある)小萩の事が心配で、心が落ちつきませぬ」(防ぎし蔭は、故更衣をさし、小萩は、若宮をさす)。

などといふ様に、無遠慮な、激越した感情を赤裸々に露して、(彼女が平生とは相違せる)嗜の足らぬ様な返事も、(帝は、可哀



させ給はず。御覽じ始めし年月の事さへかき集め、よろづにおぼし續けられて、時の間もおぼつかかりしを、かくても月日は經にけりと、あさましよう思し召さる。

帝「故大納言の遺言過たず、宮仕の本意深くものしたりしよろこびは、かひあるさまにこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや」とうち宣はせて、いとあはれに思しやる。「かくてもおのづから、若宮など生ひ出で給はば、

想に、老母は悲歎にくれて心を静める事の出来ぬ場合であるからと(思召して)、御見許しになる事であらう。

(帝は)誠に、これ程迄に(故更衣永別の悲歎にくづはれて居る様子を、女官達にも)見られまいと思召して、(御心を)御落ちつけにならうと遊ばすけれども、どうしても御休へになる事が出来ない。始めて(更衣を)御召になつた、(その過去の)年月の事迄も、(それからそれと)とり集め、いろ／＼御追懐、御聯想になるので、更衣在世の程は、(更衣が御傍に侍して居らぬ時は)片時も氣がかりであつたのに、(永別してから、既に二月餘も立つてゐる)、かうして(更衣が居なくなつても)「よくまあ、(自分は生きて)月日を経過する事が出来たものだなあ」と、呆れる程に思召される。「去る者は日々に疎し」といふ人情の輕薄さが、御親らにも當て筈な御心持が遊ばして、情無く思召されるのである)。

さるべきついでもありなむ。命長くとこそ思ひ念せめしなど宣はず。

かの贈物御覽せさす。亡き人の棲處尋ね出でたりけむ、しるしの釵ならましかばと思ほすも、いとかひなし。

帝「尋ね行く幻もがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」繪にかける楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆かざりありければ、いとにほひなし。太液の芙蓉、未央の柳も、

心に銘じて、(遺言通りに)遂行した(母への)返禮には、その甲斐のある様に、(即ち、遺志に添ふだけの幸福に)致して遣はさうと思ひ通して居たのに、詮無い事になつたよと仰せられて、(老母の事を)まことに惘然であると思召しやらせられる。それでも(こんなことにはなつたが)「自然若宮などが成長なされたならば、然るべき(好い)機會もあらうから、(老母は何でも)長命する事を念願して居てくれよ」などと仰せられるのである。

命婦は、(母夫人からの)贈物を御披露申上げる。(それを御覽になる帝は、あゝ若しもこれが)亡き更衣の(靈の在る所の)棲處を尋ね出した、(傳説の如く、道士が楊貴妃から貰つて、持つて歸つたといふ)證據の釵でもあつたならば、(どんなに嬉しからう)と思召すのも、まことに詮無い事である。「尋ね行くまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく」

御製の意「亡き人の棲處を」尋ねて行つてくれる幻術士でもあ

げにかよひたりしかたちを、か  
らめいたる粧ひは、うるはしう  
こそありけめ。なつかしうらう  
たげなりしを思し出づるに、花  
鳥の色にも音にもよそふべきか  
たぞなき。朝夕のことぐさだ、  
羽をならべ、枝をかさはさむと契  
命のほどぞ盡せずらめしき。

風の音、蟲の音につけても、も  
のみ悲しう思さるゝに、弘徽  
殿には、久しう上の御局にも參  
うのぼり給はず、月の面白きに、

れば、宜いになあ。人傳でも(よいからせめて)亡魂の在所は其  
所である、といふ事だけでも知らうものを」。

(帝は、明暮御覽になつて成らせられる御屏風の、楊貴妃の繪を  
思召し出されてであらう)、繪に書いてある楊貴妃の容貌は、(な  
る程、當人は絶世の美人でもあつたらうが)、いくら豪い上手な  
繪師だといつたところで、筆には際限があるから、實物程の美  
しさを、あらはす譯にはゆかない。太液池上の蓮花も、未央宮前  
の柳葉も、なる程(美しい花卉に似て居たかたちをくらべて見  
て)唐風な粧ひは、端麗ではあつたであらうが、故更衣の(和やか  
な)懐かしい、可愛らしい、(所謂匂ひある姿態)様子を御追想に  
なると、(麗人楊貴妃は、それでもまた芙蓉や柳に擬して、それら  
を見て慰める事が出来たか知れぬが、わが更衣は、特に卓絶優  
秀の佳人であつたから、とても)花の色にも、鳥の音にも、比較し  
て見る方法が無い。(本巻一三頁解釋参照)

(帝は、故更衣に對し)朝夕の口辭に、(生れ代つて來たら、比翼

夜更くる迄遊をぞし給ふなる。  
いとすさまじう、ものしときこ  
しめす。このごろの御氣色を見  
奉る上人・女房などは、かたはら  
痛しと聞きけり。

いとおし立ち、かどくしき  
所ものし給ふ御方にて、事にも  
あらず思し消ちて、もてなし給  
ふなるべし。月も入りぬ。

帝  
「雲の上も涙にくる、秋の月  
いかですむらむ淺茅生の宿」  
おぼしやりつゝ、燈火をかゝ  
げつくして、起きおはします。

の鳥のやうに)羽をならべよう、(連理の枝のやうに)枝を交さう  
(片時も離れずに一緒に居よう)と御約束になつたのに、(其の御  
希望に)御かなひなされなかつた壽命といふものが、際限も無く  
恨めしい(と思召されるのである)。

(極端に、感傷的に成らせられたところの帝は)風の音にも、蟲  
の音にも、もの悲しくのみ思召されるのに、弘徽殿女御は、久し  
く上局にもお上りにならず、(お閑暇でいらせられるから)月の  
(景色の)面白さに(興を催して)、深更まで管絃の合奏をしてい  
らつしやる。(御常住の清涼殿より、北に當る弘徽殿は、清涼殿か  
ら最も近き殿である)。(帝には、此の様に朕が悲歎に沈んで居  
る際に、餘り同情が無き過ぎると、御不快な御心持で)非常に厭  
はしく御氣障りに聞し召される。此の頃の(帝の御いたはしい)  
御様子を、御見上げ申す殿上人や女官達は、苦々しい事だと(思  
つて)聞いて居た。

(元來、弘徽殿女御は)物に仲しかゝつて行く様な、(即ち、壓倒

右近のつかさの宿直奏の聲聞ゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして、夜の御殿に入らせ給ひても、まどろませ給ふ事かたし。朝に起きさせ給ふても、明くるも知らずとおぼし出づるにも、なほ朝政は怠らせ給ひぬべかめり。物なども聞し召さず、朝餉の氣色ばかり觸れさせ給ひて、大床子の御膳などは、いと遙かに思し召したれば、陪膳にさぶらふかきりは、心苦しき御氣色を見奉り歎く。すべて

的(な)角立つた所のある氣質でいらつしやるから、(一女官たる桐壺更衣の死といふ事は)何も格別の事でも無いぢや無いかといふやうな風に、無視していらせられるのであらう。月も(全く西に)没した。(夕月夜のをかしき程からの結尾である)。「雲の上も涙にくる、秋の月いかですむらむ淺茅生の宿」御製の意「宮中で(見てさへ)も、涙に(影も薄れて、ぼんやりと)かきくらす、(此の)秋の月(がまあ)、どんな風にすんでゐるだらう。草深い故更衣の里邸には」(月とあるから、雲の上が殊更にきいて居る。澄むと住むとかけてある)。(淺茅生、本卷解釋八九頁参照)

(帝は、若宮の在します、老夫人の寂しい宿を)思召し遣りながら、(何時迄も)御寝なれず(燈心を掻き立て盡して成らせられる。右近衛府の(者どもの)宿直奏の聲が聞えるのは、(さてはもう既に)丑の刻になつたのであらう(丑の刻は、大抵今の夜半午前二時)。人目を憚り思召して(即ち、餘りに長く起きて居て

近う侍ふ限は、男・女といとわりなきわざかな」と、いひあはせつつ歎く。さるべき契りこそはおはしましけめ。そこの人の誹、恨をも憚らせ給はず、この御事に觸れたることをば、道理をも失はせ給ひ、今はた、かく世の中の事をも、思し捨てたる様になりゆくは、いとたいだいしきわざなりと、人の朝廷の例までひき出でつゝ、さゝめき歎きけり。

月日経て、若宮参り給ひぬ。いとどこの世のものならず、き

は、人も御心弱く見奉るであらう。且は、近侍の者にも氣の毒だなどと、御遠慮も遊ばして(御寢所に入御なつても、少しも、とろく)と御眠になる事も御出来遊ばさない。朝御目覺になつても、「明くるも知らず寝しものを」と、(更衣在世の時を)思召し出されて、(更衣の亡き後でも)やはり、朝政は御懈怠遊ばされさうである。

引歌。玉簾あくるも知らず寝しものを、夢にも見じと思ひかけきや(本卷解釋一一五頁参照)

(帝は、此の頃)食物も一向に召し上らず、朝餉、即ち軽い朝の御食事さへ、唯ほんの一寸形式だけ御手を付けさせられるばかりで、大床子、即ち正式の御餐などは、(ふり向いても御覽にならず)氣疎いものの様に思召して成らせられるから、御陪膳(御給仕)に奉仕する所の人々は、皆御氣の毒様な御様子を見上げ申して歎いて居る。(のみならず)すべて(帝の)御側近の人達は、男も女も(皆)「困つた事で御座いますなあ」と、互ひに言

よらにおよすけ給へれば、いとどゆゝしう思したり。明くる年の春、坊定まり給ふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじき事なれば、なか／＼危く思し憚りて、色にも出ださせ給はずなりぬるを、さばかり思したれど、限こそありけれど、世の人も聞え、女御も御心落ちぬ給ひぬ。

「かの御祖母北の方、慰むかたなく思し沈みて、おはすらむ所

ひ合つては敷くのである。

「(どうも是は全く)かうなる筈の、前世からの御約束事であらせられたのでございませう。多くの人の誹も怨も、一向御遠慮遊ばされず、(全く御人が異つた様に)更衣のうへに關係した事になると、理性をも御失ひになり、(法外な事迄遊ばし、更衣が歿後)今また、かう御政事向の事をも、御抛棄遊ばした様になつて行くのは、都合の悪い事でございませう」と、外國(唐)の玄宗皇帝)の故事迄引合に出して、ひそ／＼と語り合つて敷いた。

(更衣逝去後の)月日が立つて、(漸く)若宮は、御参内になつた。(帝は、久しぶりで御對面になると、御生れだちから、世にたぐひ無く清らに在した若宮は)ます／＼(御美しくなつて)、人間界のものではない様に、すつきりと綺麗に、御成人になつたから、なほ／＼(恐ろしい様で)氣味が悪い程に思召した。

翌年の春、(いよく)春宮が御決定になるに際しても、帝の御心中には、第一皇子を(飛び越させたく、)若宮を春宮に御立て

にだに尋ね行かむと、願ひ給ひ(ける)驗にや、つひにうせ給ひぬれば、またこれを悲しび思す事限なし。御子六つになり給ふ年なれば、この度は思し知りて、戀ひ泣き給ふ。年頃馴れ睦び聞え給へるを、見奉り置く悲しびをなむ、かへすがへす宜ひける。

今は内裏にのみ侍ひ給ふ。七つになり給へば、(御)書始などせさせ給ひて、世に知らず聰う賢くおはすれば、あまり怖ろしきまで御覽す。

になりたいた)思召したけれども、(若宮の)御後見すべき(駭りした)人も無く、又世間でも承知しさうも無い事であるから、(無理な事をして、若宮の御爲に)却つて禍を招くことになつてはならぬと、御遠慮遊ばされて、氣ぶりに御出しにならずに御しまひになつたのを、「あれ程(若宮を御鐘愛遊ばし)思召したけれども、(公儀は)制限があるものだな」と、世人も申上げ、(殊に焦慮して居られた)弘徽殿女御も御安堵なされた。

彼の(若宮の)御祖母夫人は、心を慰むるすべも無く、(すつかり憂鬱になつて)沈み込んで、(どうぞ早く)女更衣のおいでになつて、黄泉へでも尋ねて行きたいと念じて居られた効験があつたと見えて、(願ひが叶つたかして)とう／＼歿つてしまはれたので、帝は又、これを御悲歎遊ばされる事が際限も無い(甚く御悼み遊ばされるのである)。皇子(若宮)は、御六つにおなりなされた事であるから、(御生母更衣の逝去のときは、御三つであつたから、何事のあらんとも、御分りにならなかつたが)今度は

「いまは誰もく、え惜み給はじ。母君なくてだにらうたうし給へ」とて、弘徽殿などにも渡らせ給ふ御供には、やがて御簾の内に入れ奉り給ふ。いみじき武士あだげなき讐敵なりとも、見てはうち笑ま

れぬべきさまのし給へれば、えさはなち給はず。女御子達おんなみこたち二所ところこの御腹におはしませど、准なづひ給ふべきだにぞなかりける。

御方々もえ隠れ(あへ)給はず、今よりなまめかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしううち

能くお辨わかへになつて、(祖母君を)お慕ひになり、お涕泣なみだ遊ばされる。(祖母夫人は又、此の世の希望絶えて、更衣の逝かれた黄泉へ逝きたい)と念じては居られたものの、今はとなつては、若宮にお別れが辛い。年来親しくお馴染申上げて居たのに、(今をお見納めとして、此の世に)お見置き申上げる(永別する)事を繰り返し、おつしやつた(斯くして、祖母夫人は終に逝去せられた)。

若宮は(御生母の里邸に残つて居た祖母夫人も歿なくなられたから)今はもう、宮中にばかり御いでになる。七つにおなりになつたので、御書始おんまはじめ(即ち、御學問始の式)を行はせられて、(それから、色々の御稽古に御従事になる。所が)世に例の無い程、聰敏とんみんでいらつしやるから、(帝は、御嬉しいけれど)餘りに(御幼才智らしく無い程ゆるる)、怖ろしい様に迄御覽になつた。

(そして帝は、女御更衣方に)今はもう、誰もく(彼の兒は)憎めないでせう。母君が亡くなつた後あとでも、(せめて彼の兒を)

解けぬあそびぐさに、誰もく思ひ聞え給へり。わざとの御學問はさるものにて、はかなき琴笛の音にも雲井を響かし、すべと言ひ續けば、ことごとしううたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

その頃、高麗人の參れるが中に、かしこき相人ありけるを聞き召して、宮の中に召さむ事は、宇多の帝の御誠いさしめあれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館につかはしたり。御後見だちてつ

愛撫してやつて下さいと(仰せられて)、弘徽殿などへ渡御なる時にも御連れになつて、其の儘(御一緒に)御簾の内へ御入れ遊ばされる。

どんなに豪えい(獷猛な)武士でも、(深刻な)讐敵でも、(若宮を)見上げてはほ、笑ますには居られない様な、(可愛らしい)様子をして御いでになるので、(流石に弘徽殿も)えう打捨うちやては置かれぬ(即ち、突き退けられぬ)。姫宮様がたを御二方迄、(此の弘徽殿は)御持ち申しておいでになるけれども、(とても)この御様子にさし亞あぐべくもなかつた(即ち、この若宮の後にいてゆく位の方さへも無いのであつた)。(かくの如き若宮の御様子故、すべての)女御更衣達も、えう隠れたり何かすることは、お出来にならない。

今から(若宮は御幼少時代から)、いひやうも無い程品よく、美しく、こちらが恥かしく思はれる様でいらつしやるから、子どもだからと馬鹿にはされない。面白い遊び相手に、どなたもく

かうまつる、右大辨の子の様に

思はせて、ゐて奉る。相人驚き  
て、あまたたびかたぶきあやし  
ぶ。「國の親となりて、帝王の上  
なき位にのぼるべき相おはしま  
す人の、そなたにて見れば、亂れ  
うれふる事やあらむ。朝廷のか  
ためとなりて、天の下を輔くる  
方にて見れば、またその相違ふ  
べし」といふ。辨もいとざえか  
しこき博士にて、いひ交したる  
事どもなむ、いと興ありける。

文など作りかはして、けふあ

お思ひ申上げて居られる。

表立つた學問は(即ち主要學科で、當時の所謂三史・五經の  
みち／＼しき學問である)いふ迄もない事(無論)で、(餘技の)  
琴笛の彈奏等にも、宮廷中になり響き、大評判になる(大宮人を  
驚歎せしめる)程、すべて(その御偉さを、あゝのかうのと)言ひ  
續ければ、(餘り)仰山で、變に嘘言を言つてゐるやうにもなりさう  
な、若宮の(氣味が悪いほどの)御様子であつた。

その頃、高麗人が來朝した。その中に、優れた(上手な)豪い觀  
相家が居るといふ事を、(帝が)聞し召して、(外國人を濫りに)宮  
中に御召寄せになることは、宇多天皇の御遺誡もあるから、非常  
に秘密にして、此の若宮を、(相人の滞在して居る)鴻臚館へ御遣  
はしになつた。

(皇子の御身分は隠して)御後見格といふ様な風で、御奉仕申上  
げて居る右大辨某が實子の様に見せかけて、お連れ申して行つ  
た。相人は、(若宮の御人相を拜見して)驚いて、度々首を傾け

す歸りさりなむとするに、かく  
ありがたき人に對面したるよろ  
こび、かへりては悲しかるべき  
心ばへを、おもしろくつくりた  
るに、御子もいとあはれなる句  
をつくり給へるを、限なうめで  
奉りて、いみじき贈物どもをさ  
さげ奉る。

朝廷よりも、多くの物たまは  
す。自ら事ひろごりて、洩らさ  
せ給はねど、春宮の祖父大臣な  
ど、いかなる事にかと、思し疑ひ  
てなむありける。

て不思議がる。「國民の父母となつて、一天萬乘の御位に御即  
きになるべき(人相)であるが、(併し、又)帝王としての方面から  
見ると、(世の中が)動亂し、心配な事があるかも知れぬ。(さう  
かと申しても、また)朝廷の柱石となつて、天下の政治を輔弼け  
る方面から見れば、その相には當て筈らない。(反對な所があ  
る……どうも判然分らぬ)」といふのである。右大辨といふ人  
も、大層學才に秀でた博士であつて、(此の學者の高麗人と)交換  
した應答は、甚だ興味あるものであつた。

交(韻文、即ち詩である)や何かを互ひに作り合つて(居る中  
に、高麗人は)、今日明日と歸國の日が迫つた際、斯ういふ稀有な  
(珍らしく貴い)御方に御目にかゝつた喜び、(其が非常である爲  
に)かへつて(御別が)悲しからうといふ意味を、面白く(巧みに)  
作つたので、皇子も(之に對して)あはれな(身に沁む様な)對句  
をお作りになつたのを、(高麗人は)際限も無く(此の上なく)御  
歡賞(感心)申上げて、非常に立派な御贈物をさし上げる。

帝かしこき御心に、倭相をおほせて、思し寄りけるすぢなれば、今までこの君を、親王にもなさせ給はざりけるを、相人はまことに賢かりけりと思し合はせて、無品親王の外戚の寄せなきにてはただよはさじ、わが世もいとさだめなきを、ただ人に朝廷の御後見するなむ、ゆく先もたのもしげなる事と思しただめて、いよく道々のざえを習はさせ給ふ。際きはことにかしこくて、ただ人にはいとあたらし

朝廷てうていからも、(高麗人に)澤山の御下賜品がある。自然此の事件が(世間に)擴がつて、(帝は)秘密にしてならせられたけれども、春宮の祖父右大臣(弘徽殿の實父)などは、どういふ仔細かと、疑惑の念を抱いておいでになつた。帝は、敏い大御心でいらせられるから、豫かねて日本の觀相家の判斷に照らして(御研究になつて居て)、思召し合はせた所の條件であるから、今迄、此の方(御鐘愛の皇子)を親王にも遊ばさないものであつたが、(内外觀相家の意見が合致したから)なる程相人は豪い(上手な)ものであつたなと思召し合はせられて、(若宮を)無品親王として、(確乎しつぱした)外戚の後援者になる者も無くて、(中途半端に)ぶら／＼させては置くまい。「(帝の)御在世(或は聖壽)も不定であるのに、(なまなかの皇族でなく、寧ろ)臣籍に下つて、朝廷の輔弼、帝の御後見(即ち攝政格)をする方が、將來(當人の爲に)安心であらう」と御決心遊ばされて、いよく専門々々の學問技術を御習はせなされた。(若宮は)水際立つてお賢くて、(すん／＼各學科に

けれど、親王となり給ひなば、世の疑ひ負ひ給ひぬべくものし給へば、宿曜すくようのかしこき道の人に考へさせ給ふにも、同じさまに申せば、源氏になし奉るべく思しおきてたり。

御進みなされるので、臣下とするのは(實に)惜しいけれども、親王とおなり遊ばしたならば、(やはりある時機を見て、帝は、今の春宮と御取り換へになり、若宮を春宮になされたい思召ではあるまいかなど)世上の疑惑をお受けなされさうであるから、(そしてなほ)宿曜の道の名人に判斷を御させになつて見ても、(これ亦、前の觀相家と)同様に申上げるので、(いよく)若宮をば臣籍に下して、源姓を賜はる事に御決意遊ばされた。

【解釋】 命婦は(參りて)。(河内)(徳河内)

(湖)には參りてが無い。



清涼殿 壺御殿

(源氏物語考證圖解)

壺前栽。「壺」は大抵中庭と解して居る。恐くは四方建て込んだつばまつてる、狭き中庭を指したのから起つた名稱であらう。局の「つば」も、つば裝束の「つば」も皆同じである。「前栽」は植込、又は花壇等をさす。庭に植ゑた草木である。此の壺前栽は、清涼殿と後涼殿との間、東面の廊に狭まつた中庭で、朝餉の御間と臺盤所(女官の詰所)との前に在る。帝は、入方の月を眺めさせられるのであるから、朝餉の御間(こゝが、帝の御安座の折に成らせられる所である)で、西に向つて在りましたであらう。

忍びやかに。「ひそやかに」「泣々と」「しんみりと」等の意。

心にくき。「心に悔りにくき」であるが、奥ゆかしく、情趣深く、對手者が懐かしくも恥かしくも思ふ程深みのある状をいふ。即ち、帝の御話相手になり得る様の意。

長恨歌。支那唐代の詩聖白樂天が古詩の中で、琵琶行と共に、二大名吟と賞讃されて居る所の詩である。そして、琵琶行は墨畫の秀、長恨歌は彩繪の優なるものの如し等の評がある。唐の憲宗の第一年（わが平城天皇の御即位の年）冬十二月、太原の白居易は樂天、校書郎より翰林院に尉たり。瑯琊の王質夫と、是の邑に家す。一日、質夫と相携へて仙遊寺に遊び、さまざま談論の結果、酒闌に興湧き、質夫の意に促されて樂天が作つたのを、前の秀才陳鳴が、是に傳を冠したといふ事である。この詩を載せた白氏文集は、わが國に將來され、忽ち上流社會に流布したのである（本卷末尾附録參照）。

亭子院。宇多上皇の御住ひになつた御所である。（河）平安京七條以南油小路以東一町。

長恨歌の御繪。宇多上皇が、當時の繪師に御かゝせになつて、その頃有名な男女の歌人、伊勢と紀實之とに、その畫讀を御詠ませになつて、書かせられた所の御屏風である。それは、長恨歌の中の情趣ある箇所々々を撰んであつたものと見える。伊勢集に次の歌がある。

「長恨歌の御屏風亭子院に貼らせ給ひて、そのところどころを詠ませ給ひける御手にて、

もみち葉に色見えわかで散るものは物思ふ秋の涙なりけり

かくばかり落つる涙のつゝまれて雲の便りを告げましものを

歸り來て君をみせまし蓮葉の涙の玉をわきまてそふる

玉簾あくるも知らでねしものを夢にも見じと思ひけるかな

紅に掃はぬ庭はなりにけり悲しきことの葉のみつもりて

これは後に代りて

しるべする雲の船だになかりせば世をうみ中に誰か訪はまし

月も日もなぬかのよるの契をば聞きしほどにもまだぞ忘れぬ

消えしにもまたもけぬべし春霞かすめる方を都と思へば

木にも生ひす羽もならべで何しかも波路隔て、君を聞くらむ

るる雲のひとわきもせぬものならばみをと涙は流れざらまし

宇多天皇の七條の後温子は、三十六歳にて御かくれになり、玄宗の寵姫楊貴妃は、三十八歳で殺された。帝は、深く御愛惜になつて、此の長恨歌の御屏風をも製せられたものであらう。伊勢は、同後の女官である。

亭子院のかゝせ給ひて。一寸聞くと、院が御親ら御かきになつた様にも聞えるが、これは「亭子院が（繪師に）御

かゝせになつた」の意である。

その筋。最愛の妻に後れた意味。

まくらごと。枕言。つまり「くちぐせ」（口癖）である。併し、此の解釋はいろいろある。寝る時必ず先づ頭を枕

に着ける意味から、「常用語」「常用の文句」と解す。又、人間の體の一等上部の頭を置く所の物だから、最初に置く

語と解し、據、古典とも解するが、「枕草子解説」に考證詳し。先づは「常用語」「くちぐせ」と解して宜からう。

清少納言の「枕草子」といふ名稱は、日常坐右に置く帳、今の「ノートブック」などの意味だといふのである。即ち、



見聞した事、考へた事等を一寸々々と書き止めて置く「帳」の意である。

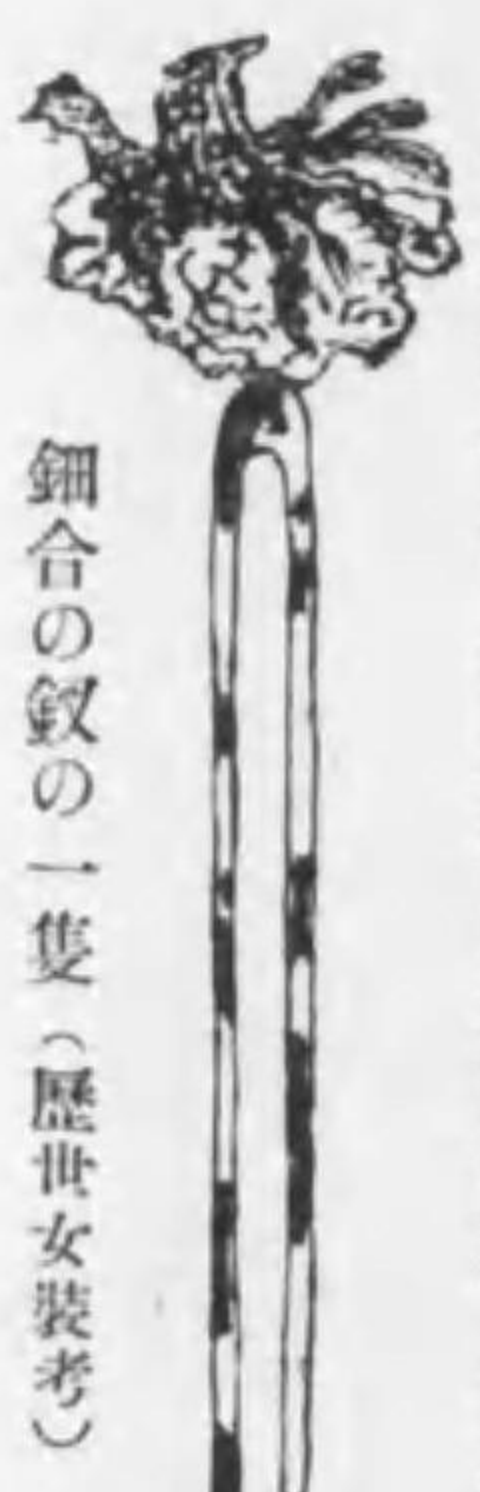
忍びやかに奏す。此の「忍びやか」は「うち／＼」の意で、つまり表立たぬ内々の御使の復命であるから、「内奏する」の意で然るべしと思ふが、先づ、口譯には「密やかに」といふ意味に解して置く。

ありさままとはせ給へば。〔湖〕には給ふとあるが、〔徳河内〕及〔異本〕にもへばとある。直前に「せさせ給ふ」とあり。又すぐこのあとに「奏す」とある所から、「とはせ給ふ」よりも「とはせ給へば」とある方然るべし。

打ち宣はせて。かう云ふ所の「うち」又は「かきくれ」などの「かき」は、皆接頭語で、他の意味は無いが、そへてある際は、大抵「宣ふ」「くれ」などの語に、力が少し加はるのである。そして、詞の續きの調子を整へる等の事がある。

命長くとこそ思ひ念せめ。此の「こそ」には、力が入つて居る。母夫人が、長命を歎いて居る雑言に對せられる、御慰撫の思召の籠つた勅語であるから、御詞に、強き御力入が見えるのである。

しるしのかんざし。これは、長恨歌の臨邛の道士が、幽冥界の楊貴妃に遇つて、貴妃から、道士に證據の品として渡した、その釵である。詩句に「唯將舊物表深情、鈿合金釵寄將去」と云ふを採り、御製の「尋ね行く幻もがな」は、「臨邛道士鴻都客、能以精誠致魂魄」とまた「遂教方士殷勤覓」とある詩句から引用したのである。（本巻末尾附録長恨歌参照）



鈿合の釵の一隻（歴世女装考）

「なき人のすみか尋ね出たりけむしるしの釵」は、「貴妃の昔語のやうに、亡き人の棲處を尋ね當てた徴に持ち歸つた、形見の釵であつたなら」の意である。

にほひ。は「香薫」「色彩」「光輝」等の最も美しく、はつと透りの照り輝く様の意味が含まれて居る。（本巻解

釋一四頁参照）

太液の芙蓉、未央の柳。この文も、玄宗が楊貴妃死後叛亂が治まつて、蜀から還幸されて、舊都の宮廷に入られての有様を、長恨歌に作つて、「太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉（央は吳音）」といふ句がある。太液は、玄宗が長安の都の禁苑の池の名で、その太液池に咲ける蓮の花を、楊貴妃の面に譬へ、同じ禁中の宮殿、未央宮の前の柳の葉を、その美しい眉に譬へたので、玄宗帝は、昔共に見し太液池の蓮花や、未央宮前の柳の葉を見るにつけて云々の意である。芙蓉とは蓮の花の事。又、「柳は眉の如く」とあるのは、一體支那で柳と稱する垂柳の葉は、極めて細く長いから、葉さきが格好よく、且まろくなつて居るので、美人の眉にたとへたのが、一層適切に感ずる譯である。尙又支那では、婦人の眉は蛾眉だの、新月などとも言つて、細く圓く、兩極が極く細いのを歓迎したのである。

蓮は睡蓮科、蓮屬の多年生草本。地下に太き節ある根莖を有し、これより葉を生ず。柳は楊柳科、楊柳屬の落葉喬木である。

花鳥の色にも音にも。引歌。後撰四・夏・藤原雅正「花鳥の色をも音をも徒らに物うかる身は過ぐばかりなり」

羽をならべ、枝をかかさむと。これも長恨歌の句で、「在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝」といふのがある。「比翼の鳥」は、鳩ほどの鳥だといひ、又、鳥に似て居るともいふ。青赤色であつて、何もかも半分づつ、即ち、一目一翼であり、くつ附いてでなければ飛ばないといふ。

連理の枝は、土から別々に生えて成長し、梢と梢とが抱き合つて、枝と枝とが連なつて、一つの木理に連なるものであるといふ。つまり、これは密接した木と木との枝が、自然的に接木の状をなして、一つになつた迄であらう。

比翼の鳥は偶には生れる。それは所謂畸形兒と同様なもので、今の理學方面から見れば、一向不可思議なもので

はないといふのである。

連理の枝は、仁徳天皇の朝、「荒陵」といふ所に歴木の連理木があり、献上したとか云ふ記事がある。これもをりをり、今でもある。



比翼鳥 (山海經圖說)



連理木 (石索)

「すさまじうものし。」「すさまじ」は「言」(一)「不興なり」「面白からず」「無興」「索莫」。轉じて(二)「物凄し」「(三)又轉じて「恐るべく甚し」「凄まじき力量」「可恐」。「殺風景」の意味もある。枕草子の、「すさまじき物」といふ所に、種々例證あり。ものし。形容詞。「言」「物々しくて厭はし」「目障りなり」「氣障りなり」。「かたはらいたし」。傍に居て笑止に思ふ意。即ち「はら／＼する」。故にこの意味を含んで「氣の毒」と解す。即ち、氣障りである。

おしたちかどくし。おしたちは「無理に物を押し切つてやる」「のしか／＼つて行く」「壓倒的」「強情張」の状。かどくしは「角立ちたる」ととげ／＼し「角目立つ」。鋒鏑を現はしたる状。

日本紀に最押立才とある。「才氣煥發」ともなる。「いかつい」の意にもなる。融和しにくい様子をもいふ。燈火をかかげ盡して起き在します。當時は、器に菜種油をた／＼へ、それに燈心(蘭のしん)を入れて燃やすのであるから、燃えるに従つて、かき立て／＼せねばならぬのである。併し、これも長恨歌の、玄宗が故貴妃思慕の切なる情を寫して、「孤燈挑盡未成眠」といふ句を取つたのである。

右近のつかさの宿直奏の聲聞ゆるは丑になりぬるなるべし。近衛府。左右あり。兵仗を帶して禁中を警護し、朝會に御仗を率ゐて威儀を備へ、行幸に警衛をなす。大將各一人、(從三位)かみと調す。中將各一人、後四人となる

(從四位下)、少將各一人、後四人となる(正五位下)、共にすけと調す。下に將監・將曹・府生・番長及び舍人左右各三百人あり。

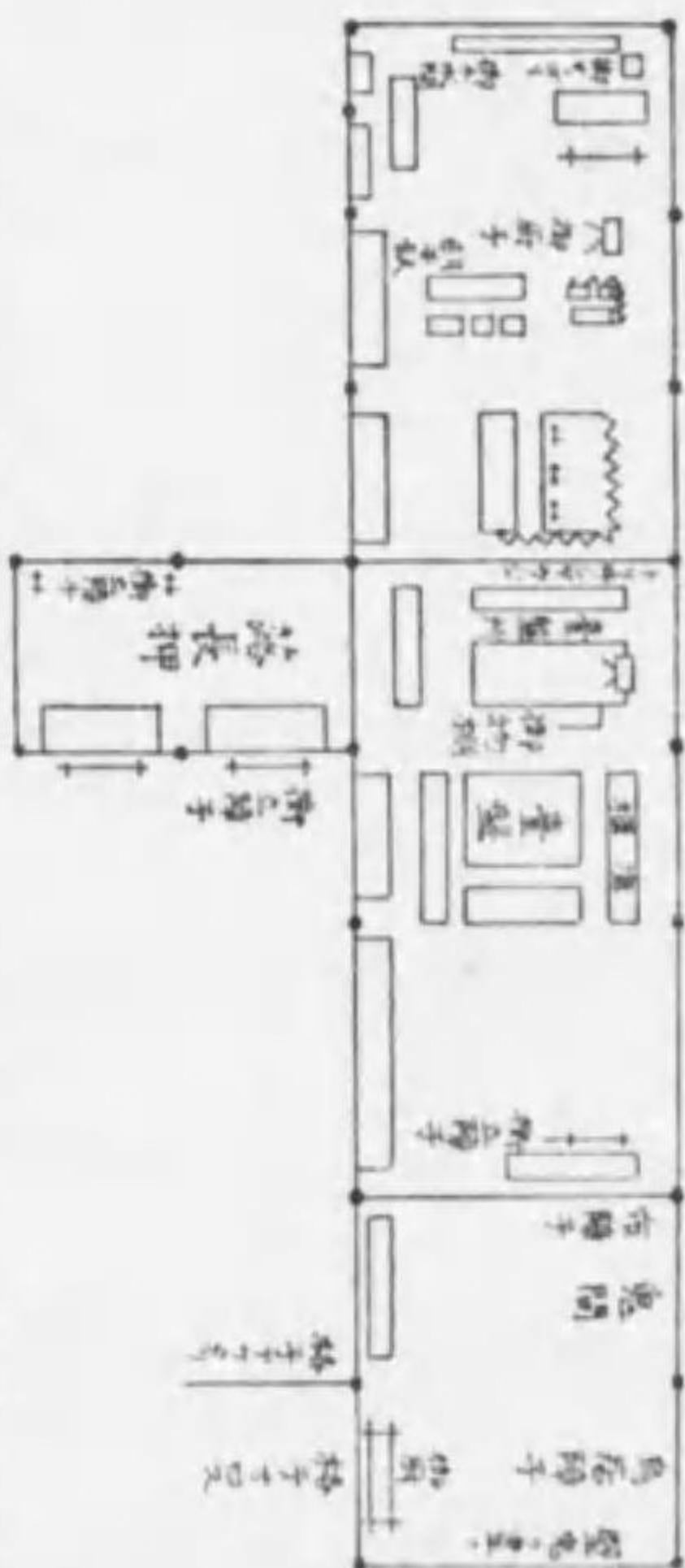
宿直奏。亥の一刻(今の大凡午後十時)以後は左近衛府、丑の一刻(今の約午前二時)からは、右近衛府の官人が交替で夜行して、禁中を警護した。宮中の夜行は、左右近衛が受持であるが、その間、左右兵衛は中重の夜行、左右衛門は省の夜行を勤めるので、これも亥から子までが左、丑から寅までは右が奉仕するのである。宿直奏は名對面・名調・間藉などともいひ、その宿直の各自が名告るをいふ。丑三つといふのは、今の大抵夜半十二時から午前二時迄である。こゝは「右近衛の宿直奏の聲が聞えるのは、既う丑の刻になつたのであらう」の意。

入らせ給ふ。入御なるのである。入御と申上げる慣例である。明くるも知らてと思しいづるにも、猶朝政は惹らせ給ひぬべかめり。これは前章の、長恨歌の御繪に讚をした伊勢の歌、この歌は、續後拾遺一七、雜下に載せてある。

「玉簾明くるも知らて寝しものを夢にも見じと思ひかけきや」の歌を引いたのであるが、もとはやはり長恨歌の、玄宗が貴妃殊寵の狀を歌つて、「春宵苦短日高起、從此君王不早朝」といふ句と、更に、貴妃を失つた玄宗は、安眠する夜は殆ど無いので、その展轉の狀を寫した、「魂魄不三會來入夢」との兩様を籠めて詠んだ歌である。

こゝは、あの頃は「玉すだれ明くるも知らで」と、伊勢の歌そのまゝであつたのを御思ひ出しになるにつけて、その人の亡い今でも、やつぱり朝政には手もつかぬ御有様であるの意。もの。「召しあがりもの」、即ち食物の事。

朝餉のけしきばかり。朝餉は清涼殿朝餉の御間とて、御寢所の傍にある御間で、女房が御陪膳申上ぐるのであ



(抄秘臈禁) 圖間の餉朝

る。表向ならぬ簡単な御食事で、いはば、下々のお茶漬と云つた様なものである。朝餉の間での簡略な御朝食。「餉」といふ字はもと、農家などから、田圃に働く人に食物をおくるといふ字であるが、轉じて乾飯となり、當時の朝食は、もと干飯を粥に煮たものを食したからかく言ふ。

當時は、米は蒸すか粥にするかであつた。そして、梗米の蒸したものはぼろ／＼してゐるから、匙ですくつて食した。乾飯は、蒸したのを干して貯へて置くので、今の道明寺の如きものである。朝は大抵、これを粥のやうに焚いて食した。それが、今の本膳等の時に用ふる、お湯なるものの最初であらう。

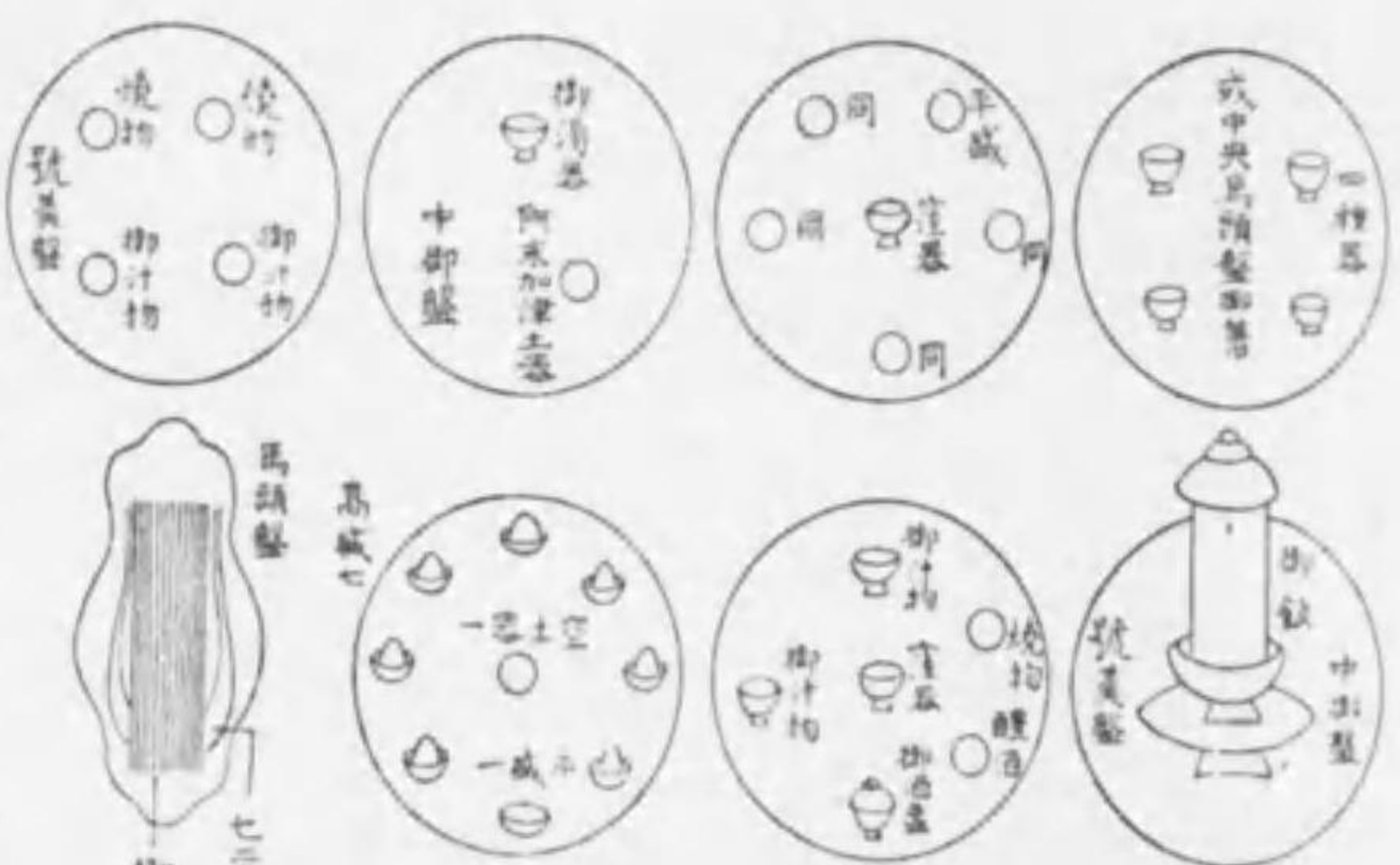
**大床子。** 即ちテーブルであるが、大きいのは長さ四尺五寸、幅二尺四寸、小なるは長さ二尺、高さは何れも一尺三寸である。

この大床子を作り始められた時には、唐制に則つて、椅子に着いて食するに都合の好い様に出來て居たであらうが、後には、多くの場合躡して著いたのであるから、高さは自然低くなつたものであらう。現今の、供御をつけたて、置くところの、「おぼんだて」といふものが、その型であると申す事である。

「大床子のおもの」とは、表向の御膳の事である。



(記類事厨) 子床大



(記類事厨) 膳御の子床大

**陪膳** 給仕である。今陪膳又配膳と書くのは、陪をばいと發音して別字を誤用したものだといふ。現今は「おはいぜん」と稱し、高貴の御方の御餐の節は、御陪膳と稱する人が、御膳部の直ぐ御前に接近し伺候して居て、御向う箸を使つて、御肴をむしりなど、いろ／＼召上り物の御世話を上上げ、御手長と稱する人が、御陪膳人の直ぐ次席に伺候して居て、その御陪膳人の出だされる御食器を受けて、御飯を盛るとか御茶をつぐとかの御加勢をし、且、役送人にすべての取次をする。役送は、御手長の命ぜられる儘に、御盤だての間迄の往復を承つて奉仕し、御膳所の者に命を傳へるのである。

至尊の御膳には、女官であると、御陪膳が典侍、御手長は掌侍、御役送は命婦(以上高等官)といふ事になり、御盤立の間には、御膳掛の女嬪(判任官)が詰めて居る。こゝは、御前からは見えない。そこに臺盤があつて、その上へ、内膳職から女嬪が受取りて持参した御食物が並べてある。そして、そこで冬は御温め申上げ、夏は御冷し申上ぐる等の出来る様に準備がしてある。こゝで、命婦が「おしつけ(御毒味)の役を奉仕するのである。

はた。「亦」と同じだけれど、「意や、急なるが如し」と解して居る。如何にもそんなところがある。「亦」はこれもまた、彼もまたと、双べて物をさすが如く、「はた」は、同じく「これも彼も」と云ふにしても、表と裏とを指す様な形

に思はれる。「その上にまた」「それとかはりてまた」の意。

たいだいし。「たゆ／＼」の轉とす。又「怠々し」「過怠」の意とす。「弱つた事」「臆劫な」「氣が重い」「精の無い事」等と意釋す。轉じて「困つた事」とも釋して居る。

いとど。「言」「最々」の約「彌甚しく」「ますます」。若宮御誕生のところに、「世に無く清らなる玉の男御子」とあつた。それが、ますます清らにおなりになつた意味である。

この世のものならず。「この世」は人間界をさす。又過去・現在・未來の三世をいふ時は、現在の事になる。

人間界の方でなく、美しい頂上をいふ。暫く御覽遊ばさなかつた間に、なほ／＼この世のものでない様になられた。「まるで人間の胤ではない」。即ち「人間世界のものでない」の意。

清ら。すつきりとした綺麗さをいふ。

いとどゆゝし。「いと」ともあるが、こゝは、重つても「いとど」とある方が善い。

ゆゝし。「怠々し」「一通りならず」「すばらし」「容易ならず」「恐ろしい程」「ぞつとする程」といふ様な意で、善い意味の「怖ろしい」とか、「氣味が悪い」とかいふ様な心持。

なか／＼。「半途」「なかば」「なまじひ」「却つて」「結局」「かなり」「とても／＼」とも解して居るが、こゝは、先づ「却つて」でよからう。

限こそありけれ。物には限度がありて、長幼の序を違へ、且、御生母の關係から言つても、親疎高下の別を無視する事は御出来になれないと云ふ意。又「帝の御寵愛にも程があつた」とも解して居る。

御子六つに成り給ふ年。春宮の御治定になつたのが、若宮御四歳の年である。

願ひ給ひけるしるしにや。「平瀬」「徳河内」ともにかくある。「湖」「青表紙」等には「願ひ給ひし」とあり、「萬水」には「願ひ給ふ」とあるが、けるの方然るべし。

七つになり給へば、「御」書始などせさせ給ひて。「徳河内」には御があり。「湖」には無い。こゝは無くてもよからうが、「御袴着」「御元服」等皆御があるから、これに従ふ。當時高貴の方は、大抵七歳にして、御學問始の式がある。即ち、今の入學式である。これからそろ／＼、いろ／＼の御稽古が始まる。

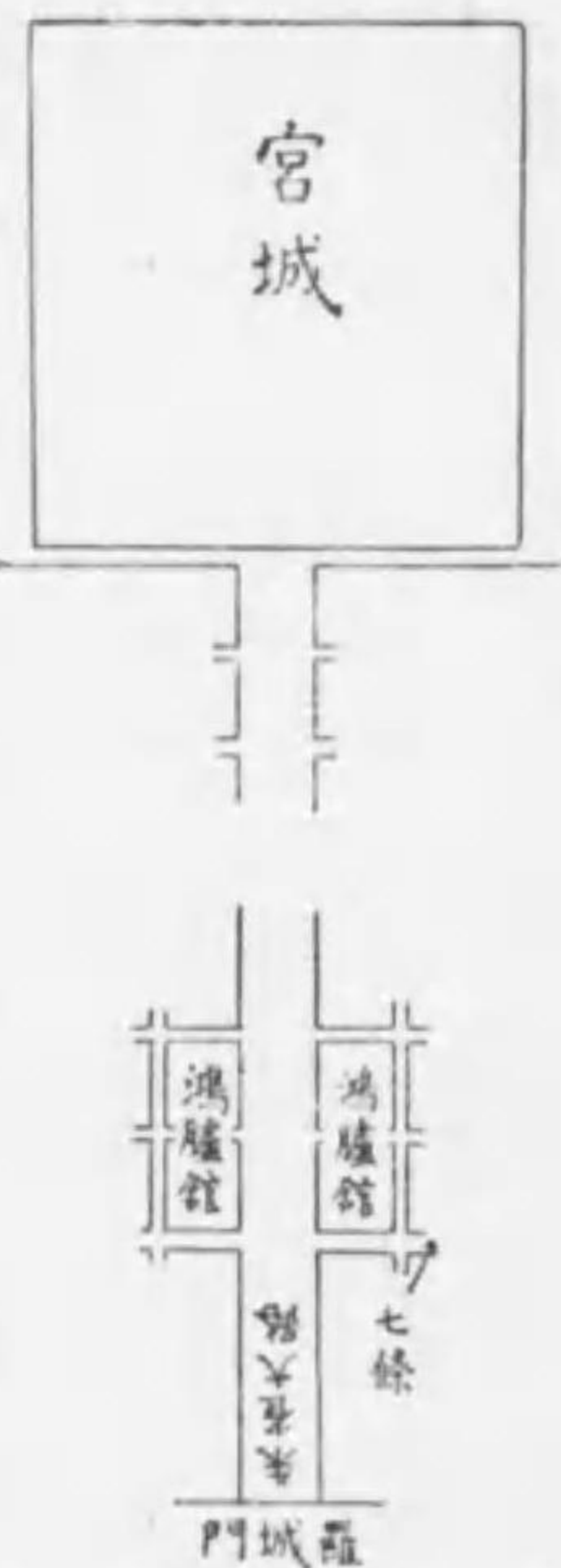
天皇の御書始には、博士が侍讀を、皇太子の御書始には、學士が侍讀を勤め、又、侍讀の授け奉つたところを復習する、尙復といふ役も副ふのである。すべて皇子方の御讀書始めには、必ず御註孝經(孝經に玄宗皇帝の註を書いたもの)又は貞觀政要(唐の政治を書いたものでなか／＼むづかしい)などを御讀ませになつた。「御註孝經序」といふ五字を御讀み初めになるのが、普通のやうである。

高麗人。三韓の「高麗」をこま、「新羅」をしらぎ、「百濟」をくだらと言つたのであるが、今日朝鮮といふが如く、三韓をくるめて大抵「高麗」と稱して居り、渤海迄をもさう言つたらしい。

宇多の帝の御誠。宇多天皇が、皇太子(醍醐天皇)に御讓位あらせられた頃御遺しになつた、有名な「寛平御遺誠」には、「外蕃之人必可召見者、在簾中見之。不可直對耳。李環朕已失之。慎之」と記させられてあるから、それ等から適用したものであらう。

當時、既に公けの使節の往來等は絶えて居たけれども、人民同士の貿易は、九州方面に於いて許されて居たから、偶ま斯ういふ人が、上洛した場合もあつたであらう。

鴻臚館。「こうろくわん」。遠藩より來朝の客を宿泊せしむる館舍。唐土に外藩の人を置く所を鴻寺等といふに



よつて、かく號けられたのだといふ。これは、太宰府所屬として博多、攝津にては難波、京都にては朱雀大路を挟んで七條に、東西二ヶ所に設置された（即ち東鴻臚館、西鴻臚館）。皆玄蕃寮に屬す。鴻臚とは集會する所の意で、漢書に「鴻臚也、臚傳之也、傳聲贊通也云々」とあり、又或書には「掌四方

蕃夷曰大鴻臚」とある。鴻臚館の名は、即ちこれから出たのである。高麗人は外人なるが故に、此處に宿つたのである。（孟）館は玄蕃寮に在り、この寮の頭を鴻臚卿と號す。（河）玄蕃は、玄は遠きなり、蕃は藩なり、接する所なり。右大辨。これは太政官の中にあつて、優れた秀才が登用される官である。和漢の學に通じ、又詩文なども善く出来る人、然ういふ學者達が任ぜられた官で、現在の官に當てて見れば、主として文書を掌る秘書官長の様なものである。この時分には、辨官に左右があり、その中に又大、中、少の別がある。即ち左大辨・左中辨・左少辨・右大辨・右中辨・右少辨と言ふやうなものである。左大辨は中務・式部・治部・民部・の四省を、右大辨は兵部・刑部・大藏・宮内の四省を管した。勿論、當時は現今のやうに、宮中府中の別が劃然として居なかつたから、現今の官に、判然とは當て籍められない次第である。

相人。「人相を觀る人」の意。この觀相學と言ふ事は支那に始まり、朝鮮に傳つたものである。

倭相。「日本の相人」の意。日本の觀相學といふものは、何時から始まつたか明らかには分らぬ。但倭相なるものは、唐相の學理的なるに對して、直覺的な、超論理的な人相判斷であつたらしい。

無品親王。當時親王には一品・二品・三品・四品迄あり。別に功勞が無くて、敘位の御沙汰も無い御方が即ち無品親王で、臣下の無位といふ所を、無品と稱したのである。この制度は、明治の初年迄御繼續になつて居た。

無品と讀むべきを、「むぼう」と音便に讀ませるのは、當時は、變な事に縁起を云々する習慣で、「むほん」は、讀み聲が「謀叛」と同じであるから、避けたのだと云ふ事である。

外戚。讀みは「げさく」と、吳音に讀むことになつて居る。ただよはず。「ただよふ」は（言）自動、（規一）浮きて一處に止まらず。動きて定まらず。「ただよはず」は「他動、

（規一）「漂ふやうごとくになす」であるから「ただよはず」は「つまらなくして置くまい」の意。

わが世。「わが在位の間の意、又は御壽命の方にもとつて居る。こゝは孰れにも通ふ様である。帝は、或ひは御壽命も御在世も、兩様を御考なされたのかも知れぬ。

ざえ。「ざ」は、濁るよみくせになつてゐる。この書中多くある詞、「才」であるが、多くの場合、學問技藝の方の才にいふ。こゝも學才の意である。

宿曜。「しゆくえう」と讀むべきであるが、當時の習慣で、「すくえう」と柔かに讀んで居る。星學であるが、現今の天文學等とは違つて、二十八宿の星の位置に依つて、人間の吉凶禍福を占ふのであつて、今の九星に、一寸類似のものである。これは二十八宿、十二宮、七曜、九曜の併稱。二十八宿十二宮を宮と言ひ、七曜九曜を曜と言ふ。支那では二十八宿と數へ、印度では二十八宿中の牛宿は、白晝現はる、群星であるといふので、この一宿を除いて、二十七と言つてゐる。月が地球の周圍を一回轉するに、二十七日間を經、月の運行する周圍に於いて、著しき群星の一を

選び、それを以て同夜月の宿直する星座とし、従つて星座も二十七箇ある。これが二十七宿、次に、太陽の運行する方向とその位置を明にする爲め、地球の黄道圈に沿ひて、周天を十二區分し、その各區分中にある著しき星を以て、日々太陽の宿るところとし、これを宮と名づける。十二各區分中に一宮づつあるので、合して十二宮となる。次に、一夜毎に代つて現はれ、七日にて一周し、又更に初の星より代つて現はれる星がある。これを七曜と云ふ。七曜に、羅喉・計都の二星を加へて九曜と云ふ。要するに、宿曜すべて單なる天體の一現象に過ぎない。それを、古人はこれによつて人事界の吉凶禍福が生ずると信じ、或はその誕生の時日によつて、一生の運命を豫測し得らるゝといひ、天體の各現象には、善惡禍福の種々の特性を有つものとし、その特性は、悉く人事の上に實現されるものと信じた。この思想より、人の誕生と同時に天に一星現はれ、その死と同時に、又その星が滅すると考へて居たのである。

おきて。定めること。「規則」「法度の條目」「法制」「處置」「計畫」「經營」等の意である。

【評説】 ○亂りがはしきを。この解釋には大分異説があるから、一寸こゝへ記して詳説する事としよう。「玉の小櫛」には「亂りがはしとは歌のよろしからざるよしなりなど様にと歌より續きたるにて心得べし。(中略)さて此の歌實に亂りがはしきにはあらず、例の紫式部が卑下の心ばせにて、かく言ひなせるものなり云々」。その他「書きさまの亂雜なるなり」「歌の様が帝の崩御の様に聞ゆるは恐れ多し」等の異説がある。つまり帝かくて在します、臣下の生母が歿したのに、若宮の上が心配だといふのが、亂りがはしいといふのである。又「返事の書き様が畏まつて居ない。つまり敬意が薄い」など書きさまであるが、自分の卑見は、先づ第一に、帝の在しますのに、若宮を御庇護申上げた生母が歿し

たから、若宮の御上が心配だと言つたのは、從來存外行届いて居た母夫人の歌としては、餘りに嗜たしなみが足りない。激越した感情を露骨に言つて敬意が薄れたなどの意であらう。かう解すれば、「御覽しゆるす」の御言葉も、げにと思はれる。且書き方その他すべての形式も、いつもの様で無かつたのもあらう。「など様に」とあるから、この様に思はれる。一言にして言はば、「無遠慮」といふ事にならう。

○かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。これは、故更衣が葬儀の折に三位を贈らせられた際、「女御とだに言はせずなりぬるが云々」とあるから、帝の思召にては、何とかして然るべき機会に、故更衣を女御にしても遣りたい。そして、萬一若宮が春宮に立たせられ、つひに帝位にも登らせらるゝ様な事にもなつたら、なほその上にもと迄の御希望があらせられたからであらう。

○かくてもおのづから若宮など生ひ出で給はばさるべき序もありなむ。とあるは、女御とだに言はせず、更衣は亡くなつてしまつたが、若宮成長の後、春宮にも御立てになりたい思召があらせられるからである。それは随分容易い事では無いが、當時の世態としては、全然不可能な譯でも無いからである。

○この命婦の御使に立ち、且宮中へ歸つての復命から、帝が御悲數の狀が、實に能く寫してある。例へば、「いと細やかに有様をとほせ給へば」といふ、短句であるけれども、その命婦が不在中から、歸り参りての後の事を記すに、帝の御心中や御態度が、時々挿入してある爲に、讀者は、言外に深い意味を汲み

取るのである。尙「故大納言の遺言過たす云々」の勅語の一句で、母夫人が「生れし時より云々」の語も、亦「今迄とまり侍るがいと憂きを」「命長さのいとつらう」などの繰言も、「命長くところ思ひ念ぜめ」と仰せられたので、如何に母夫人のお話を、命婦が委しく奏上し、帝が御入念に聞き召されたかを想像し得る次第である。

○白氏文集。「玉勝間」に「白樂天が詩の、皇國にわたりまうで來つる事、文德實錄三の卷に見ゆ。藤原朝臣岳守卒云々、承和五年出爲太宰少貳、因檢校大唐人貨物適得元白詩筆奏上、帝甚耽悅、授從五位上、これなり。詩筆は古本にもかくあれども、元白といひ、帝甚耽悅云々とあるなどを思ふに、詩集を寫し誤まれるならむか、集ならばはじめて渡りまうで來つるなるべし」とある。承和は仁明天皇の御宇である。傳來は奈良朝末期か、平安朝初期ならむといはれて居る。

○太液の芙蓉。「徳川家河内本」に、「たいえきのふようも、げにかよひたりしかたちいろあひ、からめいたりけんよそひは、うるはしうけうらにこそはありけめ。なつかしうらうたげなりしありさまは、女郎花のかぜになびきたるよりもなよび、撫子の露にぬれたるよりもらうたく、なつかしかりしかたは、けはひを」とあり、猶「すみれ草」にも少し異つて、大抵これに類似のが出て居るが、どうもちとくだしく、桐壺全體の文の精鍊せられたのに比べて、少しく劣つて居る様に思はれる。「湖月抄」その他の本文に、多少脱落があるかも知れぬが、それで分らぬ事は無いから、前の方を探る。

芙蓉は蓮花である。支那の蓮は、本邦のよりも花形が大きく、香氣も強しとある。なる程さうかも知れぬ。印度の蓮に至つては、立派ではあるが餘りに大に過ぎて、美人の聯想にはふさはしく無い。

○未央の柳。これは、わが普通の垂柳の葉よりも細く長く、従つて三日月の様の恰好になつて居る。今の賀茂川岸の柳が、支那か三韓から移植の種類だと云ふ。朝鮮の大同江などの柳も同様だといふが、併し、風土が異つて幾星霜を経ると、段々變化して葉も太くなり、そのたけも短くなるといふ事である。かゝる種類の柳であれば、柳眉といふに相應しく、即ち、支那美人の眉を聯想するのである。

○此の邊りは一體に殆ど長恨歌の反譯である。故に一方からは、餘りに諄い、今少しあつきりとして欲しかつたといふ説もある。如何にも、少しそんな所も無いでも無からうが、曾ても一寸申した様に、これが若しも、單に反譯口調一點張であつたら、もつとく諄々しく讀者に倦怠を來すであらうが、さうのみでは無くて、ある時は原文の意を翻案的に、又ある時は換骨脱胎的に、或は對照的になど、自由自在に取り扱つてある爲に、寧ろ嫌氣はささず、却つて、長恨歌の興趣をさへに添加して見る次第である。

先づ、長恨歌の「後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身」の意味を、卷の始めより細々と、桐壺更衣御殊寵の狀に寫し來りて、更に「この頃且暮御覽する長恨歌の御繪云々（中略）唯そのすちをぞ枕ごとにせさせ給ふ」とことわつて置いたのも、實に用意周到ではないか。

そして、御使命婦に母夫人の贈物、「御髮上の調度」を添へたのも、當時の贈物として相應しく、帝がそれを御覽せられて、「楊貴妃が道士に託した證據の釵であつたならば、少しは慰むよしもあらうのに」との御心も、さこそと恐察し奉らるゝのである。

又「唐めいたる粧ひはうるはしうこそありけめ」の邊り、楊太眞（貴妃）が豊満艶美で誇らかな、娼婦型で殆ど華派々々しい程の唐美人（正倉院御物の吉祥天女の粉粧の様）は、如何にもうるはしくはあつたらうが、我が更衣の慎しやかな可憐な、上品で情趣深い日本佳人には、擬すべきものはない。蓮花の美、柳葉の艶に貴妃を擬へて見て、多少玄宗の心は紛れたか知れぬが、花鳥の色音などにも擬するもの無い、更衣の匂ひやかさには、とても比べて見て慰むべき物は無いといふに至つて、楊太眞の美とは反對の、桐壺更衣の容態も描き出されて、且如何に、帝が極端の御殊寵ありしかを、第三者に想像させた所も面白い。

そして、「燈火も挑げ盡して起き在します」と、殆ど長恨歌そのまゝを取り入れて置き、轉じて「右近のつかさの宿直奏の聲聞ゆるは丑になりぬるべし」と、讀者の想像が、支那唐代の宮廷に惹き附けられて居る夢幻的の心持を、ばつと現實のわが清涼殿に引き戻した所、そして「春宵苦短日高起」の玄宗が歡樂境を轉じて、帝の御悲歎場に化し、益々第三者に同情の念を湧かしめる等、實に吾等は作者から自由自在に感情を翻弄せられつゝも、猶面白がつて讀過し、翫味して居るのである。

又命婦が母夫人よりの贈物を、帝に御披露中上げる（即ち御覽に入れる）のは、我が國の慣例であつて、主人の使に立ちて、先方にて戴いた物を、主人に復命の際には、必ず披露する事になつて居るのみならず、どう言ふ場合でも、他から婢僕が戴いた物は、わが主人に披露するのが禮である。これは然るべき事で、主人の方からは、わが婢僕の爲に下された物に對し、先方に挨拶もし且當方からも、先方の婢僕へ同様にしむける必要もある譯である。現今でもさるべき階級では、皆かくの如き慣例が行はれて居るのである。

○若宮御参内の件には諸説がある。延喜の頃に服忌令が兩回あつて、その一回のには、「七歳未滿は服忌無し」といふ除外令の無かつた時期がある。こゝはそれに據つて、若宮御服忌の事に書いたのだと言ひ、又更衣の發病が夏とのみあるが、重體になつて下つて、直に逝去の時は、盛夏の候とは見えない。よしそれが盛夏の頃だと假定しても、陰曆では六月である。

そして、此の靉負命婦が故更衣邸に來た頃は、大分秋長けた頃の様で、先づ陰曆八月末頃であらうから、縦令若宮が制規の忌五十日を御服忌遊ばされても、無論、既にその期間はとうに過ぎて居るであらうと言ふのである。孰れにしても、既に御参内になるべき期の延引して居る状とは想像されるのである。

○きよら。「綺麗」「すつきりとした」等の意味であるが、その綺麗の中に、清らかさを含まれて居



るのである。

まことに、その國の言葉はよくその國民性を現すもので、これを見ても、如何に大和民族が清潔を好んだかを窺ひ知るに十分であらう。日本は太古から清潔を好み、且つ尙んだから、それがこよなく立派だと賞讃する語にさへ變化した次第であらう。これと反對に、幾ら善くても穢ないものは、最も嫌つたのである。

○此所で、若宮(源氏君)の御母方の、親しき御血縁の人々は終焉を告げた。即ち源氏は僅に三歳の時生母に、六歳の年祖母に永別せられた。故に源氏は、成長の後屢々、打ち解けて頼るべき人々に早く別れて心寂しいといふ事を、繰り返して居られる譯である。

祖母夫人の「慰む方無く」は、「徳川家河内本」には「慰む世無く」とある。當時の筆づかひとしては、「世」とある方が本當かも知れぬが、「方無く」でも分るから、先づさうして置く事にする。

此の「慰む方無く」は、帝から「さるべき序もありなむ。命長くところ思ひ念せぬ」などと御慰藉遊ばして戴いたけれども、皇太子もやはり順序通りに、反對側の、弘徽殿御誕生の第一皇子に御定りなつた。若宮は、段々宮中に御出でになる間が多くならせられる。色々寂しい、悲しい事許り増つて行くので、さてこそ、益々「慰む方無く思し沈む」やうになつた事であらう。兎角、人間は希望が全く無いとなると、往々死殿する場合が多い様である。

「在すらむ處にだに尋ね行かむ云々」も、やはり長恨歌の匂ひがある。帝の御製の「たまのありかをそこと知るべく」などにも、縁を引いて居る様だ。

○七つになり給へば(御)書始など。皇子七歳御書始の例としては、「河海」に「村上天皇親王時」、承平二年二月廿二日。一條院、寛和二年十二月八日」と見えてゐる。即ち、唐代の風に心酔して居たので、皇子の御書始にすら、唐の書物を用ひさせられたのは、當を得て居らぬ。明治天皇の御書始にも、やはり御註孝經を讀ませられたと傳へ承る。然るに、維新皇政復古以降は、長くも朝廷の御行事の、その重なる事は、全く御國ぶりの御物に改めさせられたのは、有難い事である。

○母君なくてだにらうたうし給へ。これは一寸難解の文である。「だに」が、問題になつて居る。「萩原廣道」は、「母君ならでだに」の間違であらうと云つてゐるが、どうもそれも變であるから、やはり本文通りに、「母君が亡くなつたあとでもせめて」と解して置く。「古本系統」には、帝の御言葉は、草紙地からになつて居るが、兎に角、分りのよく無い所である。それは、帝も御諦めがついたと云ふ程で無くとも、漸々御心も、その當座よりは御鎮まりになつて、餘りに故更衣の爲に、「物の道理を失はせ給うた」事の、御反省もあらせられるであらう。従つて、周囲の形勢も少しづつ變つて来る。弘徽殿に若宮を御連れなりなどする御様子でも、第一の反對者に在した女御との御間柄でさへ、此所迄の妥協が御つきになつた程だから、帝の御心には、今日位靜穩になつた宮中に、故更衣が生存して居たなら、今少し彼

の心をも安める事が出来たらうにとの思召も浮かばせられて、さてこそ「母君亡くてだにらうたうし給へ」の御言葉も發せられた次第であらうと解釋すれば、強ち判らぬ事もあるまいと思ふのである。

帝は、故更衣を呼ばせ給ふに、「母君」と仰せられた。當時陛下は「御父帝」、母陛下は「母宮」と申上げて居る。現今は近世の儘に、陛下及び殿下に對し奉らせられて、幼き宮様方は「御父」を「おもうさま（御申様）」、「御母」を「おたゝ様」と仰せられる。公卿華族方は、「父」を「おでえさま」、「母」を「おたあさま」と呼ばれる。「まゝ」なる語は、古は乳母を呼んだものである。

當時の大宮人の心に寫つた武士といふ者は、ただ疎暴な怖ろしいもので、恰も強盜か何ぞの様に、「人殺し」を仕事にして居る者、「物のあはれ」などは、露ばかりも知らぬ輩であると考え居たのであるから、武士と讐敵と連らねて、引用せられて居るのである。それが、漸次變轉して來て、徳川時代の劇小説等になると、「花は櫻木、人は武士」と禮讃せられるに至つたのは、實に時代の風潮が、如何に人間の感情を揺り動かし、變化せしむるかに、驚歎せずには居られない。

○隠れあへ給はず。〔定本源氏物語新解〕〔徳川家河内本〕にも「隠れあへ給はず」とある。即ち「隠れようとしても、隠れ切れない」の意味になる。「隠れ給はず」でも宜からうが、「隠れあへ給はず」の方を採る。

この打ち解けぬ遊びぐさといふのが面白い。すべて、親友の間柄でも、否夫婦關係の間でさへも、隔

心と云ふのとは違ふが、所謂用意のある態度、清少納言が枕草子に書いた様に「同じ處に住む人のかたみに恥ぢ交して」の意で、いくら親しくとも狎れ過ぎると、つい敬意を忘れて、互に氣まづくなる事があつた。常に敬と愛との平行を保つて居るならば、終始その交情を全うする事が出来る筈である。然るに、若宮は猶御幼稚ながら、侮りにくき所と、且、何と無く情趣の深みとが在るのである。當時の貴婦人方は、物越でなければ容易に男子に會はない風俗であつた事は勿論、子どもでも、最早元服する時代近くにもなつた人には、几帳位は引き寄せずに、濫りに會ふ様な事は少なかつたであらうから、若宮（源氏）の餘りの可愛らしさに、特別待遇をされた状況を示したのである。

但、帝は故更衣の忘れ形見と御鐘愛遊ばされる若宮が、非常に御立派な方で、敵方の弘徽殿さへさし放ちあへ給はぬ程である御嬉しさに、益々此の宮に對する御殊寵が、やがて藤壺との出來事を誘致するのである。恐るべき心の闇に結ぶ悪果も亦、見通すこと能はぬ次第ではないか。

○態との御學問云々。先づ最初に、若宮の御美しき可愛らしさを述べ、次に、御才學の全く天才的に在しますさま、神童とも稱すべき御方であらせられる事を示して、大に讀者の感情を、此の物語の主人公、源氏君の幼なだちに集中せしめたのである。

○高麗人。高麗は、朝鮮の北部から、今の咸鏡道附近一帯をかけてである。一體古の朝鮮は、新羅・高麗・百濟、その他肅慎・任那（日本府を置いた所）等、數多の小國に分れて居た。新羅・高麗・百濟が三韓で

ある。最初は、三韓鼎立して勢を争つて居たが、後には、任那及諸小國先づ滅び、百濟・新羅の二國も衰へて、獨高麗が勢を振つて居た。當時は、三韓全體をさして高麗といひ、なほ渤海方面迄も、高麗と云つて居た時代もある。故に、支那方面と相變んで、高麗唐土こまもろこしと漠然とした稱呼をなして居たのであるから、此所は先づ朝鮮人と見て宜しい。

三韓の地は、前述の如く度々變化して居るけれども、何と云つても、高麗が一等大きくもあり、従つて有力でもあつたから、日本では、三韓の總稱の様に言つて居たのかも知れない。又、「こま」と云ふ名の響きも好いなどの點もあつて、斯ういふ風になつたのであらう。

○いみじう忍びて。〔定本源氏物語新解〕〔徳川家河内本〕には、「いみじう忍びやつして」とある。やつして御出でになつたに相違無いが、これが無くても、皇子が目立たぬ様に、疎末な風をなされたであらう事は想像は附くから、先づ省く方にする。

○帝が外來の相人に、皇子を觀せしめられた事。如何にも、さうでもあつたであらうと首肯される。科學のかく迄進歩した、今日の文化社會でさへも、賣卜者や、觀相者には、随分然るべき人も迷信して過られる事がある程だから、平安朝當時には、之が絶好の道と尊ばれたのも、實に尤もの次第である。

勿論、易學も觀相學も、冷靜な頭腦を以て正確に、學理的に善用すれば、全然輕蔑無視すべきもので無い事は、現に今、文明國の法曹界の人達が、觀相をも一つの好材料として取扱つて居り、又易學の如き

は、全く算數の理から割り出してあるので、随分研究して見れば、面白いものであるけれども、斯う云ふ種類の學問は、往々迷信に陥り易く、且、それを悪用して、愚人を欺く材料に使用される場合が多い爲に、正しき識者間には、遂に爪弾きせられる事にもなつたのであらう。

○言ひ交したることども。往昔は、大學にも音博士といふがあつて、隨分、唐音をも學習したが、公けの使節、即ち遣唐使も廢せられなどして以來、最もむつかしい唐音を、骨を折つて習つても、大した必要も無い所から、全く有名無實になつて、一條天皇の頃は、唐音を以て話す様な人は無く、偶々外國人と談話する折には、筆談であつたといふ。如何にもさうであつたらうと思はれる。

徳川時代、朝鮮の使節の對談は、無論筆談のみであつて、漢文で筆談したものである。當時の日本には、隨分立派な漢學者があつたので、朝鮮使節に舌を卷かした事も、往々あつたと言ふ事である。

○倭相。何時頃から始まつたものか能く分らぬが、多分、支那の觀相學が三韓に渡り、更に、日本に輸入されたものに基いて出來たのであらうと思ふが、併し、もう少くも一條天皇時分には、日本人の創始した觀相學も、既に或程度迄發達して居たらしい。

「倭相を仰せて」は、「日本の相人に御下命になつて」の意と解する説もあるが、「日本流の觀相を御試みになつて」と解すれば解る。「玉の小櫛」には「陛下御親ら御心で判斷になつて」の意味に解してゐる。これは、學理的な漢土の人相學に對して、直覺的判定を倭相といつたのであらう。

○宿曜。人間と星との聯絡の點を、「解釋」の所に言つて置いたので、こゝでは「將星隕」と謂ふ様な事を言ふ。天文を見て、將星が隕ちた故、敵將諸葛亮が五丈原で死んだに相違ないと言つて、魏の司馬仲達が喜んだと言ふやうな説がある。此の宿曜と言ふ事が、支那より日本に傳はつて、平安朝の頃には盛行はれた。當時、日本に於いてこれを扱つたのは、僧侶、修驗者等であつた。

かゝる事は、言ふ迄も無く不合理な事ではあるけれど、永い間に深く人心に染み込んで、今日の新聞紙でも、九星と言ふものを出して居るものもあり、又、日常の言語にも、なほ將星の何のと言つてゐる。妙なものである。けれども、諺に言ふ「鬮の頭も信心から」で、永く多數の人心に喰ひ入つて居る事は、容易に改め得られぬもので、これを唯一概にけなしてでもしまふと、その爲に之を信じ切つて居る人は、本當に發病したり、死んだりした例もあるから、すべての事は合理的になすべきは勿論ではあるが、實地に臨んでの取扱方は、なかくむつかしいものである。

○源氏。臣籍に下して、源氏の姓を賜はるのである。當時、臣籍に下した皇族に賜はる姓は、大抵源姓であつた。

源の姓は、嵯峨天皇の弘仁五年五月八日、大納言信（まこと）に始まり、同じく弘常（ひろつね）以下の皇子、皇女三十餘人源氏となられる。これ即ち嵯峨源氏でついで、仁明文徳清和陽成光孝宇多醍醐の諸帝と引續いて、代々皇子、皇女に源姓を賜はつてゐる。この源姓を賜はつて、臣籍に列した人々を「一世源氏」と呼ぶ。醍

醐天皇第十七皇子高明親王は、光源氏同様に、元服以前に臣籍に下され、源姓を賜はり、源高明と稱してゐる。

○帝が、故更衣御寵愛の場合は、殆ど熱狂的であらせられたが、皇子に對しては、その御情愛の深さは孰れとも申されまいが、流石に大分常識的に成らせられてある様に伺はれる。殊に、春宮にも立てさせられたいのを、種々深き御考慮の末、臣籍に下されて、政治學を始め、専門學科をみつちりと御學習になる様に御導き遊ばされるところは、流石にかしこき御心と、恐察し奉られるのであるけれども、猶此の宮に對せられる偏愛の結果は、遂に知らずく、源氏の將來に一つの暗影を投げかけることになるのである。

年月にそへて、御息所の御事

を思し忘るゝ折なし。慰むやと、さるべき人々を參らせ（て御覽するにも）、なすらひに思さるるだにいと難き世かなと、うと

【口譯】

（桐壺更衣の逝去後、既に十年を経過したけれども）年月を経るにつれて、（帝はなほ）故御息所（更衣）の御事を（少しも）御忘れになる折が無い。（若しや、多少にても御心を）晴らし紛らす事もあらうかと（思召して）、然るべき人々（相應に立派な姫達）を御召になつて御覽になるけれども、（故更衣の通りに）はゆかずとも、その「さし亞（あ）き位にて（まあこれならばと）と思

ましようのみ、よろづに思しなりぬるに、先帝の四の宮の御かたち、優れ給へる聞え高くおはします。母后世になくかしづき聞え給ふを、上に侍ふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましたし時より見奉り、今もほの見奉りて、うせ給ひにし御息所の御かたちに似給へる人を、三代の宮仕に傳はりぬるに、え見奉りつけぬに、后の宮の姫宮こそ、いとようおぼえ

召す者さへ、滅多に無い世の中であるな」と、何も彼も全く嫌になつて御しまひになつたのであるが、(こゝに一つ、帝の御耳に留る事件が湧き出して来た。それは、帝の御側に御奉仕申上げて居る典侍某からの奏上である)、先帝の第四の姫宮の、御器量の優れて(御美しく)あらせられる御評判が高くいらつしやる。その母后が、比べるものも無い程に大事にかけて、御養育申上げて御いでのなるのを、清涼殿上に伺候する(帝附の女官)典侍は、先帝御時代の人で、彼の母后の御殿にも、親しく御出入を致し馴れて居つたから、(姫宮の)御幼少でいらせられた時分からお見上げ申して居り、今でもやはり(をりく)御機嫌伺などに参つて)、ちらりと位はお見上げ申して、御歿れになつた御息所の、御器量に似ましていらせられる方を、三代歴仕の御奉公中、(その長い間にも)えう御見付け申上げる事が出来ませんでしたのに、(先帝の)后宮の姫宮だけは、亡き御息所に、そつくり生寫しにお生れつき遊ばされたものでございませう。世に珍らし

ておひ出でさせ給へりけれ。有難き(御)かたち人になむ」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねんごろに聞えさせ給ひけり。母后、あな怖ろしや。春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣のあらはにはかなくもてなされし例もゆゝしうと思しつゝ、みて、すがくしうも思し立たざりけるほどに、后もうせ給ひぬ。心細きさまにておはしますに、ただわが女御子達と同じつらに思ひ聞えむと、いとねんごろ

い御器量美しでいらせられます」と奏上致したので、(帝は、それは果して)本當であらうか、(若しさうであつたならば、多少心も紛れるかも知れぬ)と、御心が留つて、懇切に(母后へ、姫宮御入内の事を)御勧めになつた。(母后はこれを御聞きになつて)「まあ怖ろしい事よ。春宮の(御母)女御が、大層意地が悪くて、桐壺更衣が露骨に、つまらぬ目にあはせられた(いちめ殺された、縁起でも無い)例もあるのに、忌々しい(嫌な事である)と思召し、御遠慮なされて、(思ひ切りよく)はきくとも、御入内おさせにならなかつた間に、(入内に反対の)母后も、御亡れになつてしまつた。(一人残らせられた)姫宮は、まことに)お心細い有様でいらせられるので、(帝は、此の機会にと)思召したであらう。女御とか何とか、最初から喧ましく定めなくとも可い)。唯(も)う、眞に朕が(姫宮達と同じ様に)御思ひ申上げよう。(御世話致さう)と、大層御深切に、御申し聞けになる。(姫宮)伺候の人々や、御世話役の人達や、御兄君兵部卿親王なども、この様に心細

に聞えさせ給ふ。さぶらふ人々御後見達、御兄の兵部卿の親王など(も)、かく心細くておはしまさむよりは、内住させ給ひて、御心も慰むべく思しなりて、参らせ奉り給へり。藤壺と聞ゆ。げに御かたち有様、怪しきまでぞおぼえ給へる。これは人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえ貶しめ聞え給はねば、うけばりて飽かぬことなし。かれは人も許し聞えざりしに、御志のあやにくなりしぞかし。お

い(頼り無い)御有様でいらせられるよりも、宮中生活をなされ(御覽になつた方が)、御氣も晴れようなどとお思ひになつて、姫宮を御入内おさせ申し上げた。(此の姫宮を)藤壺と申上げる。なる程、(典侍が申上げた通り、藤壺は)御容貌といひ、御様子といひ、不思議な程(故更衣に)似ていらつしやる。藤壺は御身分がすつと高くて(桐壺は大納言の女、藤壺は内親王である)、氣のせるか(萬事何もかも)立派に見えて、誰もが、えうお侮蔑み申上げなさないから、どの方面に對つても引けを取る所無く、(何一つ)不足な事は無い。彼(故更衣)は何人も納得しなかつたのに、帝の御寵愛があいにく(深く)あつたのである。帝は藤壺が思召に適つたからとて、故更衣思慕の御心が、紛れてしまふといふ譯では無いけれども、自然少しづつ(御心が藤壺の方へ)傾いて御いになつて、晴々と遊ばす様な御感じになるのも、(さ

ほしまざるゝとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなく思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

源氏の君は、御あたり去り給

はぬを、まして繁く渡らせ給ふ御方は、え恥ぢあへ給はず。いづれの御方も、われ人に劣らむと思いたるやはある、とりどりにいとめでたけれど、うち大人び給へるに、いと若う美しげにて、せちに隠れ給へど、おのづからもり見奉る。母御息所は、影

源氏の君は、帝の御側を(始終)御離れにならないのに、まして帝が頻繁に成らせられる所の女御更衣方は、えう源氏に恥ぢ隠れる事は出来ない。(即ち、隠れようとしても隠れ切れず。ついで源氏の美しき可愛らしさに、すつかり引き附けられて、馴染んでおしまひになる)。どの御方(女御更衣達)でも、自分は他に劣つて居る(引けを取る様な)器量だと、思つて居られる方があらうか。(否)決して無い。皆頗る自信が強いだけの事はあつて、それぞれに立派だけれど、(即ち、美人揃ではあるが、最早皆)相當の年配になつておいでになるのに、藤壺は大層若くて、美しくて(いらつしやるから、恥かしがつて)、つとめて(また御幼少の源氏にも、顔を合せまいとして、几帳の陰などに)お隠れになるのであるが、(源氏は、屢々帝が御いでのなる度毎に、殆ど御供なされるのであるから)自然(何かの機會に)、物の隙から洩れて(仄かに)拜される。母の御息所は(源氏三歳の時の永別であるから)、面影さへも御記憶が無いが、(藤壺は、御母更衣に)酷く似て

だに覺え給はぬを、いとよう似給へりと、典侍の聞えけるを、若き御心地に、いとあはれと思ひ聞え給ひて、つねに參らまほしう、なづさひ見奉らばやとおぼえ給ふ。うへも限なき御思ひどちにて、なうとみ給ひそ。怪しくよそへきこえつべきこゝちなむする。なめしと思さでらうたうし給へ。つらつきまみなどはいとよう似たりしゆゑ、がよひて見え給ふも、にげなからずなむしなど聞えつけ給へれば、幼き

いらつしやる、(全くそつくり、その儘だ)と典侍の申上げたのを、幼い御心に、大層沁々と(懐しく)お思ひ申上げて、始終藤壺の御側へ参りたく、付き添ひ馴れ親んで、御見上げ申したいものだとお感じになる。

帝は、(藤壺と源氏との御二方が)際限も無い程の御殊寵の間柄の方々なので、(どちらも同じ様に思召すので、帝は藤壺に)「(あの子を)疎まないで下さい。不思議に(貴女を故更衣に)擬へて見なした心持がする(貴女は更衣に酷似する)。無禮だと思召さないで、可愛がつてやつて下さい。(あの子の)顔つきや目つきに(故更衣が)、大層酷く似て居つたから、(即ち、貴女と源氏とがよく似て居る)。眞の母子と申しても、不似合な事は無い」などと、(藤壺に、源氏をお可愛がりになるやうに)仰付けになるので、源氏の幼な心地にも、(父帝の仰せの様に、實際なりたいたと思つて)何でも無い春の花、秋の紅葉(四季をり／＼の、贈り物や觀賞趣味)などにつけても、(源氏自身の)好意をお示し申して、

心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見え奉り、こよなう心寄せ聞え給へれば、弘徽殿の女御、またこの宮とも御なかそば／＼しきゆゑ、うち添へてもとよりの憎さもたち出でて、ものしと思したり。世にたぐひなしと見奉り給ひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほ

にははしきは(まさりて)譬へむ方なく美しげなるを、世の人光君と聞ゆ。藤壺並び給ひて、御おぼえもとりどりなれば、かが

格別に心をお寄せになる(親密になさる)ので、弘徽殿の女御は、又この宮(藤壺)とも御間柄がしつくりせぬから(例の嫉妬心を起される)、もとからの(源氏の)憎さに、(嫉ましい更衣の、おもちした源氏だといふ、本来の憎悪心に、更に藤壺といふ方への嫉みも)添ひ加つて、(一時は、源氏に對する憎しみも薄くなつて居たが、最初からの憎悪も起つて来て)、お氣障り(胸がむかむかする様)にお思ひになつた。

世間に有名な御評判の、この藤壺の宮の御容貌にくらべても、やはり、この(源氏の君の)御にははしきは(名玉を薄絹に包んだ様)な増つて、譬へやうも無い程の美しさであるのを、世人は「光君」と申上げる。(その源氏と)藤壺が並んで、帝の御寵愛に優劣が無いので、藤壺を輝く日の宮と申上げる。

帝は此の源氏の君の(可愛らしい)御稚兒姿を、變へるのは辛(惜しい)と思召すけれども、(やはり、恒例の通りに)十二歳で御元服(即ち、初冠)をなされる。帝は(御自身)何や彼やと、色々

やく日の宮と聞ゆ。

この君の御童姿、いと變へま  
うく思せど、十二にて御元服し  
給ふ。(帝よろづに)みたち思しい  
となみで、かぎりある事にこと  
を添へさせ給ふ。一年の春宮の  
御元服、南殿にてありし儀式の、  
よそほしかりし御ひびきにおと  
させ給はず。ところどころの饗  
など、内藏寮・穀倉院など、おほ  
やけごとに仕うまつれる、おろ  
そかなる事も(ぞ)と、とりわきお  
ほせ言ありて、きよらを盡して

おせはしく、居たり立つたりして御配慮になり、御指圖遊ばされ  
て、(ちやんと)制限のある(皇子御元服の儀式の)事に、なほ(特  
別立派にと、規定以外に何くれ)事を御附け加へ遊ばされる。  
(帝は、皇子としてはこれが最終で、爾後臣籍に下されるのであ  
るから、せめて皇子としての御なごりに、盛儀を挙げたいと思召  
して)、先年春宮の御元服が、紫宸殿(南殿)で御舉行になつた儀  
式の、莊麗盛大であつた騒ぎにも劣らない様に(同じに)遊ばさ  
れるのである。所々の方々へ賜つて配られる饗膳など、内藏寮  
や、穀倉院から調達するのであるが、(所謂)御役所仕事では型の  
如くで、疎略になり勝であらうと(さういふ點迄、御注意になつ  
て)、特別の御沙汰があつたので、(御下賜の御馳走は)綺麗立派  
にと、精一杯に盡して差上げた。

帝の常の御座所の清涼殿の、東の廂の間に、東向に御椅子を据  
ゑて玉座を設け、冠者(元服をする人、即ち源氏の君)の御席と、  
引入の大臣(加冠の役)の席とが、御前に設けられてある。申の

仕うまつれり。おはします殿の  
東の廂に、東向に御椅子立てて、  
冠者の御座、引入の大臣の御座、  
御前にあり。申の時にぞ源氏參  
り給ふ。みづら結び給へる面つ  
き、顔のにはひ、様かへ給はん事  
惜しげなり。大藏卿藏人つかう  
まつる。いと清らなる御髪をそ  
ぐ程、心苦しげなるを、上は御息  
所の見ましかばと思し出づる  
に、堪へ難きを、心強く念じかへ  
させ給ふ。冠し給ひて、御休所  
にまかで給ひて、御衣奉りかへ

刻(今の凡そ午後四時)に、源氏が御参りなされる。源氏の髪づ  
らを結つておいでになる面つき(頬のあたり)、顔の美しさ(何と  
も云ひ様の無い程の、全く人形の様な)童形を、大人風に様子を  
お變へになる事は、(いかに)も惜しいやうである。大藏卿藏人  
が、(理髪の役を)奉仕する。非常に綺麗な御髪を、(短く)切りそ  
ぐ時、勿體無い様な(惜さうな)様子をして居るのを、帝は、(あの  
子が大人になつたのを、亡き生母)御息所が見たらばなあと思召  
して、(又更に、亡き人を)御思ひ出しになると、(とても)耐へ難  
いのを、(じつと)氣強く我慢をして、平氣を粧つてならせられ  
る。(本巻解釋一五六頁参照)

加冠の儀が済んで、(源氏は)御休息所の下侍へ御退下になつ  
て、(赤き)闕腋を、縫腋の黄袍に)御召更へになつて、階下に下り  
て、拜舞の禮を執られる御様子を見上げて、その御席に列なる  
人々は、皆涙を零された。(此の涙は、綺麗で可愛らしい源氏に  
對して、すすろにさしぐまれる涙と、又一つには、帝の最愛の皇



て、下りて拜し奉り給ふさまにぞ、皆人涙落し給ふ。帝はたましてえ忍びあへ給はず。思しまぎるゝ折もありつるを、昔の事とりかへし悲しく思さる。いとかうきびはなるほどは、あげ劣り(も)やと疑はしく思されつるを、あさましよう美しげさ添ひ給へり。

引入の大臣の皇子腹に、ただ一人かしづき給ふ御むすめ、春宮よりも御氣色あるを、思し煩ふ事ありけるは、この君に奉ら

子が、無位の袍を召して、階下に臣下の禮を執つて、拜舞をなされるのを見て、何と無く御氣の毒、といふ感情も加はつた涙であらう。

帝は、また(尙更の事)まして、えう御我慢遊ばし切れぬ。(この頃は、何くれと)取り紛れて、(故更衣に御永別の御悲歎を、多少は)御忘れになる事も、時折はあつたけれども、(皇子御元服の状を御覽になつては)昔の思ひ出がさらに蘇つて、(耐へ難く)悲しく思召される。誠に、未だかう幼弱の頃には、髪を上げては器量が落ちはしまいかと、氣遣はしく思召されたのに、却つてびつくりする程、お美しさをお増になつた。

引入の大臣の夫人、皇族出の方に、(即ち、桐壺帝の御同母の御同胞、後大宮と申す)、たつた一人御持ちになつて、大切に御愛育なされる姫君(葵上)を、春宮からも(内々)御所望があるのを、(父大臣が)思ひ泥んで、躊躇されることのあつたのは、(實は、この)源氏の君に差上げたい、といふ下心があるからであつた。

むの御心なりけり。内にも御氣色たまはらせ給ひければ、(御時よくて)、さらばやがてこの折の御後見なかめるを、添臥にもと催させ給ひければ、さおほしたり。

さぶらひに罷出給ひて、人々大御酒などまゐるほど、親王達の御座の末に、源氏(の君)着き給へり。大臣氣色ばみ聞え給ふ事あれど、もののつゝましきほどにて、ともかくもえあへしらひ聞え給はず。御前より、内侍宣

内裏(帝)へも(嘗て)御内意を伺つて、(既に)御沙汰も(受けて)あつたから、(それでは、(丁度)この際好い御機會でもあるので、源氏の御後見すべき人も無い事だから、源氏の妻にも定めてくれたら)と御催促になつたので、(大臣も彌々)さうしようといふ考へになられた。

(源氏は殿上の)控所へ御退出になつて、皆が御下賜の御酒を戴いて居る際、(源氏は)親王方の御座の次席に御着きになつた。大臣は、(源氏にそつと、御婚儀の)心持をお仄めかしになるけれども、源氏は物事の何分にも極りの悪い年頃であるから、何とも彼とも會釋はなさらない(ただ黙つておいでになつた)。

(その時、帝の)御前から内侍が、御召の宣旨を承つて来て、大臣に御沙汰の由を傳へたから、(大臣は御前へ)參られる。(今日、加冠の御挨拶の)御褒美の物を、(帝附の)殿上伺候の命婦が取次いで、御下賜になる。白き大桂に、御衣一襲(の賜物)は先例の通りである。帝は御盃を(大臣に)下されながら(賜はつた)御

旨承り傳へて、大臣參り給ふべし製の御歌

き召あれば、參り給ふ。御祿の物、上の命婦取りて賜ふ。白き大柱に御衣一領、例の事なり。御盃のついでに、

帝 「いとさなき初元結に長き世を

契る心は結びこめつや」

御心ばへありて驚かさせ給

ふ。

大臣 「結びつる心も深き元結に

濃き紫のいろしあせすば」

と奏して、長階より下りて舞踏

し給ふ。

「いとさなき初元結に長き世を契る心は結びこめつや」

御製の意「卿がわが幼い子(の頭髮)に初めて元結をかけたをりに、(わが子と、卿の女との婚姻をさせて)永い將來を約束する心は、結びこめて置いてくれたか何うか」。即ち、長きも、結ぶも、元結の縁語である。世は大抵夫婦間の事をさす。

帝の思召のある所を御含めになつて、御注意を給はる。

大臣 「結びつる心も深き元結にこき紫の色しあせすば」

歌意「臣が深い心をこめて結んだ元結の様に、濃い紫の色さへ變らなかつたならば(誠に有難い嬉しい事でござりませう。何うか、源氏の御心の永き世かけて、御變りの無い様に祈る)の意。(當時の冠下の髪を結ぶ元結は、通例紫の細い打紐である)。

と、御返歌を奏上して、長階から(庭上に)下りて、拜舞される(即ち、御禮言上の形式を行はれた)。(更に特別に)左馬寮の御馬と、藏人所に飼はせられてある鷹と

左馬寮の御馬、藏人所の鷹す

ゑて、賜はり給ふ。御階の下に

親王達・上達部列ねて、祿どもし

なじな賜はり給ふ。その日の御

前の折櫃物・籠物など、右大辨な

む承りて仕うまつらせける。屯

食・祿の唐櫃どもなど、ところ狭

きまで、春宮の御元服の折にも

數まされり。なか／＼限もなく

厳しうなむ。

その夜大臣の御里に、源氏の

君罷出させ(奉り)給ふ。作法世に

珍らしきまで、もてかしづき聞

を据ゑて、(大臣に)下された。

(庭上の)御階下に、親王方や公卿達が、(すらりと)立ち列んで、

(當日御祝の)祿(かげ物)のいろ／＼の品々を、(それぞれ)御

下賜になつた(即ち、それを人々が頂戴した)。

その日の帝の御前の、(列ねてある所の)折櫃物(折詰の料理)、

籠物(籠に入れた菓子類)などは、右大辨が御沙汰を承つて、調

進したのである。屯食(握飯の如き物、これは下さまの人々へ分

配せられる。即ち、諸官衛へ配與せられる)かげ物を入れた唐

櫃など、置場所が無い程(並べ立てられて)、春宮の御元服の時よ

りも、數が多くて、却つて(非常に)際限も無い位、莊嚴盛大であ

つた。

その晩、左大臣の里邸へ、源氏の君を、(宮中より)御退出申さ

せる、(大臣親ら御案内申上げられる)。(婿入婚儀の)儀式作法

は、世間にも稀な程(立派にして)、大切に奉迎歡待された。

(舅の大臣は、婿君として迎へた源氏が)誠に子どもらしくて、

え給へり。いとさびはにておはしたるを、ゆゝしううつくしと思ひ聞え給へり。女君は少し過し給へるほどに、いと若うおはすれば、にげなく恥かしておほいたり。この大臣の御覚え、いとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ御后腹おんきさいはらになむおはしければ、いづかたにつけても物あざやかなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御祖父おんおほぢにて、つひに世の中を知り給ふべき、右の大臣のおんいきほひ

(幼弱な様子で)おいでになつたのを、非常に(ぞつとする程)美しいとお思ひ申上げられた。(配偶の)姫君は、少し年長(源氏に四歳の長、十六歳)で御ありになるのに、(源氏はまた)誠に少く(子どもくして)御いでなされるから、(何だか)似合はしく無い、恥かしいとお思ひになつた。

(一體此の)大臣は、帝の御信任が、極めて尋常でない(厚い)のに、(姫君の)母君は、内裏(帝)と同じ後の出でさへあらせたのであるから、どちらの方面から見ても、すべてが鮮明な、派手派手しい(御家門である)ところへ、此の君(の光)さへ御加はりになつたのであるから、(現に)春宮の御祖父(外戚)で、結局は天下の政權をお握りなさる筈の、右大臣の勢力も、問題にならぬ程、壓倒されてしまはれた。

(左大臣の)御子ども衆は、(夫人大宮の外に)あれこれの腹に、澤山おありになつた。内親王の御腹の(男君)は、藏人少將と申して、誠に若くて美しいのを、右大臣は(此の左大臣との)御中が

は、ものにもあらずおされ給へり。

餘り良く無いけれども、どうも打撿つて置かれ無い(他の)婿に取られたく無い)ので、秘藏女の四の君に配はせて、(婿に取つて、

御子ども許多腹々にものし給ふ。宮の御腹は藏人少將にて、

左大臣が源氏をかしづかれるが如く)競争的に、(此の婿君を)大事にかけて居られるのは、理想的な(左右大臣達の)御家の間柄であつた。

いと若うをかしきを、右の大臣の御中はいとよからねど、え見過し給はで、かしづき給ふ四の君にあはせ奉り、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになむ。

源氏の君は、(かうして、御結婚はなされたが)、帝が始終、御側から御離しにならぬので、(寛りと)氣易く里邸に下つておいでになる事も出来になれない。(そして源氏の)心の中では、ただ藤壺の(優れた)御様子を、(何處にも)類の無い(もの)とお思ひ申上げて、あゝ云つた様な人を配偶にしたいものだ。(藤壺が餘り格段に御立派であるから、他には少しも)似るものも無く、いらつしやるよ。左大臣殿の姫君は、(なる程)大層趣があつて美しく、大事にかけて育て上げられた人とは思はれるけれども、(どうも)心に染まない氣持がなされて、幼少時代の(途な心

はす。心のうちには、ただ藤壺

にかゝつて、非常に苦しい程に迄お思ひになつていらつしやつ

の御(かたち)有様を、たぐひなしと思ひ聞えて、さやうならむ人をこそ見め、似るものなくもおはしけるかな。大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえ給ひて、幼きほどの御ひとへ心にかゝりて、いと苦しきまでぞおぼしける。大人になり給ひて後は、ありしやうに御簾の内にも入れ給はず。御遊のをりをり、琴笛の音に聞き通ひ、ほのかなる御聲を慰めにて、内裏仕の

た。(源氏は元服をして)大人(扱)におなりなされてからは、(帝は)これ迄のやうに、(藤壺の)御簾の内にも御入れにならない。(ただ音楽の)御遊のをり(だけ、藤壺が簾内の)琴、(源氏が簾外での)笛の音に聞き入り、思ひを通はし、(藤壺が)仄かな(簾越の)聲(の洩れ来るのを、僅に聞く)を慰め(心やり)にして、宮廷住ひばかり、好ましくお思ひなされた。宮中に五六日御いになり、大臣邸に二三日など、(といふ様に)間を置いては下つて御いでのなるのであるけれども、只今(の)ところは、幼少時代だからと、咎めだてもせず、(大臣邸では益々)歡待奔走申上げられるのである。

(源氏附、葵上附と)御兩方の侍女達も、世間にある普通並で無い、(優れた立派なものばかり)選り揃へて奉侍おさせになる。御氣に入る様な御遊をして、せいぜい(御機嫌のよい様にと)お思ひになつて、(何くれと)骨を折られる。宮中に於いては、もとの(母御息所の居られた)桐壺、(即ち)淑景

みこのましようおぼえ給ふ。五六日さぶらひ給ひて、大殿に二三日など、たえだえに罷出給へど、只今は幼き御ほどに、よろづ罪なくおぼしなして、いとなみかしづき聞え給ふ。御方の人々、世の中におしなべたらぬを、えりとのへすぐりて侍はせ給ふ。御心につくべき御遊をし、おふなく思しいたづく。うちにはもとの淑景舎を御曹司にて、母御息所の御方の人々、罷出散らす侍はせ給ふ。里の殿は、

舎を(源氏の)御控部屋として、母御息所の御方にお仕へした侍女達を、下つて散り(づ)になつてしまはぬ様に、(源氏に)奉侍おさせになる。(故御息所の私邸、源氏の)里の御殿(後の二條院)は、(帝から)修理職や、内匠寮に御下命になつて、比べるもの無い程(立派に)御改築になる。もとからの木立や、築山の恰好も、面白い所であつたのを、もつと池の中心を廣く(堀り)なし、(諸職人が)大騒ぎをして、立派に工作して居る。源氏は、今度立派に改造されたこの様な所に、理想的な人(即ち藤壺の如き)を置いて、(一緒に)住みたいものだとはかり、(それは出来ないから)歎かしく思ひ續けておいでになる。光君といふ名は高麗人が歎賞して、附け奉つたのだと言ひ傳へたといふ事である。

【解釋】

先帝。「せんてい」と言はず、「せんたい」と云ふ。何故なれば、「せんてい」では餘り音が柔かで優しい。苟も帝王たる方を申すに、相應しくな

修理職・内匠寮に宣旨下りて、に

なう改め造らせ給ふ。もとの木立、山のたゝすまひ、おもしろき所なり(ける)を、(い)どど池の心廣くしなして、めでたく造りのゝしる。かゝる所に、思ふやうならむ人をすゑて住まばやとのみ、歎かしう思しわたる。

光君といふ名は、高麗人のめで聞えて、つけ奉りけるとぞいひ傳へたるとなむ。

先帝 兵部郷宮 い。調子が弱過ぎる、と云ふので、態と強め母后 四の宮(藤壺) て、せんだいと言つたのであるらしい。

上に侍ふ典侍。清涼殿の臺盤所(女官の詰所)に伺候して居る、帝附の女官である。

かたち人。容貌の美しい人、即ち美人の意。

内任。内裏に住むといふ事であるが、大抵后町に住むことをさす故、帝の寵を蒙る女性の入内をいふ。

藤壺と聞ゆ。藤壺は、平安時代禁中五舎の一である、飛香

舎のこと。後涼殿の北に在る。總べて、藤壺・桐壺の稱は、其の局の前栽に藤・桐等があるが爲に起つたのである。數多の女御・更衣の御局の中、帝の在す清涼殿に最も近いのは梅壺、即ち弘徽殿、其の次が此の藤壺で、當時は、帝にお近く局を賜はる程、尊い方であつた。それ故、弘徽殿・藤壺等は、大抵皇后候補の女御達が入られる處である。時には、他の御方



源氏物語繪入に據る

が御立ちになる事もあるけれども、それはまれである。それ故、此の藤君も、これより藤壺にお仕ひになり、藤壺の女御と呼ばれ、后がねのお一人として、數へられておいでになつた譯である。

うけばる。受け張ること。こゝは「どの方面に對しても、ひけを取る事なく」「何を受けても飽き足らぬ事がない。總てが充分で申分がない」の意。(言)「引き受けて専らにす」「確保」。他動、四段。(孟)「諾」「承諾」「憚る事も無きをいふなり」「われはと思へる體なり」。(玉)「事の足らひて、かけた方無くして、憚り諛ふべき所無き意なり」。

大人び。こゝは、先づ「ふける」といふ様の意。(言)「成人」「おとならしくなる」。切に。強ひての意で、「つとめて」と解して置く。切の音便。(言)「心に深く」「しきりに」「ひとむきに」。なづさふ。「離れ難い」「着いて居たい」等といふ時に用ふ。又「ぐづつく」等の意。(言)「木に著く」「浮ぶ」「沈む」「渡る」等、總てにいふ。(二)「なつく」「馴れ睦ぶ」「親昵」「拘泥」。

上も、限り無き御思ひどちにて。こゝは、「一寸分りにくい書き方である。」「御思ひどち」親密に思ひ合ふ同士(又同志とも書く)。かういふと、帝と藤壺とが「御思ひどち」の様に聞えるけれども、これは帝が、藤壺も源氏も同じ様に、非常に寵愛になる所の方々にて、の意に解するのである。一方は、御子の中の御愛子、一方は、御寵姫の中の第一の方。何れ優り劣りは無い、御寵愛の方々である。

なめし。「無禮」「無作法」「失禮」「ぶしつけ」。面つき。こゝは「顔つき」である。又「頼つき」をも云ふ。つる／＼して居るやうの意。「つら／＼椿」もこの語義。(言)「面」「かほ」「おもて」すべて物の上の平なる部。

そば／＼し。そばとは、すべて物の角稜ありて、圓からぬを云ふ。稜を重ねて、活用す。「かどだつ」「かどばる」

「圓満ならず」「かどくしき」意である。「つんとして、よそくしい形」「親しまぬさま」「すれく」と解してもよからう。

植物の蕎麥も、そば殻が三角形をなし、かど立ちて居るからかく云ひ、そばの木なども、同様だと云ふのである。  
光君。宇多天皇の皇子、敦慶親王の御美しさを稱へて、「玉光宮」と申上げ、光孝天皇の皇子で、臣籍に御下りになつた方を、「光源中納言」と申した。「光少將」などといふのもある。光源氏の名は、それらを準據として附けた名であらう、などとも言つて居る。

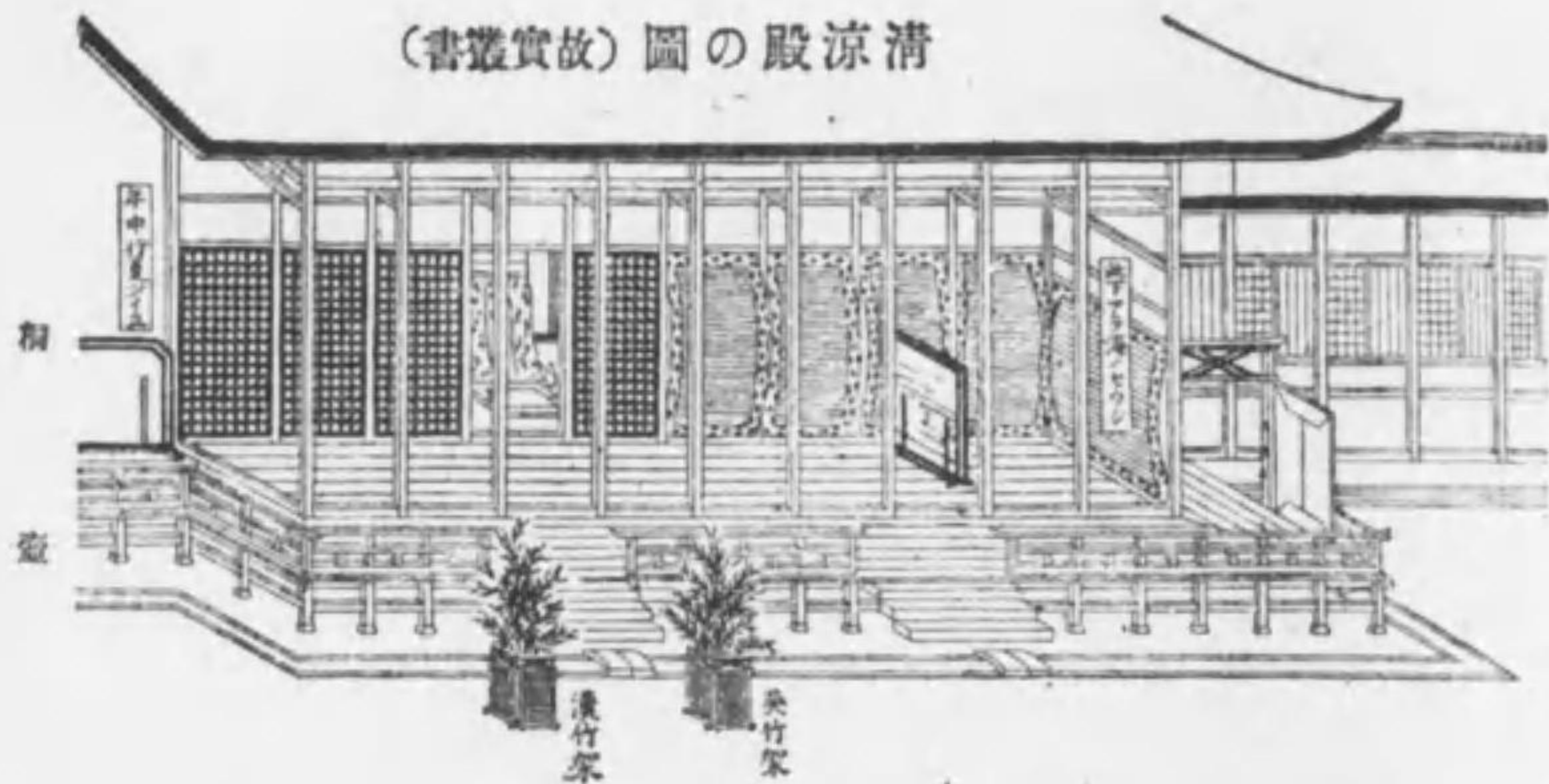
輝く日の宮。これは、一條院の御時、上東門院の御入内になつた際、かがやく藤壺と稱した薄雲女院が、同じ殿にましました故に、かく云ふたのであらう。藤原重家を「輝く少將」、源齊信を「輝く中將」などと云つて居るのである。居たち思しいとなみて。居たり立つたりしてであるが、つまり、せはしなく、あれもこれもと御考へになり、御指圖になる事。「河内」には「いたづき」とある。「いたづき」ならば、心勞の意。

いとなむ。「言」「調ふる」「爲る」「作る」「支度する」「用意す」。  
南殿。「なでん」。又「なんでん」。即ち紫宸殿の事。これが、本當の正殿である。朝賀即位の禮は、古は大極殿で行はれたが、當時は、大抵紫宸殿で行はれる事になつた。(本卷評説一六七、一六八頁参照)

よそほしかりし。「よそほふ」は「よそふ」に同じ。「よそほふ」は他動四段、「よそほし」は形容、二段になる。装の莊嚴華麗なる意。

ところどころの擧。先づ、王家を始め各方面へ、元服の御儀御祝の饗膳、即ち、御料理を賜はるのである。(本卷評説一六九、一七〇頁参照)

(書叢實故)圖の殿涼清



敷倉院。

王朝時代に、畿内諸國の調錢、諸國の無主及没官田、太宰府の稻等、諸莊の物を納むる倉を言ふ。而して、これを供御、饗宴及び臨時の救賑、或は社寺の用に充つる等、用途が甚だ多い。

椅子。「いす」である。今は「椅子」と書く。「子」は、總べて器具の意である。即ち、椅の器の意、それを、さ行の五音相通で、「いし」と柔かに言つたのである。

冠者。「くわんざ」又は「くわざ」とよむ。武家時代となり、すべてに強きを尙ぶ世になつては、音なども強く、「くわんじや」と漢音で讀むに至つた。加冠する人をさす。

引入。冠に、冠者の髪の毛を引入れる義。即ち「加冠」の役人をさす。後世の、烏帽子親である。

此の人に、實名を附けて貰ふのであつて、大層大事な役目とせられて居る。實名といふのは、「道長」とか、「公任」とか呼ぶ、それが實名である。即ち、幼名もあり、呼名もあり。又官名や、位をも呼んだのである。

みづら。鬢づらの音便、約である。童子の前髪を眞中から左右に分け



御椅子  
(政安、圖設鋪殿涼清、載所本稿諸營造御)

て、それを曲まねて、兩耳の上の所で紐で結ぶ。丁度、聖徳太子の御像の如きものである。角髪、總角とも書く。

これは古代の風が残つて居たので、その時代には、上流の方も、平生は髪を前で分けて、末は後ろへ垂らして、一寸根を結んで置くのである。

そぐ。當時は、男の子でも、可なり長く頭髪をのばしてゐた。そして、髻をとる時に、餘り多ければ少し削いで、紫の小元結で結び、冠下地とし、さきをぶつと斬るのである。そぐとは、髪のをさを切ることもかくいふ。

心苦し。こゝは、「惜しい」「勿體ない」「お氣の毒」といふ位の意。「苦に思ふ」「氣づかはし」等の意味になる場合もある。

念ず。我慢する意。「耐らへ忍ぶ」「心に祈る」などの意にもなる。

御休所みやすどころ。御休息所で、之は藏人所の下侍である。藏人や其の他役人達が、此處に

(三越開催風俗展覧會出品に據る)



集まつて、宴會などをする。殿上の間では、酒を飲むとか、歌をうたふとかする事が出来ぬから、皆此所である。きびは。「幼弱」「幼く」「か弱く」「華奢」。一種の極小さき鳥をひわと呼ぶも、ひわ／＼とか弱い意だといふ。或はさうかも知れぬ。「き」は生。「びわ」は、鶯の意味だといふのは、どうであらうか。

引入の大臣の皇子腹。すべて、内親王様の御腹にお出来遊ばした御子様を、内親王腹の何某といふ。この内親王

とは、左大臣の夫人で、桐壺帝の御同母、后宮の所生。今度加冠を勤めた左大臣に、御降嫁になつた内親王。即ち、後の頭中將(今の藏人の少將)と、源氏の夫人養上との母。思し煩ふ。讀譜する意であるが、「煩ふ」意味があるから、少し迷惑に思ふ心持もある。

うちにも御氣色賜はらせ給ひければ、御時よくてさらばやがてこの折の云々。(定本源氏物語新解)(徳河内)には

(御時よくて)とある。「湖」にはないが、これはある方がよいと思はれる。

添臥。「添臥」であるから、「お伽」にと譯せぬ事も無いが、それでは、女の方が軽く聞えて、側室そばむらの様に取れるから、これは「配」の意で、妻として置く。

大御酒。「き」は「酒」で、白酒、黒酒などといふ。「おほみ」は、敬語を重ねてあつて、最敬語に用ふるのである。即ち、帝より御下賜の御酒をさす。みき、後には、さうで無いのにも用ひた。

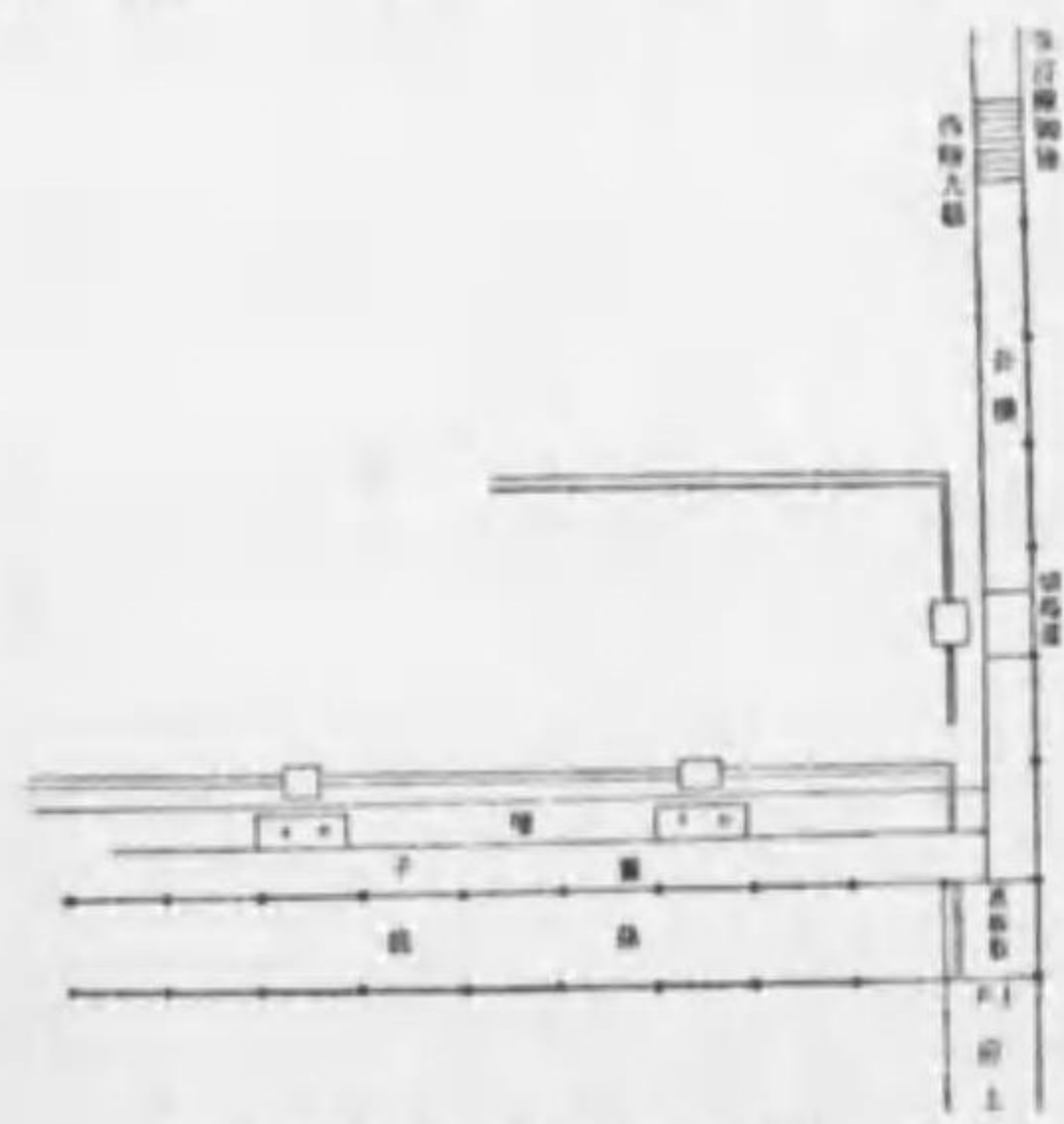
親王達の御座の末に源氏の君着き給へり。源氏は、元服して大人扱になられたので、今日からは、正式に臣籍に編入せられるのだから、どうしても、まだ無位の源氏は、三位の公卿の次席であるべきなのであるが、帝が御殊寵の御愛子なるが故に、特別の御待遇で、臣下の上席に着かれたのである。

大袿。これには、大小あり。大袿は、男子が衣の上に着るもので、女子の小袿とは、別である。(本卷評説一六九頁参照)

初元結。當時、冠下の髪を結ぶ元結は、紫の細い打紐であつた。そして、他の色もあり、又麻紙等をも用ひたらしい。

長階。清涼殿より、紫宸殿へ通ふ廊である。こゝにきざ橋があつて、東庭へ下りる様になつて居るのである。

舞踏。拜謝の意を表はす際の、一つの形式で、舞踏は即ち、手の舞足の踏である。正面左右と云ふ順序で拜をするに、各方式に定めがある。三方に



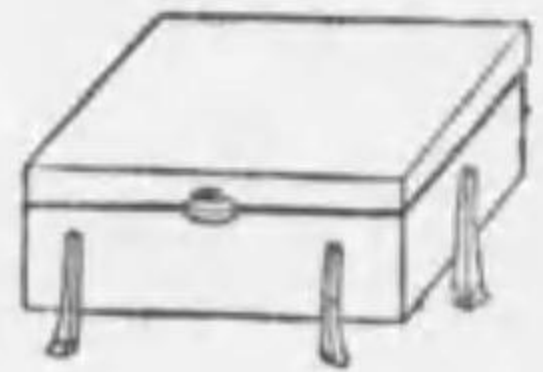
(圖釋證考語物氏源)階長

一度宛のが三拜、三度宛のが九拜、これが、最も鄭重なるものである。多くの場合は、三拜である故、此の時も三拜位であつたであらう。(本卷評説一六九頁参照)

折櫃物。「をりうづもの」。櫃の薄板を折り曲げて作つた櫃に盛つた物。現今の料理の折詰は、これから變化したものである。



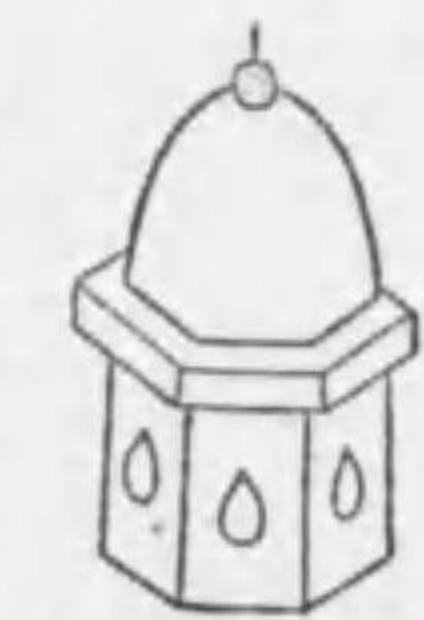
(録日古微)物櫃折



(抄要雜聚類)櫃唐の香

籠物。「こもの」。籠に入れたくたもの意で、其の籠を木の枝につけて献上し、又贈物や、或は儀式等の時に用ひたのである。籠は、普通は竹で作るが、立派な物は金屬で作り、緑青で青く塗つてあつて、其の儘にても、室内裝飾になる様な物もある。

屯食。「どんじき」「どじき」。強飯を卵形にして、丸く少し長目に盛りたるもの。握り飯の類にて、下さまの者へ下さるもの。



(説義函王)食屯



物籠

里。里郎などと書く。即ち、私郎の事である。宮仕の者の、己が家を稱することはである。(言)「さとは狭處の義にて、國郡に比すれば狭きをいふ」とあり。猶、種々變つた意義に用ひて居る。即ち、奉公人などの宿許、妻又は養子、婿の實家、遊里等をもいふのである。

琴笛の音。管絃、即ち音楽といふ程の事である。當時、婦人は決して笛を吹く事は無かつたから、藤壺の彈かれる琴即ち絃、源氏の吹かれる笛管の音の意。  
おしなべたらぬ。尋常又は普通で無い。平凡でない等の意。

おふなく。「身に負ひ得るだけの力を盡して」「身分相當に」「それ相應に」「随分に」等の意であるが、「出来るだけ」の意にとりて、こゝには「せいぜい」と解して置く。時には、原義より轉じて、「ねんごろに」などの意に用ふるところもある。

御曹司。宮中官省の官人、女官等の用部屋、局をさす。即ち、控部屋の事であるが、遂に普通の部屋の意に使ひて、御曹司とは、後の「部屋住」、然るべき家庭の若き男子をいふ様にもなつた。

里の殿。桐壺更衣の臨終の所。これは更衣が、父の按察大納言より譲られた屋敷で、それをまた、御誕生の源氏君に傳へられたのである。(當時は、女子にも親が相當の財産を譲るが普通であつた)。即ち、後の二條院。六條院造督迄、源氏の住まれた里郎である。

修理職。「しゆりしき」とも云ふ。これは、起原は詳かでないが、弘仁九年七月、始めて職名を定め置かれたやうである。内裏の修理、造營、改造等を掌る。大宮の東、近衛の南に在る。

内匠寮。中務省の被官にて、朝廷の工匠、造營裝飾等を掌る。藻壁門内、左馬寮の北、右兵衛府の南に在る。今も此の御役所の名は存して居る。職も寮も、共に令外の官である。

宣旨。勅旨を宣べ傳ふること。又、天皇の口勅を宣べ傳ふる公文書。内侍、勅旨を承りて、藏人に傳へ、藏人、之を公卿に告げ、上卿外記に命じて、其の旨を記さしめて、宣下するを常とす。

任官等の勅を、直に頭辨に下さるを「口宣」とし、頭辨、之を上卿に傳ふるを「口宣案」とし、上卿、其の旨を書して出だすを、「給旨」といふとある。

山のたゝずまひ。「築山の恰好」。「たゝずまひ」は(國辭)(一)「ただずまふこと」(二)「立ちたる様子」(有



様」「様子」。「たゞすまふ」は自動四。「たゞすむ」に同じ。「たゞすむ」は自動四。「立ち止る」「暫時止る」また「さまよふ」「ぶらつく」「徘徊す」。

「たゞすまひ」は、「立ちたる姿」といふ事で、もと擬人法から来たといふ。當時は、皆「山の姿」に打ち任せてかう云つて居る。

池の心。水の一番深みをさす。古は、人の心は身體の中央に有るものと考へた故、池の心と云へば、池の中央の意になる。それより轉じて、池の底の意に云ふ。池の底を廣くするとは、即ち、池をすつと廣くしての意である。

めてたく造りのゝしる。「のゝしる」の語は、前にもあつたが、わい／＼騒ぐ等の事で、こゝは、立派に造りなして威勢よく、わい／＼賑やかにきほつて、騒いでゐる状である。即ち、多くの人々が、御殿の修繕、改築、増築、御庭の御手入等を立派にして、大騒ぎをして居るの意で、其の工事をなしつゝある有様を云つたのである。

かゝる所に、思ふやうならむ人をすゑて、住まばやとのみ歎かしう思しわたる。源氏の里邸は、立派に改造が出来た。「かう云ふ所に、理想的の婦人、(即ち、藤壺の如き人)を置いて、同棲したいものだなあ」と、御考へ續けになつたといふのである。

「ばや」。願望の感動詞であるが、これは、自身自らの心に、希望を抱く場合に使用する語で、「住みたいものだな」と云ふ意味である。

「思しわたる」。思ひつづけるの意。「わたる」は時間空間、兩者の繼續の意を表はすのであるが、つまり、つづいて思ふ時に用ふる。思しは思ふの敬語。

いひ傳へたるとなむ。例によつて、作者が「かく／＼云ひ傳へた」といふ事である」と、古人が謙辭の傳聞を、更に、

又聞した様に記したのである。即ち、云ひ傳へたるとなむ、聞きました」。の意味である。

【評説】 ○先帝。「せんでいしを、せんだい」と讀むのも、當時の美的趣味の立場から考へたのであらう。調子よく、すべてが相應すると云ふ事が、何よりも大切な事であつたからである。

この先帝は、桐壺帝の叔伯父か、従兄弟か判然せぬ。當時は、順次皇弟へ御傳へにもなり、或は又、お近い皇族より立たせられた事もある故、御關係が分らぬ。ただ、親子兄弟の御間柄で無かつた事は、たしかであらう。兎に角、桐壺帝とは筋ちがひの系統である。典侍の談話中、三代の宮仕といふから押して、ある御先代の帝と申して置くのである。

○典侍。は、内侍所の次官。内侍所の女官には、尙侍・典侍・掌侍がある。當時は尙侍一人、典侍數人、次に命婦をおいた。内侍は、内侍所に仕ふる女官の職名であつたが、後には、帝の御用をつとむる女官の稱となつた。勿論、内侍所の御祭、即ち新嘗祭等の時には、第一の役人として、これ等の女性がつとめる。このあたり大分やゝこしい官職であるが、それには又理由がある。

内侍所に於て、最も神聖なる神明に奉仕する者と、如何に至尊であらせられても、帝に奉仕する人とが、同一であつたといふ事は、吾が國ならではあり得べからざる事であらう。それは崇神天皇の御代迄は、内侍所即ち皇祖の御靈と、帝とは、同じ御寢所に、御殿籠遊ばされたのを、神代、人代と段々遠ざかりて、百事神慮に協ふやうにのみはなるまいから、大御神は、別に清淨の地に齋き祭る方然るべしとて、

遂に神域を嚴選して、次の帝、垂仁天皇の皇女をして、現今の伊勢に神域を定めさせられた。が併し三千年に近き今日迄、御即位の折の大嘗祭、及び年毎の新嘗祭には、長くも陛下御親ら、神明と御會食になる御かたちを執らせられ、大嘗祭には、御臥床に御陪寢の式をも執らせられる等と傳へらるゝ所から推して、別に不可思議の事でも無かつたらうし、又それ等を恐察し奉ると、わが皇室の世界無比、特異の神聖さに、身も戦かれる程の畏さを感じる次第である。近來迄、神秘の事に屬して、濫に口にする事は出来なかつたが、大正天皇御即位の砌、右様の事が公けにせられたから、茲に謹んで附記す。

○おぼえ。 記憶であるが、轉じて似ることに使ふ。心に記憶して居る事が、ふと浮んで來て、全く其の通りと思はれる意味である。往々こんな風に轉ずる言葉があるので、一寸わかりにくい事もある。

○藤壺入内について。 桐壺帝が、更衣を失はれた御歎きの様は、一寸、花山天皇の、弘徽殿女御を失はせられた時の御有様に似てゐるが、更に、玄宗皇帝の方に酷く似て居る。玄宗が、寵姫武惠姫を失つた悲歎を慰めようとして、遂に、楊貴妃を求め得、爾後貴妃の妖艶に感溺し、又、之を失つて痛惜哀悼する狀に、最もよく似て居るけれども、彼(貴妃)は妖婦であり、是(藤壺)は淑女である所以も、長恨歌を學んで、而かも直譯的では無く、寧ろ換骨脱胎的に、作者は、自由自在の筆を弄して居る。が併し、彼(玄宗)は、第二次に召した寵姫の爲に、天下の動亂を醸し、是(桐壺帝)は又、牆中に忌はしき暗影を招いた事に於いて、何等か寓意があつたかも知れない。

帝が、展轉の思ひを慰め奉らんが爲に、典侍某が先帝の四の宮を御薦め申したのも、随分ありさうな事であるし、帝が「まことにやと御心留りて」御入内を御勧誘になり、母後の御躊躇になるのも、實にさと思はれるし、幾程も無くて、母后御他界の後、御後見達の御入内勸告も、亦さあるべき道筋を辿られる次第であらうと首肯される。そして、御召になつた四の宮(藤壺)は、故更衣に酷似して、且理想的の御女性であつたから、帝は「思し紛るゝとは無けれど、こよ無く思し慰む」も、人情の推移は、實にさういふものであらうと思はれて、變轉不定の世相を、今更に見詰めさせられるのである。

それから、四の宮(藤壺)の受け張りて飽かぬ所無いさまから、又弘徽殿の嫉妬が擡頭し、焦燥が再發して、「僧侶が憎ければ袈裟迄憎き」諺に洩れぬ情界の消息、分けても幼き源氏が、父帝は申すも更にて、上の女房達も、「無くてぞ人は戀しく」なり、「逃げた魚は大きく」感ずる慣ひに、故御母更衣はかくく、しかしかと、褒めそやし、惜み懐かしむ話を、源氏は、幼い一筋の御心に、泌々と感じて、戀しがつておいでになる所へ、今度お上りになつた藤壺は、亡き母君にそつくりだと聞かされる。いくら美しくても最早花過ぎた木立の中へ、今將に開かんとする名花が、浮き出た様な藤壺、それが源氏の戀しいくと戀慕はれる亡き母、面影さへも記憶に止らぬ生母に、酷く似て居られると聞いては、矢も楯も堪らなく戀しくなるのは、無理も無い、全くいぢらしい事である。そこへ、父帝からは、藤壺に「疎まないで可愛がつてやつて下さい。あの子は亡き母更衣に酷く似て居り、貴女は又更衣に似て居られるから、母子と

云つても不似合では無い様だなどといふ仰せを承るのである。これは、源氏にとつては、燃ゆる火に薪を添へると同様である。それが、漸次戀心に變化して行くのも、困つた事であるが、誠に己むを得ぬ徑路であらう。

現今の心理學方面に云ふ所の「潜在意識」、その説明によると、大人になつて理智が發達し、迷信などに毫も捉らへられない人でも、夜間墓所の邊等を過ぐる時、ただ無意識にふと悚然とする。即ち、何と無く氣味の悪い様な心持する場合、自分に心づいて、「何の事だ」と斯う反省すれば、最早再びぞつとする様な事は無いが、その最初の刹那、自然に端的にぞつとするのが、「潜在意識」であるといふ。其故幼兒が、先づ最初に好もしいと思ひ、嫌だと思つたものが、終生その人の心に印して、自然好惡の性癖を作るもので、生母とか、乳母とか、乃至祖母・姉・傳女等、誰でも、小兒の第一の深い印象が、一生を通じて其の心を支配するのである。生長の後にも、幼兒時代に大好であつた人の容貌に似た妻を娶れば氣に入る事になり、大嫌ひであつた人に酷似した女性に餘儀無く配するやうな事になれば、第三者から見ても、どこが悪いと非點を打つべき所の無い婦人に、彼は何が不足で疎外するであらうと怪しませるのである。又あんなつまらぬ女性に彼はどこが氣に入つて熱中するであらうと、他からは怪しむ様なものも、慥に「潜在意識」の働きによるものだと云ふ。勿論、一概にさうばかりと云ふ事の出来ないのは、申す迄も無いし、道義の觀念が強烈になれば、勿論こんな意識などは、打ち消してしまふ事は何でもなからう

が、先づ、普通の場合ではさうはゆくまい。實際世間には、往々此の定木に當て筈る事の多いのは、随分妙なものである。

即ち、源氏が大殿の君（葵上）を「をかしげにかしづかれたる人」とはお思ひになるが、何といふ事無しに蟲が好かぬ。そして、御母更衣にそつくりと聞かせられた藤壺をのみ、「似る者無くも在しけるかな」と思ひ詰められた。紫上は、なる程、先づ理想的の立派な女性でもあつたらうが、その幼い時から、何としても欲しいと迄熱中されたのは、全く藤壺のゆかりであり、藤壺に似た所があるからであつた。誠に、千載の昔に溯つて見て、其の理路の全く合致するのは、實に面白いものではないか。

故に、深く誠むべきは、親達が子どもに對する言動である。勿論、其の子たる者に、道義の觀念が強く、修道の練磨が十分出來て居れば、如何に意馬狂ひ心猿奔りても、見事自ら之を取り止め、乗り鎮めてしまふ筈である。現に、源氏の嫡子夕霧は、野分の朝、紫上を垣間見て、非常に戀心が動いたけれども、克く自制の道念に押し鎮めて、悔無きを得たのであるが、何と云つても、やはり親の子に對する注意は、苟くもしてはならない譯である。（又例の修身談的に傾いた事を、自ら憫笑する）。

○此の一段は、源氏の美しさを稱へたのである。桐壺帝の女一宮（弘微殿腹）が、御美しいと云ふ事になつて居り、更に藤壺の宮は、上の典侍が三代の宮廷を通じて、御見付け申上げない程、比類なき麗人と申上げた位、御美しい方である。さう云ふ美人の中に於いて、源氏は、今一層水際立つて、優秀無比の御美

しきであるといふ爲に、かう書き並べて比較を取つたのである。如何にも、耽美的時代の世相が伺はれる。

源氏の君の御童形を變へる事を、帝が大層御惜みになり、且髪を上げて器量が落ちはしまいかと、御心配になつた所が、加冠して大人風になされて、却つて美を増したとて、非常な御安心、御満足である。それから、源氏の一生を通して、その美といふ事がどれだけ、所謂罪許さるゝ事になつたか知れないのである。現代から考へては、何うも能く分らぬと思ふ位、女性でも無いのに、何故、それ程美しいとか、可愛いとか云ふ形態が大切なのであらうと、不可思議に思はれるのであるが、それが前段にも申した様に、耽美的時代の人心である。何んなに賢くても、醜くては出世は出来ない。衆望は歸さないのであるから、帝の御愛子の容貌が、變へ劣りがなされては大變であるのに、一段の美を添へられたので、大に御満足、御安心になつた次第である。

が、古今東西、美醜を好悪する風潮は、存外に漲つて居る事に驚かされる。二千有餘年の昔、支那の孔子は、「祝駝の佞ありて、宋朝の美あらざれば、難いかな、今の世に免がるゝこと」と歎息せられた。その事に就ては、此の理知の進歩した、二十世紀に於いてさへ、猶これに類する事がある。たしか、此の二十世紀の始め頃と記憶する。佛蘭西の都、巴里の某畫家の妻は、夫を殺したといふ嫌疑で捕はれたが、殺人罪は證據不十分で免された。それは、全くさうでは無かつたらしいとの事であつた。が、其の爲

に、素行の修まらなかつた事が暴露して、二三の愛人も引き出された程であつたのに、巴里の人氣は、絶世の美人だといふ此の畫家の妻に集つて、「あんな可憐な麗人を、殺人罪に訊うて下獄させたのは随分酷い。法官が残酷だ、没情漢だ」と、大分非難攻撃の聲が高く、其の麗人が流石に恥ぢて、はうゝの體で都落をして、田舎へ引込まうとした時には、巴里人は、其の時日を探索して、沿道に群がり待ちかまへて居て、その乗車へ抛げ入れる花束で、車が一杯になつたと、當時彼の地の新聞に、挿繪迄して載せてあつた事を追想する。こんな例は、まだゝ他にも随分あらう。さうして見ると、人間の心情も存外にくだらなげな、變なものである様に思はれて來るのである。

○南殿。即ち、紫宸殿で、本當の正殿である。元來朝賀即位の禮及び節會以下の事も、重要な諸儀は、大極殿で行はるべきが正式であつた。この大極殿は、殆ど唐風であり、それに稍日本風を加味したのが、紫宸殿で、更に、多分に日本化したのが、清涼殿であつた。ところが、大極殿が度々類焼したりして、一條天皇の頃には、諸正式も紫宸殿で行はれる事になつた。嘗て紫宸殿も、帝の常の御座所としては御不便である故に、帝は、清涼殿を御常住と遊ばされたのであるが、近世更に、純日本式の「常の御所」といふが御造營になつて、天皇は大抵、其所に御起臥になつたのである。

○そぐ。單に切る事をも「そぐ」と云つたらしいが、併し、未亡人になつて髪のをさを切つて、茶筌盤、若くは撫で付けにして居る婦人を、「薙髮さん」と稱した。髪を切るといふ事は、吉からぬ事と



の饗膳を、各所へ分配し贈らせられるとある。

又一説、此の饗膳しだしには、所々の持分があり、今日は内藏寮の持分からの御饗膳、明日は穀倉院の持分云々、又、皇族その他の持分からといふ様な意だともいふ。いづれにしても、仰山な御饗應ぶりであつたものと見える。

源氏加冠の儀式の所に、帝が一定した御役所仕事では行届かない、外形的だけの事に止まらうかと御心配になつて、其の受持の個所へ特別の御沙汰で、精一杯十分に立派に遊ばされた所は、如何にも亡き寵姫に對せられる、せめてもの御心遣で、而かも、御愛兒は、此の盛儀を境に、臣籍に下されるのであるから、言ふに言はれぬ複雑な、深甚なる思召があつたであらうと、御父性愛の限無さを、泌々と恐察し奉られるのである。

そして源氏が、大人にお成りなされるのを御覽になつて、「こんなに立派に生長した様子を、亡き生母が見たならなあ」と御考へになり、漸く我慢して、御涙を御抑へになつたが、参列の人々が皆感涙をとどめあへぬさまに、帝は、耐らへく／＼て在りました涙の川の堤を切つて、奔流的に、懷舊の悲歎に浸り給ふ所も、誠に細かく能く寫し出してある。

春宮は、南殿に於いて加冠の盛儀を行はせられ、御禮の御拜も勿論殿上であるが、源氏は清涼殿(帝の常の御殿)であり、これより臣籍に下られるのだから、無位の縫殿黄袍に更衣されて、階下の拜舞であ

る。これを御覽になる帝の御心は、いくらかねて御覺悟の事でも、如何ばかり御感情が昂まつた事であらう。参列の人々も一方には、繪から抜け出た様な、天上から天降つた人の様な、品の善い、美しい、そして猶御幼弱な可憐な方が、階下の拜舞を見上げては、何とも名状し難き、複雑なる感情が湧いて、甘苦い涙が零れた事であらう。

○源氏の「物のつゝましき程にて」の一段は、今から見ると、誠に子どもらしく無い、なんだか變なやうにも考へられるのであるが、當時は大抵早熟で、而かも上流の方は尙更であるから、現代の人の年齢から比べて、少なくとも五六歳、若くは八九歳位は、年長の人と同様に考へて居らぬと、當時の人情が解しにくいのである。

○元服。當時冠婚葬祭を、人間の四大儀式として鄭重に取扱つたが、存外此の加冠即ち元服の儀が重んぜられたらしい。高貴の御方は、大抵先づ十二歳位で元服になる。一條天皇は十一歳で遊ばされた。それより以下の例もある。これは支那の周の制が、「天子諸侯は十二、庶人は二十にして冠す」とあるのを適用されたらしい。高貴の方や富裕の人は、何時でも出来るが、貧賤の者は、費用がかゝるからなか／＼出来ないで、困却したのである。殊に、昔は口分田くぶんでんといふ制があつて、大人一人前にならぬと、それが貰へないのであるから、どうしても相當の年齢になれば、元服をしなければならぬのである。現今でも朝鮮人は、童形の者を「チヨンガー」と呼んで居て、二十歳を越えても元服の出来な

い者は、やはり童形で居るので、世人から非常に輕蔑される事になつて居る。現今の様な男子の風俗だと、一寸、大人か童か分らぬけれども、昔の様に、大人と子供とは判然と形態の變る風俗では、随分極りの悪かつたものであらう。

○大藏卿藏人つかうまつる。これは、どうも解りにくい。既に此の問題は、早く弘安源氏論議の際にも、不審の一項として提議せられたもので、右方は「大藏卿の藏人」と讀むべしと主張し、左方は、「藏人」を「理髮藏人」の意で、役名だと解しようといふのである。雙方共、確實な典據が無いので、いづれとも決定を見なかつたとの事である。

つまり、大藏卿が理髮の役で、藏人が「能冠」といふ陰役、即ち助役で奉仕したと解するか、大藏卿が藏人をかねたとするかだが、これもどうも變である。但、本文に誤字、脱漏があるかと云ふ事にして置くか、孰れにしても、判然とはしない。兎に角、引入の役が左大臣で、理髮を、大藏卿が仕うまつり、藏人などが相助け奉つたとやうに解して置く位より、しかたが無からう。但、實際は、理髮は藏人が致したであらうと思はれる。

○内侍宣旨承り。帝附の女官、常に臺盤所に詰めて居る内侍である。その内侍が、宣旨即ち御沙汰を承りて、大臣に傳へに参つたのである。これにも大分説があつて、或る説には「内侍宣の事であらう、藏人か何かが承つて來たらしい、こんな、大勢男子ばかりの酒席へ、女房が來る筈は無い」と云つて

るが、當時の宮廷の記事、枕草子でも、榮華でも、紫式部日記を見ても、なる程、奥表の區別は劃然として居り、然るべき女官が、表へ行く様な事はさらには無いが、皆無では無いらしい。明治初年の宮中の御有様は、大抵舊形を存して居たと申す事であるが、稀には、御沙汰で、右に類似した様なことのあつた場合も思ひ出されるから、これはやはり、上の女房の年輩の人が参つたことと、解して置くことにする。

○屯食 自分の郷里、東濃惠那郡の霧が城は、鎌倉幕府創立の頃、加藤次景廉の築城で、城としては、最古のものらしいのに、(勿論兵燹にもかゝり、ほんの一部分しか残つて居なかつたといふが、維新當時、それすら取り壊してしまつた由)、此の城内の、八幡宮の分靈祠が市外に在つて、毎年八月十五日の祭禮には、強飯を蒸して參詣の氏子に分つ事があつた。其の時世話人達が、部厚な美濃紙の二枚を重ねて、蒸し上つた強飯を、二杓子程宛紙に入れ、一寸ひねつては、どんく集つて來る子ども達などに配つて居るのを見た事がある。後になつて、屯食といふの、最初は、こんな物では無かつたらうかと考へて、今郷里の者に聞いて見ると、八幡の祭禮にはあるが、全く形ばかりで、勿論強飯を製して分つ等の事は、今は無いと云ふのである。當時の美濃紙は、非常に強くて、一寸、手で裂かうとしても、容易に裂けなかつた物であるから、強飯も包めたのであらうと思はれる。これも、参考の一つとして附記して置く。

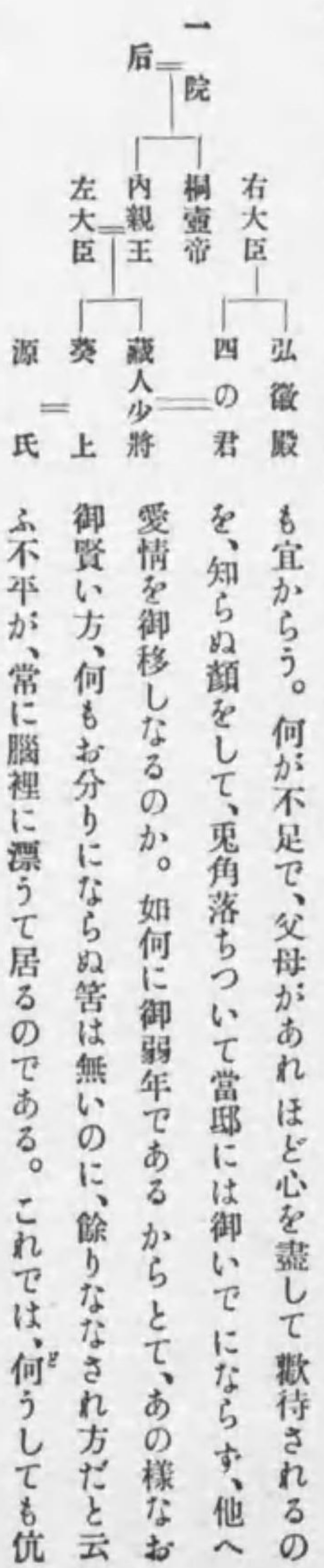
○さやうならむ人をこそ見め、似るもの無くも在しけるかな。大殿の君、いとをかしげ

にかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえ給ひて。この文の最初は、源氏の心として書いてあつて、終には、「いと苦しき迄ぞ覺しける」と、草子地から(第三者即ち作者から)書いて居つて、どうも判然しない。解りにくい。「玉の小櫛」には、「心にもつかず覺え給ひて、此の上に詞たらず脱したるか、作者がふと取り落したるものか、後人の誤寫か」と云ふ様に云はれて居る。なる程、判然しない。「心にもつかず」と「おぼえ給ひてなど」と「一字入れば分る。併し、追々後人の論じて居る様に、かう云ふ書きぶりは、源氏物語には後にも随分ある。即ち、登場人物の言とか、思はくとか、何時の間にやら、草子地の文となり、作者の考へになつて居る。いかにも、此の筆法は、文義を不鮮明にするので、善いとは云はれぬであらうが、併し又茲に、一種滑かな深みを生じて居る場合もある。そして、能く味へば、判らぬ事は無い。最近、幸田露伴氏などの小説にも、此の式が用ひられてあるといふ事を聞いた。兎に角、「心に染まない」とお考へになつて、と解して置けば宜からう。

桐壺帝と、左大臣と水魚の如き君臣の御間柄で、親御同志が御愛兒の結婚を約束されたのは、なる程、ありさうな徑路である。

然るに源氏は、夢寐にも忘れ難き理想の佳人藤壺とは、全く似ない違つた型の葵上は、いくら美しくても、賢くても、何うも氣に入らない。而かもそれが又、當の葵上は四歳の年長で、何だかまだ子どもともした方、彼を夫として傳くのは極りが悪い、と云ふ様な感じが、先づ最初にふと湧いて、それが先入

主色となつて居られるのである。そして、一寸取り澄ました様な人、愛くるしい所は少ない方である。舅が誠意を以て、熱心に行届いたお世話されるのは有難いが、實は有難迷惑である。大殿方面は結構づくめではあるけれども、甚だ氣づまりで、窮屈である。そこで又、葵上の方から云へば、如何にも、源氏は今上の御愛子で、才學も器量も、格段に優秀な、立派な方であらうけれども、自分だからとて、父は藤原氏の宗家の棟梁、當時第一の人、朝廷の柱石、帝の腹心たる左大臣、母は帝の御同母で、前の后宮を祖母として居る。その大臣家の長女である。源氏の一顰一笑に恟々して、さう迄御機嫌を取らなくて



儼が熱くゆく道理は無いのである。さらでだに、耽美的の情味に心酔して居る當時の人心には、一から十迄、その理想に適合して居る源氏の君の、才と美とが、十分十二分満ち足らひておはす上に、博愛同情の心の深甚なる事が、當時の若公達中には、稀に見る所の美點を、持つて在したのである。これが又大層な人氣であつたらう。



して見れば、此の君に於いて、聖人君子の徳あるにあらずば、此の時代の風潮から、一人超然脱出して、品行上の失脚を免がれる事は、恐くは至難中の至難事であらう。

藤原の左大臣は、桐壺帝御時代に於ける、事實上の太政大臣(當時左大臣が執政)として、政柄を執り、帝の御愛子に、嫡出の長女を配せ、又藤原の右大臣は、左大臣に亞ぐ勢力家にして、入内せる女のお持ちした皇子が、東宮に立たせられ、さしづめ御二代目の爲政者である。これが、私情の餘り圓滑ならぬにも關らず、左大臣が嫡出の長子、藏人少將(次の卷の頭中將)を強ひて婿に迎へて、源氏にさし亞ぎの若公達、時の寵兒たる理想の婿君を、負けす劣らず歡待して、其の出入に綺羅を飾り、風流を盡して、世人が羨望の的となつて居られたであらう有様は、「げにあらまほしき御あはひどもになむ」と、讚歎せしめた譯である。が、焉んぞ知らん、眞正の幸福は、外觀の美では計られぬ。その實富でも無い、權勢でも無い。儒佛ともに其の華を採つて其の實を收むるに未だしかつた當時に於いて、誰か眞の幸福を攫取し得るものぞ。唯、吾が日本固有の國民性の美點が、常に大自然的の美を禮讚共鳴する事に於いて、知らずく、儒佛の眞理極處に、時としては一致冥合するものであり、かゝる百事弛緩、廢弛的機運に向ひつゝある當時、猶一種捨て難きものあるは、これが何と無く、仄かなる自然的道義の葆光に育まれて居たからではあるまいか。甚だ贅言に失したかも知れぬが、聊か卑見の一端を附記した次第である。

○御方の人々。

〔湖月〕其の他にも、大抵「御方々」とある。さうすると、どうしても故更衣や、故祖

母夫人に仕へた女房達と解せねばならぬが、それでは「罷出散らす侍らはせ給ひて」が、一寸變になる。

猶、里邸(祖母夫人のもと)のも召し上せる事にならなければなるまいから、これは先づ、もと淑景舎に侍つた女房達を散らさず、仕へしめられたと解して、「徳川家河内本」の方によつて「御方」の方にして置く。

○光君といふ名。

此の一段を、「思しわたる」にて、一旦終つた所に更に附け加へたのは、なる程、

細かい心使ひである。則ち光君の印象を深からしむる力がある。猶次の帚木卷の冒頭に、「光源氏名のみことごとしう云々」とある、續き工合もよい。この段は贅であるといふ説もあるが、自分は採らな

### 帝 木

恋愛は下々、妙薬さあ！  
い、反村の人も殺さう時もある、式部。

光源氏、名のみことごとしう  
言ひ消たれ給ふ。容おほかなる  
に、いとどかゝるすき事どもを、  
末の世にも聞き傳へて、輕びた  
る名をや流さむと、忍び給ひけ  
るかぐろへ事をさへ、語り傳へ  
けむ人のもの言ひさがなさよ。  
さるは、いといたく世を憚り、ま  
めだち給ひけるほど、なよびか  
にをかしまし事はなくて、交野の

【口譯】 光源氏といふ名前ばかりが、仰々しく（お氣の毒なほ何てぬ、  
ど）言ひ誹されなざる、缺點も多くあらうのに（人間といふ者は、  
どうしても多少の缺點は免がれ難いものだらうに）、一層こんな  
好色（好色）などを、後世（源氏の死後）にも傳承して、輕々しい名を  
流しはせまいかと、秘密になされたであらうところの内證事を  
さへ（穿鑿して）語り傳へた、（世間の）人の口の悪さよ。  
さうは言ふもの（源氏の實際は）まことに甚く世間を遠慮  
して、（人の口端にかゝるまい。何卒）眞面目らしく（律義者然と  
して）ありたいと努力なされた爲に、なよやかな、艶つばいとこ  
ろは無くて、（あの粹者の）交野少將からは、（不徹底な漢だと）お  
笑はれになつた事であらうよ。この少將は、交野少將物語の主人

少將には笑はれ給ひけむかし。  
まだ中將などにもものし給ひし。  
時は、内裏にのみ侍ひようし給  
ひて、大殿にはたえだえまかで  
給ふを、忍ぶのみだれやと疑ひ  
聞ゆる事もありしかど、さしも  
あだめき目馴れたるうちつけの  
すきすきしさなどは、好ましか  
らの御本性にて、稀にはおなが  
ちにひき違へ、心づくしなる事  
を、御心に思しとどむる癖なむ  
あやにくにて、さるまじき御ふ  
るまひもうちまじりける。

公である。（本卷一九三頁評説参照）  
源氏がまだ（近衛の）中將で在らつしやつた時分、宮中にはかり  
伺候し、（忠實に）よく（お勤め）していらつしやつて、左大臣等  
へは絶間勝に御退出になるのを、他に秘密の愛人などが出来て  
の亂れ心でもあらうかと、お疑ひ申上ぐる事もあつたけれど、  
（引歌、春日野の若紫の摺衣忍ぶの亂れかぎり知られず）（本卷  
一九六頁解釋参照）。源氏はその様な浮氣らしいありふれた、露骨  
な好色めいた事は、元來お好で無い御性分で、偶には無理な、風  
變りな（平生とは、人を見違へる様に）、我から苦勞をする様な事  
を、どうしても自制する事が出来なくて、（それに）熱中すると言  
ふ、困つた癖があいにくあつて、許されない様な行爲を、時に  
はなされた。  
長雨（即ち梅雨）が、（毎日々々）晴間も無く降り續いて居る頃、  
（恰度又）内裏（即ち帝）の御物忌（の日）が繼續して、（此の物忌中  
に來合せた人は、物忌が明ける迄出る事が出来ないから、源氏

長雨晴間なきころ、うちの御物忌さし續きて、いとど長居侍ひ給ふを、大殿にはおぼつかなく恨めしくおぼしたれど、よろづの御よそひ、何くれとめしきさまに調じ出で給ひつゝ、御子息の君だち、唯この御宿直所の宮仕を勤め給ふ。

宮腹の中將は、中に親しく馴れ聞え給ひて、遊び戯れをも、人よりは心やすく馴れしくふるまひたり。右大臣のいたはりかしづき給ふ仕處は、この君も

いとものうくして(世に)好色がましきあだ人なり。里にてもわが方のしづらひ眩くして、君の出で入りし給ふに、うち連れ聞え給ひつゝ、夜晝學問をも遊びをも諸共にして、をさく立ち後れず、何處にても纏はれ聞え給ふほどに、自ら畏まりも置かず、心の中に思ふ事をも、隠しあへすなむ睦れ聞え給ひける。

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさく人少なに、御宿直所も、

は)猶更(宮中にいらせらるゝ儘にて)長居して居られるので、左大臣邸では、(ただでさへ兎角おいでが稀だのに、長雨が降り續き、御物忌迄がうちつづいたので)、待ち遠に恨めしく思つて居られるけれども、(やはり相變らず、源氏の)御装束、調度萬端、何かと珍らしい風に(結構な様にと)新調してはお届けになつて、(左大臣の)御子息の若殿ばらは、代る代る、(源氏の)御控部屋(淑景舎)への奉仕を勤めて居られる。(左大臣の子息達は澤山あるが、それらは皆別腹で、夫人の出は頭中將即ち桐壺卷での藏人少將と、葵上との二人だけである)

皇妹腹の中將は、(許多の兄弟の)中にも(特に源氏に)親しくお馴染申上げて、(さまさまの)音楽や遊戯をも、他の人よりは心易く、狎れしくふるまつて居た。

(頭中將も亦、源氏が大殿の方に冷淡な様に)右大臣が、大かけて歡待して居る大臣邸(四の君の所)へは、(通つて行くのを)嚴劫がつて、(他に愛人を求めて歩きなど)多情がましい粹者

であつた。(中將は)我が里邸(左大臣邸)のお部屋の設備を、さらびやかに目眩い程に(立派に)して、源氏の君が(同邸に)御出入なさるのには、(いつも)お連れ立ち申して夜も晝も(離れず)、學問も音楽も一緒にして、餘り大して引けを取らず、源氏が何處へおいでになる時も、(影の形に添ふが如く)お付き纏ひ申上げる程なので、自然禮儀も疎くなり、(行儀の垣を取り除け)、心の中に秘密にしてある事をも隠しきれず、(互に打ち明けあつて)おなれ睦み申上げられた。

(一日しよばくと)辛氣に降り通して、(なほ夜にかけて降る)物靜かな宵の雨で、清涼殿上も(どこも)大抵人少なで源氏の御控部屋(即ち淑景舎)も、何時もよりは暢びりとした心持がするので、(源氏の御部屋は、常に伺候の人が非常に多いのであるが、今宵は中將と二人だけで)御燈を近く寄せて、書見などなさるそのついでに、(源氏の御座)近き(所に置いてある)御厨子(棚の上)の、いろくの(色目かさねの)手紙や何か引き出し

例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて、書どもなど見給ふついでに、近き御厨子なる、

いろ／＼の紙なる文どもをひき出でて、中將わりなくゆかしがれば、源りぬべき、少しは見せむ。かたはなるべきもこそと



十帖源氏挿繪

(て)許し給はねば、そのうち解けて、かたはら痛しと思されむこそゆかしけれ。おしなべたる

て、中將が無暗に見たがるから、然るべきもの(見せても構はない様な)は、少しは見せよう。見苦しいものもあらうから」と言つて、(拜見を)お許しにならぬので、(中)その無遠慮に(書いてあつて、見せるのが嫌だ)、極りが悪いと思召す様なのが拜見いたしたいのです。誰にでも見せてよいといふが如き尋常

一様な平凡なのは、不肖ながら、分相應の贈答は致して居る積りです。各自女達が、男のつれなさを怨んで居る折々や、又は来る筈の人を待つて居るやうな夕方や何かの手紙が、

大方のは、數ならねど、程々につけて、書き交しつゝも見侍りなむ。おのがじし、怨めしきをり

見て見映はありませう」と(全部)お見せにならぬのを(怨むが、大切に)して、一生懸命にお隠しにならねばならぬやうな、(即ち他に)見せられぬ様なのは(こんな大雑端な、御厨子や何かに投

をり、待顔ならむ夕暮などのこそ見所はあらめ」と怨ずれば、やむごとなくせちに隠し給ふべきなどは、かやうのおほさうなる御厨子などに、うち置き散らし給ふべくもあらず、深くとり隠し給ふべかめれば、これは二の町の心安きなるべし。

【解釋】

この巻の中には、有名な雨夜の品定の條がある。即ち源氏君十七歳の夏のこと、桐壺巻には、その御出生より十二歳迄の事があつて、十三、四、五、六歳と四年間の記事が無く、十七歳に飛んでゐるといふのである。いかにもさう見える。が併し、前巻の末段、二條院修理改造のあたりから、結尾迄の短文中に、十二歳以後の事は、一寸合めてあると、言はば言はれぬ事もあるまい。

帯木巻の名になつた、此の帯木は、既に萬葉集などにも出てゐて、古くから靈木と言はれて居た。それには、遠方から見れば見えるが、近づくると消えてしまふといふ傳説があつたのである。

然るに、帯木は眞に近世まで現存してゐた古木で、信濃國蘭原の伏屋といふところの、山續きの森林にあつた。其は雌雄の靈木と稱して二本あり、雄木といふのは高く太く、雌木は稍低く、少し細かつたと言はれて居る。